
西風を見たもの What the West Wind Saw

kazne

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西風の見たもの What the West Wind Saw

【Nコード】

N0052J

【作者名】

kazne

【あらすじ】

内乱から七年。

ササラクは共和政をかけた、新たな道を歩み始めたが、いまだ安定な政情が続いていた。

首都カロードンで、一人の男が死体になったのは、そんな状況のもとだった。男はかつて、国王一族とともに国外に亡命した人物であったことが判明する。

危険を承知で、なぜ帰国したのか。

何者かに奪われた文書の行方は……。

つねに崖っぷちの管理人が綴る行き当たりばったり冒険ファンタジー（のつもり）です。

よろしければお付き合いいただけると幸いです。

なお、文章が長めなので、縦組（PDF）での閲覧をお勧めします。

管理人の日常・製作メモなどはこちら>

<http://donsakutale.jugem.jp/>

プロローグ（前書き）

一部にやや過激な描写を含むことがあります。年齢制限はしていませんが、勝手ながら、ご理解・ご了承のうえで、お読みくださいますようお願いいたします。

プロローグ

手紙の表書きが目に入るや、見覚えのある筆跡に思わず胸騒ぎがし、不覚にも指先が震えた。

よこした相手の真意を測りかね、読むべきか迷った。

謝罪か、懇願か。過去の糾弾か。このまま封を切らずに、火の中に投じるべきだろうか。

もし、復讐だというのであれば、こちらにも言い分はある。私が不実であったのと同様に、お前もまた裏切り者だった。

互いの名誉、互いの命をかけて我々は手を結び、そして信念の名のもとで、友情をぶち壊したのだから。

関係は、七年前に終わった。いまさら話すことなど、何もなかった。もう相手の顔さえ、思い出せなかった。

だが、突如として届けられた封書は、男の心をかき乱すのに十分だった。

償えというのか。

ならば、お前も同罪だ。

男は、封書を握りつぶした。固く閉じられた指の爪が、手のひらに食い込んだ。

——お前だけが苦しんだと思うな。

十

覗きこんだ水の色は、鉛色だった。

三人の男は、容赦なく照りつける昼下がりの太陽に背を向けて河岸に立っていた。

半時間前に呼び出されたときはまだ、王の首 亭で昼飯の途中だった。いつも常連客で繁盛しているが、連絡係の少年が、彼らが身につけている民兵の制服をめざとく見つけ出したのだ。

美味しいエールに、ヤマウズラと豆の煮込み。

未練がましく思い出したりなんかしなければよかった。いまはそのエールが、腹の中で泡立ってる気がした。目の前の腐敗した水みたい。

「ときどき、自分の役目がわからなくなる——なんてことはないかい、ルンタ？」

明らかに気乗りのしない様子で、男は盛大な溜息をついた。「とりわけ、今日みたいな日は」

ルンタと呼ばれた男は、草むらに足を踏み入れたとたん襲いかかってきた蚊の集団を、同僚のほうに追いやった。

「カロードン市の治安の維持。神の平和と、民の秩序を乱す行為の防止。その危険を引き起こした、もしくは引き起こす恐れのある人もの、その他あらゆる害悪の排除。宣誓書に書いてある」

きわめて明瞭な答えに男はがっかりした顔になる。

「ただここは港湾だ。税関のやつらは何してる？」

「浮かんだのは密輸品じゃないぞ」

「ドブさらいなら、あいつらのほうが得意だろうに」

「ぼやくな、トビアス」

「だってよ」

男は短く鼻を鳴らして、腐臭を放つ水面から突き出た腕を指さした。

「十日も前に運河に沈んだ亡骸を引き揚げろって言われたら、誰だって気が滅入る」

そもそも、とトビアスは続けた。

「徴税人どもは密輸業者とグルだ。見逃してやるかわりにしっかり分け前はもらってんだ。ところがこっちは割増手当もねえ。この旦那はもう、氣前がよさそうには見えないし」

かろうじて肉の断片が残っているそれは、打ち寄せる波にあわせてゆらりゆらりと揺れていた。

「見てみる。やつこさん、痺れを切らして、手招きなんかしてやがらあ」

「運河にも船幽霊がでるのかい？ だったら早いところ片付けちまおう——おっと。ずいぶん洒落たお召し物だが、ひよつとしてこの旦那、大陸から流れ着いたお客さんかね？」

「いや。どっちかっていうと、王党派のなれの果て」

「嘘をつけ」

「賭けてもいい」

見渡した深い葦の間には、呼び売りが捨てた野菜や果物の屑に混じって、大型の獣の骨が引っかかっていた。

老衰で行き倒れた馬か。市場に売られて行く途中、暴れて橋から落ちた牛か。

立ち上る瘴気は逃げ場を失い、川面を低く這っている。空気も、排水も塵芥も、市街地を横断する運河に流れこんで、埠頭から離れたこの湾で泥水みたいに沈殿する。

出口のない流れを漂い、堆積していく。

ここはこの街でもっとも過酷で、もっともみじめな場所だった。

人間はこんなところには近づかない。犯罪者か、死人をのぞいては

「《亡命者》か」

「ばれりや吊るし首だってわかっていても、戻ってくるんだ、連中

は。俺は故郷になんか戻りたかねえけどさ。命からがら戦地から帰って見たら、必死でたどり着いた我が家にゃ、とつくに別の野郎が住んでた。女房に逃げられた男を待っててくれるのは借金取りだけだ」

「泣ける話だなあ」

「もう昔のことさ」

「内乱のおかげで、奥さんはようやくあんたと縁を切れたなんて」トビアスは舌打ちをすると、もう一人に向き直った。

「いいか、カロードンに流れてくるのは男も女も訳ありばかりよ。新入り、お前さんも気をつける」

「キオだ」

それまでひたすら押し黙っていた若者は、おもむろに一言、そう答えた。

十

先月トビアスのところに配属されたばかりの新人は無口な男だった。

声をかければ返事はするが、自分から話しかけるところは見たことがない。身の上話も、とうぜん聞いたことがない。

肌の白さから察するに、太陽にはあまりあたっていない。鍛えてやろうにも体つきは華奢だし、はたして使い物になるのか、正直なところトビアスは不安だった。

とはいえ、ここはカロードンだ。いったいどんな事情で民兵なんかに志願したのか知らないが、後ろ暗いのは誰も似たりよったりだった。

「お前さん、北部の生まれだろう、新入り？」

「だから、キオだ。俺は、ラバック村のキオ」

「奇遇だな。俺もグレートナ州の出よ。うちの殿さまは、最後まで主教派に抵抗したつてのが自慢だが、おかげで俺は一生、日蔭者だ」
「なぜ」

「なぜ、だって？」

トビアスは驚いた声で言った。返事以外の言葉を聞いたと思えば、とんでもないことをたずねてくる。

「決まってる。王党派だと思われる」

「王党派なのか？」

「——新入り」

今度こそトビアスは、あきれ顔でキオを見た。

「どこにでも阿呆はいるもんだが、お前さんは筋金入りの阿呆だな。ここがどこだか知ってるか？ カロードンだぞ？」

ササラクの首都、カロードン。

人口一〇〇万都市。政治と商業の中心。七年前までは王都でもあったが、いま宮殿にその主はいない。七年前の内乱で国王は首を落とされ、幼い王子は、大陸から嫁いできた母親の故郷ラールゲールに逃れた。国王と彼の血統に忠誠を誓う、一握りの貴族たちと一緒に、かわって、神の名において権力を手にしたのは教会だ。

だが、神よりも人間のほうがはるかに無慈悲だという事実を、あの戦いは人々に思い知らせたのだった。

「そんな話をしてたと知れたら、ただちに牢獄送りだ。こどもだつて知ってるよ。お前さんのために言っておくが、いまみたいな質問を二度とほかの人間の前でするんじゃない。たとえ同郷だろうが、一切するな」

さて無駄話は終わりだと、トビアスは締めくくった。

「新入り。立ち見で日当をもらおうなんて、ずうずうしいことを考えちゃいないよな。さあ、あれを岸に寄せるんだ。え？ 水に入らなきゃ、届くわけがねえだろう。腰ぬけ呼ばわりされたくないや、とつと行け。いいか、丁重に扱うんだぞ。いくらやんごとなき生れのお方だからって、手なんか握るなよ。手首がもげちまうから。」

……ところで、ルンタ」

「なんだ」

「あれ、どこの葬儀屋だ？」

対岸で跪き、水中を観察している黒髪の青年を、トビアスは顎で相方に示した。話題を変えたのは青年の存在に気づいたからだ。

恐ろしい暑さにもかかわらず、全身が髪と同じ色だった。足元に広がったコートは、まるで不吉な大鴉のようだ。

「いったい、いつからいたのだろう。」

「さつきから水に顔くっつけて、顔色ひとつ変えねえ。まさか、てめえに見とれてるんじゃないだろうな」

優男だが、自分が女ならぜったい近づかないなとトビアスは思った。青年の目は、何かを真剣に追っているが冷徹だった。あれは「死」に慣れている人間の目だ。

希望を忘れた男の目だ。

「あの男は葬儀屋なんかじゃない」

トビアスと同様、ルンタもまた、男の姿を見るや表情を固くした。

「内務省のお役人だ」

「内務省？」

「内務大臣フランシス・レイヴンクロフト卿の懐刀。面はおとなしそうだが、よく切れるって噂だ」

「ここは釣りには不向きだと思うがね。そこらじゅうを蚊に食われちまう」

そんな大層な人物が、こんな不愉快な場所に、都合よく居合わせるはずはなかった。

身元不明の死体のことをどこからか聞きおよんだに違いないが、それにしても現れるのが早すぎる。おそらく、最初から探していたのだろう。

気の毒な男の正体を、知っている人間がいるのだ。それも、複数。内務省？

トビアスは、もうそれ以上、考えたくなかった。

「あの御仁にや虫も寄りつかねえ」

ルンタは肩をすくめてみせる。

「名前は、カルー」

それから一瞬の間のあと、にわかに冷え込んだ声で言った。

「血も涙もない、ってな」

十

そのときはげしい水音が上がり、二人は音の方向に向き直った。

「こいつは驚いた」

からみつく藻にまみれながら、汚水をかきわけ、キオが目標に向かつていくところだった。「あの新人、いい度胸だぞ」

トビアスとルンタは、もう少しだ、頑張れと、後輩に声援を送った。平然として見えたキオも、さすがに顔をゆがめて、歯を食いしばっている。

今夜はひとつ、おごってやらなけりや。だが、店に入れてもらえるかどうか心配だ。

それでもトビアスの頭のなかにはすでに、食べそこなったヤマウズラの姿がちらつきはじめていた。

「そうら、曳け！ 竿で寄せろ！ 押し上げる！」

声を合図に三人はその物体に組みついた。

しかし、思いきり力を込める間もトビアスは、川幅の先からカルーと呼ばれた男がこちらをじっと見つめていることを、忘れはしなかった。

一 カロードン 二点鐘—— 王の首亭

十

目抜き通りに出るや、たちまち人波に飲み込まれる。

道の真ん中では、荷馬車が轍にはまって立ち往生。足止めを食らった通行人に、これ幸いにと、呼び売りたちが寄ってくる。かわいそうな馬はすっかりやる気をなくし、荷台から男が罵声を浴びせている。そんな光景によそ見でもしようものなら、無理やり追い抜こうとする荷車や籠にぶつかりそうになる。「何をしやがる」と文句を言えば、「商売の邪魔をするんじゃない」と怒鳴り返される始末。なにしろ相手は口の達者な商売人、勝てるはずがない。

リンゴ、オレンジ、魚、花。そこらじゅうで露天商や売り子が声高にわめいている。気を抜くといつのまにやら、果物や野菜を押しつけられる。今日の稼ぎはまだ足りない、これからが本当の勝負。あと半時ほどの売り上げ次第で、今夜の一杯が決まるのだ。

十

「今夜は、景気よくいこう」

日没が近づいてもまだにぎわいの残る市門の前で、トビアスは、ルンタとキオに向かって言った。

カロードンの旧市街には南北に二カ所、市門がある。いまは民兵隊の詰所だが、敵の侵入をふせぐために大昔に造られた分厚い石積み市の壁のなかは、もともと警護にあたる衛兵たちの兵舎として使われていた。

その時代のカロードンはまだ、典型的な地方都市の姿をしていた。やがて運河が交易の道をひらき、人とものが集まってくるようになると、市街地は幹線道路にそって壁の外側に拡大をはじめた。

いまや市壁に囲まれた旧市街は、「カロードン」と称される一帯の中心に位置する、わずかな面積の土地でしかない。しかしその中枢機関である市参事会は、なお国政を左右するほどの発言力をもっているし、旧来の独占的な特権のおかげで、カロードン商人は貴族や教会もおよばない利益を手に入れている。

民兵などという自衛組織を保持する街も、カロードンだけだった。内乱のあと、各地の武装は徹底的に再編されたにもかかわらず、伝統ある特権にはばまれては新政府も手をだせなかったのだ。

だから民兵という仕事は、自分のような流れ者のちよつとした自尊心を満足させてくれるのだと、トビアスは思う。

そして目下、懐には今週の給料三十デナリと、銀貨一枚が余計に入っていた。布袋の重さがいつもと違ったのは、すぐにわかった。ルンタとキオの袋も同じだということは、これは出納係の気まぐれではない。

—— 気に入らない。

そう考えたのはトビアスだけではなかった。

見るとルンタもまた、日当以上の金を手にしながら、不機嫌そうな顔つきだった。新参者のほうは、表情の違いがわかるほどまだ相手をよく知らなかった。

やつとのことで泥水から亡骸を引き揚げてみれば、治安判事の令状とやらをもった連中が、突然やってきたのだ。

トビアスの質問には何ひとつ答えず、三人の目の前で、彼らは遺体をどこかに運び去った。唯一発せられた言葉といえば、うやうやしく読み上げられた令状だったが、その紙切れに本当は何が書いてあったのか、字の読めないトビアスには知る術がなかった。ましてや、出所不明の口止め料まで渡された以上、気の毒な遺体に関する一切を公にしたいくない人間が、このカロードンにいるということは

確定だった。

「それで、どこへ行く」

「王の首 亭」

「今日は金曜だ。たしか、《魚の日》だったと思うが？」

キオの指摘にトビアスは首を振る。

「お駄賃がもらえた日に、ニシンや干鰯をかじってろって？ 贅沢禁止法なんぞ、クソ食らえ。主教さまは、俺たちみたいなやしい身分の暮らしがわかっちゃいない。俺たちは、霞を食って生きてけるわけじゃねえんだ。それに——」

水なんかで気が晴れるか。

まずはエールだ。それからワイン。

リンゴ酒も悪くはないが、舌の上ではじけるあの甘酸っぱい香りには、どうにも故郷を思い出す。柄にもなく感傷的になっちまうから、あれだけは勧められたって飲んじやいけない。

「王の首 亭は、一年中いつでも美味しい料理を出してくれる。脂のしたたるソーセージや、香ばしいベーコン、骨付きのハム。それに焼菓子。バターたっぷりの黒スグリのタルト、ぎゅうつと中身が詰まったリンゴのパイ、とろとろ煮込んだイチジクと、アーモンドの……いや、なんとたつてこれからの旬は、ヤマウズラだな」

「民兵の立場で、法律破りとは感心しない」

「当局だつて見て見ぬふりよ。なにしろお役人さまも常連なんだ。

王の首 亭の親父どのの腕は、神さまが授けたもうた恩寵ってわけだ。それに、どこがどんな旅籠か、みんなわかってる——そうだ。新入り、カロードンの娘っ子はとうだ？」

トビアスは、つとめて陽気な口調を続けた。

王の首 亭に行こうと言いだしたのも、漠然とした、得体の知れない不安のせいだった。今夜ばかりはひと気があるところにいたほうがいい。下宿に戻ったところで、換気の悪い部屋にあるのは、湿っぽい寝床だけだ。こんな晩にひとりで過ごしたら、ろくなことを考えないに決まってる。

とにかく、乾杯だ。白パンみたいにやわらかい娘っ子を抱えて、歌おう。目を回してひっくり返るまで、踊ろう。そして最後は、いい匂いのするあったかいベッドに二人でもぐりこむ。

「なあに、心配するな。氣立てのいい子と呼んでやろう。なんならほら、あの広場で商売をしている行商にでも、知恵を借りりやいいちようどいいところにいたもんだ。ほら、とっておきのやつを、ひとつ」

めずらしいことに、トビアスの示した方角を見るなり、キオはわずかに眉を動かした。

ガラス瓶やらプラスチックやら、ガラクタ同然のあやしげな道具を積み上げた荷台を囲むように、人垣ができている。若い男もいれば、身なりのいい婦人の姿もある。その前で行商の男が、おおげさな身ぶり手ぶりだった。

丈の長い外衣のフードを目深にかぶっていたので、男の顔も服装もよくは見えなかった。だが、敏感にもキオの視線に気づいたか、意味深げに口許をゆがめると、馴れ馴れしく「そのかわいい兵隊さん」と、商売声で呼ばわった。

「さあて、お立会い。ここに馳せ参じましたるは、トゥルー口生まれの薬剤師、その名をルーグと申します。テリアカ、バルサム、エリキシル。なんでも揃えてございます。恋の成就を願うなら、ラバのひづめが特効薬。靈験あらたかな妙薬を、意中の娘の盃に、そうと一滴垂らすだけ。見るも聞くも初めての、情熱の荒波に身を任せれば、固くて冷たい寝台が、輝く方舟に早変わり。喜び満ちて恋人たちに、朝日が挨拶をいたします。さあさあ皆さま、ご笑覧」

一方キオは、あからさまな勧誘に目もくれなかった。

「行こう」

そのうえ足早にキオが立ち去ろうとするので、トビアスはにやりとした。

「なんだ、新入り。さてはお前さん、ひよっとして……」

「ニセ医者なんかに、用はない」

つっけんどんな言い草に、トビアスとルンタは顔を見合わせて思わず苦笑いをする。

これは、格好のからかいの種が見つかったぞ。見た目も中身も、この若者は、相当の堅物に違いない。となれば、なおさら鍛え甲斐があるというものだ。

「わかった、わかった。そんなに急がなくなつて、ヤマウズラは逃げねえよ。鍋中で、いい具合にあつたまつてらあ。気を悪くしたんなら、謝るさ。なあこら、新入り」

「キオだ」

乱暴に言つてよこしたキオの背中を、トビアスは追う。とつつきにくい若者の心のうちを、ようやく垣間見ることができた気がして、そのときのトビアスは少しばかりうれしくなつた。

ほんのわずかではあつたが、先刻までの不安さえ、薄らいでいくようだった。

「――不摂生は卒中の元、万病の元。ヒポクラテスも唱えたる、血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁、これらの乱れをとりのぞき、調和を回復してくれまするは、毎日たつた一粒の、靈妙なるこの丸薬」

雑踏のなか、王の首 亭へと足を向けた三人組に向かって、聞えよがしな行商の声はさらに高くなつた。「おお」というざわめきが始きたのは、男が手品じみた見世物を披露したからだ。

つられたトビアスが振り返つてみると、どうした仕掛けなのか、行商の手の上には炎が踊つていた。

立ち止まる者、拍手をする者。夕暮れ時の広場はにわかに騒々しくなつた。

「コオロギの灰、ハリネズミの針、ヒヤシンスのシロップ、パラケルススの百合。大陸に渡つては大学に医術を学び、東方を旅しては仙人より秘術を伝え聞く。科学と魔術の調合による、妙なる結晶にございます。貴重な品ゆえ残念ながら、ここにあるのがすべてです。お集まりの皆さまこそは、薬の真価がわかるお方。されば迷わず特別価格で、これらをお分けいたしましょう。必要ないとお思いなら

ば、それはなんと幸いな、健康の証拠と存じます。その健康をいつまでも、保つを欲するはあたりまえ。そこでお勧めいたしますのが、これらの秘薬にございます。お若い旦那も、きれいどころも、寄つてらっしゃい見てらっしゃい。さてさて……」

十

さて。

夜空に大聖堂の尖塔が黒く影を落とすところ、広場から運河へと伸びる道は、軒をつらねる飲み屋の喧騒で昼間をしのぐ活気だった。客引きと酔っぱらいが小競り合いを繰り広げる頭上に、悪趣味なその看板はぶら下がっている。王冠をかぶった男の生首が、目印というわけだ。

トビアスの期待にたがわず 王の首 亭には、今夜も美味そうな肉汁の匂いがただよっていた。

暖炉ではヤマシギの丸焼きがぐるぐるまわり、子牛肉のパイ包みは石窯から運び出されていくところ。背脂をたっぷり残した豚の皮は、ぷっくりふくらんだパンにはさまるために、かりっと焼きあがるのを待っている。

「どうだ。神の恵みに感謝つてもんだ。主教様の説教を聞くより、親父どのご自慢の料理を味わうほうが、みわざとやらのありがたみがわかる」

所狭しとテーブルに並んだ皿を前に、トビアスは満面の笑みだった。

こうして舌鼓をうっていると、平素と何も変わらない気がした。ヤマウズラはよく太っていたし、今年はジャガイモのでもいい。店の親父は顔を真っ赤にして、厨房とテーブルを行きつ戻りつしている。互いの声が聴きとれないほどの店内の騒がしさも、いつもと

同じだった。

もしかしたら頭の片隅に沈んでいるこの懸念も、自分ひとりの夢にすぎないのかもしれないと、唐突にトビアスは考えた。酔いつぶれて目が覚めてみれば、うんざりするような市民からの陳情に忙殺される毎日が続いているのかもしれない。

遅れず、休まず、働かず。民兵になつてから五年余り、我ながら模範的だった。

そうこうするうちに短い秋は終わり、きびしい冬がやってきて、いつのまにか新年を迎える。そうして自分は何も果たせないまま、またひとつ歳を重ねていく。

いつもと同じように。

——結局、俺は何も変わっていないのだ。

トビアスは、誰に対するわけでもない苦笑いをもらして、同僚たちをみやった。

ルンタは二杯目のエールをすすり、キオはせつせとシチューをほおぼっている。あいかわらず腹のうちは読めないが、このときばかりは若者らしい食欲だった。

間近で見ると、豊かな濃褐色の髪や、幼さを残す頬の丸みに、トビアスはあらためてキオの若さを感じた。ひきかえ自分は、キオと同じ年頃の子どもがいてもおかしくない中年だった。

「キオ。お前さん、いくつになる」

トビアスがたずねると、キオは皿から目をあげた。

「二三。来月で、二四」

「一昨年の飢饉は、ラバックもひどかったってな」

「そう聞いている」

「お前、ラバック村の出身じゃないのか」

「俺は一七でグレットナを出た」

「ふうん。そのあとは、何をしてたんだ？」

「いろいろ」

「いろいろ、か。」

一七のころのトビアスは、丘のうえで羊を追っていた。州どころか、村から出たことさえなかった。

だからグレトナ伯との婚礼のために、カロードンから新婦がやってきたときには、本当におどろいたのだった。

なだらかな斜面を覆う一面の緑のなかを、六頭立ての馬車が何台も連なつて走り抜けていった。黒光りする首をしゃんと起こし、長い脚で駆ける馬たちの姿はなんとも優雅で、農耕馬とは大違いだった。黄金の馬具が陽光を反射して輝いていた。

一瞬だけ目にした黒髪の娘は、王女さまかと思うくらいきれいだったから、父親の職業がカロードンの服地商だと知ったときには信じられなかった。もっともその縁組は、金に困った貧乏貴族と、爵位が欲しい商人の、双方の思惑によって結ばれたものだったと大人たちの下世話な噂話で聞いた。

だが、たとえ仕組まれた婚礼であつたとしても、あのきらびやかな一行は、辺境の少年に吹きこんだ初めてのカロードンの風だった。

「まあ、そんなもんだよな」

以来あこがれ続けたカロードンに、自分は思いがけない事情で流れ着くことになった。人生というのは、奇妙な因縁があるものだとトビアスと思う。

一方、目の前の若者は、みじめつたらしい中年男の諦観とは無縁だった。ときどきキオは、おどろくほどまっすぐな目でこちらを見返してくることがある。そんなまなざしを、自分はいつのまにか失ってしまった。かわりに身に着いたものといえば、腹の周りのぜい肉と、面の皮の厚さぐらいだ。

ちくしょう。俺は、よく知りもしない若造に嫉妬なんかしてやがんのか。

トビアスはなかばやけ気味に「親父、ワインをくれ」と怒鳴った。案の定、そんな先輩の憂いには気づく気配もなく、キオの視線はトビアスを通り越した先に向けられていた。

「あれは？」

「ああ、あいつか」

勢いよく流しこみすぎたワインのせいで、トビウスは返事どころか呼吸もできない状態だったから、かわりに答えたのはルンタだった。

「新聞の朗読さ」

「朗読？」

直後、人垣を割って現れた男が店の中央にあるテーブルに飛び乗ると、周囲から拍手と喝采が起きた。男は手にしていた紙束を蠟燭の火にかざし、体格にふさわしい威勢のいい声で「諸君」と呼びかけた。

「諸君、静粛に、静粛に！ 明日発売の早売りだ」

「あいつは、セルトーって野郎だ。植字工でな。あんな図体のくせに、細かい活字を組んでおまんまを食ってる。驚いたことに、ああ見えても読み書きができるんだ」

「外国の名前だ」

「親父さんが外国生まれだったのさ。やつ自身はカロードン育ちだ。ガキのころからつましく徒弟修業を七年やって、市民権だつて取得した。俺もトビウスもササラク人だが、どっこいカロードン市民にやなねえ。ここはそういう街だ」

ルンタは諦めとも羨望ともつかない口調で、トビアスの肩を叩いた。「ま、俺たちは職人って柄じゃねえからな」

「お前さんと一緒にすんな」

そのセルトーは、簡素な舞台のうえで芝居つ気たつぷりに咳払いをした。

「さあ、カロードンで一番早い『ガゼット』だよ。『このたび聖徒議会は、一連の土地強制接收にかかる下院修正案を再度否決。会期中の条例成立は困難となった。これを受けて、来週に予定されていた内務大臣フランス・レイヴンクロフト卿とルーカン主教の会談は、延期されることが確定。聖庁の公式発表を待つものである』……ああ、それ見たことか。これで両者の決裂は決定的だ。

次——『先月ラナーク沖でラッゲールに拿捕されたラヴィニア号にかかると人質交換の費用は、少なく見積もっても四万ギブリンを超える模様。海軍省は来月初旬に行われる交渉には、カドワラ号艦長ヘクター・シドマス提督を派遣することを決定した』。なんという愚劣。同盟国への報酬金で国庫はすつからかんだというのに、我が国は三六門のフリゲート艦を敵に奪われただけでなく、そのうえ四万ギブリンも失うのか。シドマスといやあ、シノンの海戦で味方を五隻も沈めちまった男だぞ。そんなまぬけを指名するなんて、海軍大臣ももうろくしたもんだ」

セルトーが同意を求めて向き直ると、すかさず店内には不満の聲が満ちた。軍備増強のためにワイン税をあげるといふ話題になると、「大地主たちは土地を手放そうとせず、庶民の懐からばかりしぼりとる」と、いつそう憤懣は大きくなった。

だが、そうした客たちの目当てはどちらかというと、お堅い官報よりも、高貴な身分の人間を餌食にすることで定評のある『カロードン・クロニクル』だった。

「『セイNZベリ男爵、四度目の結婚を発表。お相手はカロードン市参事会議員をつとめる金匠スミス氏の三女、ハンナ嬢一六歳』。これこそ悪徳と思し召せ、可憐なレイディ・ハンナが、カマキリ野郎の手にかかったぞ。老いばれの好色漢め、まだ干からびていないらしい。この墮落を取り締まらずして、何のための民兵だ。聞いているか、その穀つぶし」

そうだそうだと、顔見知りたちが一齐にトビアスを見た。ご指名とあらばしかたがない、トビアスも負けじとやり返す。

「うるせえ、貧乏人どもは黙ってろ」

ふたたび、周囲からは不満の聲。勢いづいたセルトーがたたみかけるように言う。

「おうおう、お前なんか、財産は借金しかないじゃねえか。女房にも逃げられたくせに」

「それがどうした。不幸自慢なら、いつでも勝負してやらあ」

「なんて恩知らずな野郎だ。家なし、職なし、女なしだったお前に、寝場所と勤め口を世話してやったのは誰だと思ってる」

「ぐう」

トビアスが反撃のための言葉を探しているあいだに、セルトーは「こいつはすごいスキヤンダルだぞ」と言つて、『カロードン・クロニクル』を高々と持ち上げた。

「『グランヴィル座の女優レティシア・フィンレイが、失踪。駆け落ちか?』」

店内には歓声と口笛の嵐が吹いた。

「レティシア・フィンレイといやあ、先代の王さまも熱を上げた、当代屈指の美女じゃないか」

「いい金づるがついたに違いない」

「いや、国王陛下にもなびかなかった女だ」

「いやいや、最近は貴族よりも、株屋のほうが羽振りがいい。ああ嘆かわしいかなこのご時世、女心も金次第だ」

「理由が金なら諦めもつくつてもんさあ——」

植字工と民兵の見苦しい罵りあいなどそっちのけで、たちまち男たちは、女優をたらしこんだ不埒な男の詮索に夢中になった。

内乱の際に女優が国王との関係を追及されずにすんだのは、当時のカロードン主教といい仲だったからだとか、そのあと噂になった劇作家は、教会をおちよくった戯曲を書いたせいで哀れな末路をたどつたらしいとか、聖俗を問わず愛人を選ぶような悪女であるとか、相手が変わるたびに男の年齢は若くなつていつていつていとか、云々。

だからその背後で、キオがセルトーに近づいていったことに気をとめた者はいなかった。セルトーと二言三言交わすと、キオは小銭を相手に渡し、かわりに『カロードン・クロニクル』を受け取った。「おい、あの新人りは何をたくらんでいる?」

トビアスはヤマウズラの存在をすっかり忘れてしまったみたいだった。脇からちゃっかり伸びてきたルンタのフオークが、トビアスの皿から胸肉のかたまりを失敬しても止めなかった。

「芝居小屋にでも通う気なんじゃないかい？」

「そうじゃねえ。俺が訊きたいのは、あの若造は字が読めるのかってことだ」

トビアスの知る限り、文字を読むことができるのは、この店にいる連中の三分の一程度だろう。字が書けるものとなれば、さらにその三分の一だ。

かつてトビアスが入隊時に提出した宣誓書だって、形式的に係官が読み上げて、トビアスがしるしを残した。自身の名前さえ書けない人間が唯一、記すことができるのは、署名のかわりに短い線を二本組み合わせただけの、簡易なバツ印でしかないからだ。

「どうやら、そうらしいなあ」

紙質やインクが粗悪なうえ、薄暗い光のもとでは細かい印字は判読がおぼつかない。紙面に顔を近づけ、手早く頁を繰るキオの様子を眺めながらルンタは言った。

「読み書き計算ができりゃ、民兵なんかよりもっと割のいい仕事はあるからなあ」

ルンタの口調はあいかわらずのんびりとしていたが、トビアスの腹のなかでは、忘れかけていた動揺がにわかに悪さを再開したようだ。

「そんなやつがなんで民兵なんかやってんだ？」

「本人に訊けよ、トビアス」

ルンタの言うとおりだった。

小心者め、何の心配している？ あの若造が何をしたっていうんだ？ キオが配属されたのは半月も前のことだ。昼間の一件と、なんの関わりがある？

トビアス・コウクニー、疑心暗鬼はお前さんの悪い癖だ。ひとつが気にかかる、一切が手につかなくなる。邪魔でも入ろうものならとたんに怒りっぽくなる。

そんなだからいつも、女に愛想をつかされるんだ。

きつと自分は黒胆汁質なのに違いない。

胆汁過多、血液の混濁には海水浴がいいとか聞くが、海なんて見たこともない。それに町医者なんかにかかるもんじゃない。連中は寫血が大好きだ。かならずといっていいほど寫血をすすめる。あれだけはご免だ。

いまこそ、あの薬売りを頼るべきなのだろう。明日になったら広場に行つて、薬売りの男を探そう。そして、ご利益がありそうな例の丸薬を買い求めよう。薬局の専売薬より値段ははるに違いないが、今日もらった銀貨ならお釣りがくる。

「トビアス」

「なあルンタ。さつき広場で見かけた薬屋、どこの宿屋に泊つてるか知らねえか」

「見てみる、トビアス……」

「なんだつて？ よく聞こえない。もっと大きく、はっきりと言え」
「馬鹿、大声を出すな」

考える傍から、トビアスの頭のなかは行商の売る「靈驗あらたかな妙薬」のことでいっぱいになりつつあった。それゆえ、店内のざわめきが一瞬で引いたことにも、突如として戸口に現われた深紅の装束の集団にも、ルンタに肩を掴まれて初めて気づいたのだ。

男たちは戸口を背にして一列に並び、周囲を威圧する視線で店内を見渡した。

手入れのゆきとどいた帽子に、磨き上げられた長靴。腰の剣帯にぶらさがる長剣。

そして彼らの外衣の背には、ササラクを示す漆黒の竜の刺繍があった。

「——国軍兵だ」

誰かが、そうつぶやいた。その声が端まで届くほど、店内はしんと静まり返っていた。話し声ひとつ、食器の音ひとつなかった。

沈黙のなか、客たちのおびえた視線を集めながら、一人の国軍兵が進み出た。

男の目は、迷わずトビアスたちに向けられていた。

王の首 亭の親父は顔面蒼白だった。

禁欲を義務とする「魚の日」に肉料理を出していたのだから、しかるべき処分があつて当然である。

とはいふものの、事情は当局だつて知っている。いまさらそんな罪状で立ち入るくらいなら、摘発すべき店はほかにいくらでもある。いかかわしい饗応が行われているという居酒屋に踏み込んでみたら、二階の窓から素っ裸で飛び出してきたのは上官だったなんて話もめずらしくない。

だいいち、王の首 亭は市壁のなかにある。たとえ国軍といえども、市の許可なく査察にふみこんだりすれば、参事会の長老たちが黙っているはずがない。

となると、そうまでして彼らがここに現れた理由は、ひとつしか思いあたらなかった。

「カロードン市南門民兵隊所属、トビマス・コウクニー、ルンタ・ドゥーデン、キオ・リウイ。暴動法第一七条に基づき、反乱および扇動幫助の容疑により、治安判事の名において貴殿ら三名の出頭を要求する」

驚愕から数秒遅れて動揺がやってくる。

ホウジヨ?

いったい、それは何だ?

俺たちが何をしたつて? 品行方正には程遠いのは承知だが、反乱だと?

トビマスの全身は硬直し、たちまち汗が噴き出した。国軍に連行されて、なにごともなく戻ってきた人間をトビマスは知らなかった。助け舟を出そうという者も、この場にはいなかった。

人でなしめ。毎晩顔をあわせるたびに管を巻くような連中が、そろって目をそらしやがって。

「本件に関する貴殿らの陳述は、法廷でのみ許可される。また、いかなる理由であれ召喚を拒否する場合、ただちに貴殿らの身柄を拘束し、送致するものとする……」

だが奇妙なことに、この感覚には覚えがあつた。

七年前、村ごと強制徴募に遭つたときか。武器の持ち方もおぼつかないまま前線に送られる途中、主教派に奇襲をかけられたときか。敵も味方もわからない血と泥のなかでのたうちまわりながら、意味をなさない言葉を絶叫していたときか。

じわじわとせりあがってくる焦燥感は、どこか懐かしくさえあつた。しかし、いまは思い出に浸っている場合ではない。

トビアスは潔く立ち上がった。少し脚が震えたのは、隣のルンタにはばれたかもしれない。

「俺がコウクニーだ。用向きはそれだけかい？」

赤色に映える黒竜の姿がこれほどまがまがしく見えたことはなかった。いまにもそのかぎ爪で、トビアスたちに襲いかかつてきそうだった。

「どうやら、借金を回収しに来たつてんじゃないらしいな。取り立てなら、二言目には金を返せって言つから」

「我々に同行してもらおう」

「借金取りのほうはまだ、ものの頼み方を知ってるぞ」

「これは依頼ではない。命令だ」

「だったらなおさら、気が乗らねえさ」

そう言つてトビアスは、肩をすくめた。本当は笑いたかつたのだ。が失敗した。

「少なくとも金貸しは、命までは取らねえからな。金を貸した相手を殺しちまったら、元も子もない」

店内に八名。おそらく店の外にもいるだろう。

たかが民兵三人をとらえるのにご苦労なことだと、トビアスはほ

とんど感心していた。

国軍とちがつて、民兵は武装を認められていない。唯一所持を許されているのは刃の細い短刀だが、これは日用品であって武器ではない。鋼鉄製の長剣に、庶民の道具が対抗できるはずがない。

そもそも正規軍とくらべたら、寄せ集めの民兵など素人同然。

にもかかわらず、大挙してやってくるとは、対象が逃げおおせる可能性があるとみているのか。なるほど、国軍というのはよほど人手があまっているか、自分たちを確実に連行しろと言われているか、どちらかに違いなかった。

「とにかく、ここは外に出たほうがよさそうだ。店のなかで騒ぎなんか起こしたら、おやじさん特製のベーコンに、二度とありつけないっちまうからな」

目まぐるしく考えをめぐらせながら、そのときすでにトビアスの頭のなかには、カロードンの地図が描かれていた。王の首 亭の周辺なら、酔っぱらっていたって迷うことはない。どれだけ入り組んでいようが、狭い路地裏の一本まで知りつくしている。市境の東にある下宿まで、目隠しでだってたどり着ける。

俺はカロードン市の民兵だ。いまはここが、俺の街だ。

トビアスの提案に、国軍の男は小さくうなずいた。

運河まで立ち止まらずに走り抜けたとして、少なくとも四分。通りに面した店の戸口はとくに囲まれているはずだから、裏口から外に出る。監視役がいそうな辻はいくつもあるが、すべてに見張りを配置するには、旧市街の道筋は複雑すぎる。

必ず抜け道はある。なければ、作るだけだった。

そうと決まれば時間稼ぎだ。店の戸口まで十数歩しかない。

背後でルンタが椅子を動かす気配があった。とぼけてばかりいる男だが、いつもつきあいだけはいい。トビアスの考えはおおかた想像がついているはずだ。

なるべくのろのろと、トビアスが部屋を横切りかけたとき。いきおいよく扉が開かれた。

国軍兵はいつせいに戸口を振り返った。

抜きこそしなかったが、皆、剣の柄に手をかけて、扉の前に立ちふさがる人影をにらみつけている。

「これは、これは。国軍の旦那さま方までお揃いとは、恐悦ですな」
殺気のこもった視線を一身に受け止めつつも、間延びした声だった。どこかで聞いたとトビアスが思うと同時に、暗がりから悠然と、声の主が姿を現した。

「何者だ」

「行商の薬屋にございます」

なんと偶然。

そういえばつい先刻まで、自分はこの男のことを考えていたのだった。たしか、ルーグとかいう名前だ。

足首まである外衣のせいで、男はずいぶんと長身に見えた。フードを深くおろして、顔の大半をおおっているのは、広場で商売をしていたときと変わらない。足音はほとんどたてず、衣擦れの音だけで国軍兵に近づいていく。

蠟燭の炎がゆらめくと、男の影はいつそう濃密になったような気がした。

昼間は気づかなかつたが、男がまとう空気の異様さからトビアスは目を離せなかった。

「国から国へ、町から町へ、心の向くまま気の向くまま。小生にお求めになりたいものがございましたら、遠慮なくお申しつけくださいまし。今宵は特別に、出張販売もいたしましょう。テリアカ、バルサム、エリキシル。なんでも揃えてございます。トモシリソウは壊血病に、吐酒石は解毒に、硫黄は痔症に」

例によつて商売声は、静まり返つた店内によく響いた。大胆といつか、無節操というか、兵士たちの存在に身構える様子もない。臆するどころか、恰幅のいい国軍兵の前で突然立ち止まると、行商の口許がにやりとゆがんだ。

「旦那。オトギリソウはいかがです？」

「オトギリ……？」

「その昔、斬首された男の血から生まれた薬草にございます——ある種の問題でお悩みの殿方には、特効薬となりましょう。旦那は誉れある国軍の兵でいらっしゃる。掲げる旗は空高く、天を衝くがごとくあれ。しかし哀れ、ご立派な矜持とは裏腹に……」

遠目にも不気味な笑みだった。

周囲の食い入るような視線に気づいているのかいないのか、ルーグはその長身をかかめると、国軍兵の耳元に口を寄せて、もつたいぶつた口調で言う。

「こらえ性のないひ弱な旗竿は、この国のご婦人方を失望させるばかり」

「旗竿……？」

言われた男は目をしばたいて訊き返した。

一呼吸おき、行商の意味するところをつかんだ客の間で、どつと笑いが起きた。国軍の一行が現れてからずっと沈黙を保っていた店内に、活気がよみがえる。兵士たちでさえ、同情と好奇の入り混じった複雑な表情で同僚を眺めていた。

ただ一人、自分が嘲笑の的にされたことを知った男は、爆発間近の赤面だった。

「無礼な……！」

怒りと狼狽で声まで震えている男は、そう叫ぶとついに抜刀に及んだ。

長剣の刃が蠟燭の光を集めてぎらりと光る。店内の笑い声は一瞬で引き、ざわめきへと変わった。

「おっと……これは失敬。依頼人の秘密を開示するは、ヒポクラテ

スの誓いにもとる行為でございました」

「いいか、こいつの言うことは嘘っぱちだ。なにかも出まかせだ。インチキだ。俺はクルコナの港で、この男に会ったことがあるんだ。瘦身に効果がある万能薬などと偽って、おぞましい薬を売りつけた、我慢ならない詐欺師だ……！」

鼻息も荒く、男は行商ののしつた。だが悪びれずにルーグが言う。「ご記憶いただき光栄でございます。今後ともぜひ、ご贖に」

「贖もくそもあるか、ヤブ医者め。一粒に一五デナリも払った対価がどんなありさまだったか、知らないとは言わせないぞ——」

「小生の薬には、かくも確かな効能がございます。毎晩たったの一粒ずつ。あわせて五粒を服用するだけで、旦那の望みはかないましよう。と小生は申し上げたはず」

あくまでも飄々たる返答だった。それがいつそう相手の怒りを誘っているのも、明らかだった。

「五粒だと？」

そう叫んだ男の声は裏返っていた。「あれを、五粒？ 正気か、それとも俺を殺す気か？ 貴様のよこした『下剤』は、七転八倒の苦痛だった……！」

言ってしまったから国軍兵は、まんまと墓穴を掘らされたことを悟った。

公衆の面前で受けた屈辱を晴らすどころか、恥の上塗りだった。羞恥と、自身に対する憤りとで男が言葉を失っている間に、ルーグはさらに言う。

「病と痛みは、ともに同一の原因を分かつもの。小生が旦那に処方いたしましたのは、不純な血を排出し、混濁物質に侵された体液を発汗させ、体内を浄化する秘薬でございます。生命の本源は血液にあるからして、活力を失い、乱れた調和を回復するには、ときに強烈な浄化を必要といたします。旦那方はよくよくご存じではありませんか。なにしろ、それはまるで……」

そう一息に続けると、ルーグは店内を見回して言い添えた。

「まるで、流血の止まぬこの国のようでございますから」

トビアスは息をのんだ。思わず、身震いした。

ルীগの言葉を聞いたとたん、それまで笑いをかみ殺しつつ泥仕合を傍観していた国軍兵たちの顔色が、はつきりと変わった。

店内に戦慄が走る。

男たちは一人、また一人と無言で剣を抜き、行商を取り囲んだ。

戸口近くの客は、いつのまにやら壁際に立ち退いて、成り行きに目をこらしている。

当のルীগといえば、自身に向けられた刃を目にしてもなお、不穏な薄笑いを浮かべていた。

「公の場で、いささか物騒ではございませんか」

「貴様の口はよく働くが、慎みを知らぬとみえる」

「商売熱心ゆえ、ご容赦を」

激昂する国軍兵相手に、一向にひるむ様子がなかった。むしろ、あおってさえいるようだ。

「貴様のようなヤブ医者こそ、この国を破滅させる害悪だ。何かにつけては瀉血だ薬だと、国民の身体と精神をもてあそび、金も活力も吸いとる悪党だ。善良な市民を惑わすことのないように、その不道德な舌を斬り落としてくれる。恥ずべき貪欲を悔い改めよ——！」

「国のためであれば、悪癖に侵された他人の血を流すことをいとわない旦那方が、ご自身の静脈にわずかばかりの傷をつけるのに、なにゆえ尻込みをなさいます。瀉血など、まったくささいな治療法でございます。ですが……」

言いながらルীগは、鼻先に突きつけられた切っ先を手袋をした手で払いのけた。

はだけた外衣の下で、帯にぶら下げた調剤瓶や薬草袋が揺れる。テリアカ、バルサム、エリキシル。テリアカ、バルサム、エリキシル。

トビアスは頭の中で、男の口上をくりかえした。はたして、それ

がいま役に立つとは思えなかったが。

ルーグはそのまま「悔い改めよ」と怒鳴った男に詰め寄った。そして驚く男に長い指先をつきつけると、それまでの商売用とはやや異なる声音で言い放った。

「偽りのない目でよくごらんなさいませ。よってたかつてあちこち切り裂いた拳句、いまや我が国の政体は、衰弱死の寸前」

見れば国軍兵も常連客も、王の首 亭の親父までが、行商の言葉に耳を奪われていた。

ルーグの意図はまったく不明だが、好機だとトビアスは思った。これにつけこまない手はない。逃げ出すならいましかなかった。

しかしいざ実行するとなると、躊躇もあった。

本当に逃げるべきなのだろうか？

ここで逃げ隠れすれば、反乱だの反逆だのいう馬鹿げた容疑を、認めたことになりはしないか？

後ろめたい事情はなにもない。ならば連中の要求に応じて、出頭してやればいいではないか。法の前で正々堂々、申し開きをしてこの身の潔白を示せばいい。

正反対の考えも浮上してくる。

国軍の取り調べがいかにも容赦がないかは、容易に想像できた。疑いをかけられたが最後、彼らはトビアスが屈服するまで尋問し、責め続けるだろう。連中は決して自らの過ちを認めはしない。いつさしいしない。

一七条に背いたものは縛り首だ。絞首台にぶらさがった自分を見て泣くことになる人間は誰もいないが、おそらく罪を宣告されるよりも先に、生命は失われているに違いない。

さあ、どちらを選ぶのだ。

迷いだしたらきりがないのは、嫌というほど分かっていた。だが、懷疑はつねにトビアスとともにあった。臆病者の習性を呪いつつ、トビアスは周囲に目をさまよわせた。

——キオはどうした。

見ると若者もまた、こちらをうかがっていた。まっすぐにトビアスの目を見ていた。そのまなざしにぶつかったとたん、トビアスははっとなった。

己の優柔不断を、キオに見抜かれたと思った。

トビアスはにわかに動揺をおぼえたが、若者の目には不審も軽蔑の色もなかった。かわりに、他人の欠陥になど関心はないという無表情で、キオの視線は厨房のなかにある裏階段をトビアスに示した。国軍兵の位置からは死角になる。

逃げるというのか。

視野の端に退路をとらえながら、当然だろうとトビアスは考えた。キオは若い。一七歳で故郷を捨てたと言ったが、それは目の前に進むべき道があったからだ。どこまでも続く、見果てぬ世界への道が。なのに突如、開いたばかりの扉を閉ざされるなんて、頑固そうなああの若造に納得できようはずがない。それも、謂れない理由では俺は？

目指した場所は、とうの昔に見失ってしまった。何ひとつ成し遂げられないまま、いや取り返そうともしないまま、迷い込んだカロードンでひたすら酒を食らい飯を食らい、ぜい肉をたくわえ、無為に生きてきたこの俺はどうなのだ……？

際限のない自問におぼれそうになるトビアスの意識を、国軍兵の怒号が 王の首 亭へと引き戻した。

「ヤブ医者の方で、神聖な政府を冒瀆するか！」

「おや、勘違いをされては困ります。ご存じのとおり、小生の申すことはすべて、嘘っぱちの出まかせでございますから」

ルーグはぬけぬけと答えた。対する国軍兵の顔は、赤を通りこしてどす黒く変色している。

「それに小生は、ヤブ医者ではございません」

そのときトビアスは、薬屋が自分の方を見たような気がした。相手の顔は布に覆われていたが、なぜか互いの目があったと思った。外衣の下で手がそつと動き、長い指をトビアスに向けた。

——走れ、トビアス。

薬屋の幻術にかかったみたいだった。

考える前に身体が動いた。

トビアスはルンタの腕をひつつかむと、厨房めがけて走った。もつともトビアスよりも、キオのほうが早かった。あきれるくらいの身軽さでテーブルからテーブルへと跳び渡ると、トビアスとルンタにむかつて「二階へ！」と叫ぶ。

国軍兵は何かわめきながら、あわててキオの行く手をさえぎろうとした。ところが、長剣を抜いていたのが災いして、戦闘教練を積んだ国軍兵といえども、混雑した店内では迅速な動きがとれなかった。

「ただの二セ医者にございます——」

ルীগの声を背中で聞き、トビアスとルンタは登り口に飛びこんだ。

+

裏階段は、人ひとり通り抜けるのがやっとという狭苦しさだった。明かりはなく、トビアスもルンタも何度も転びそうになった。二人のすぐ後ろから、キオが駆けのぼろうとしている。入り乱れる客をかきわけて、国軍兵たちが厨房に殺到する。

「先に行け！」

ひと声そう怒鳴ると、キオは身をひるがえして、先頭の男の顔を蹴りつけた。鼻柱を直撃されたにもかかわらず、勇猛な男は唸り声をあげ、キオめがけて長剣を突き出した。身を伏して刃先をかわす。それもつかの間、次の一撃がキオを襲う。

再度キオがやりすごすと、鋼鉄の刃は柱にめり込んだ。木っ端が飛び散り、破片でも当たったのか、キオが顔をしかめた。

キオが彼らを食い止めている間に、二階にたどり着いた。

トビアスは、まだ尻込みをしているルンタを窓から押し出した。

旧市街の建物は、ほとんどが二階か三階建ての木造だが、屋根の傾斜が極端に険しい。案の定、屋根を見おろしたとたんルンタがぼやいた。

「あんたと違って、高いところは苦手なんだ」

「俺がどうしたって？」

「何とかと煙は高いところにのぼりたがるっていうじゃないか」

「無駄口を叩く前にとっと行きやがれ、阿呆」

足を滑らせて転落するのが先か、朽ちかけた木の瓦を踏み抜くのが先か。どちらも時間の問題に思われた。

とはいえ、屋根に出て足元を見たたん、トビアスもめまいを起こしかけた。あわてて窓枠をつかむ。そのとき目に入ったのは、通路で男とつくみ合っているキオだった。

「キオ！」

呼びかけにかるうじてキオが顔を向ける。

狭い空間で長剣は不利と考えたか、国軍兵は武器を放り出すと素手でキオにつかみかかってきたのだった。腕力でかなうとは思えず、キオは胸倉をつかみ上げられ、背中を壁に押しつけられた。

もつれあう二人の身体が通路をふさいでいるせいで、残りの国軍兵は彼らよりも先には進めないでいた。他方ルンタといえば、いまにも転落しそうな危なっかしさで、屋根の端をのそのそしている。これではすぐに全員が捕らえられる。トビアスは、刻々とそのときが近づくのを感じた。

どうする。

この展開で迷っている暇はなかった。

トビアスは抜け出たばかり窓に飛びこんだ。年少の仲間を置いていけるはずがなかった。勇気だとか、義務だとかは関係ない。理屈抜きで、それだけはできないと思った。トビアスはキオを押さえつけている男にむかって突進し、襟首をひつつかんで殴りつけた。ひ

るんだ隙に組みつくと、背後から思い切り締めあげてやる。年齢とともに俊敏さはなくしたかもしれないが、体重でなら負けていない。「先に行けと言っただろう……！」

キオの苛立った声が返ってくる。いい気味だ。ふだん冷静な人間をあわてさせるのは、なかなか愉快だった。

「聞こえなかったさ」

男はうなり声をあげて、トビアスもろとも壁に激突した。したたかに頭を打ちつけたトビアスは、一瞬、気が遠くなりかけた。

どうやら最近、ますます動きが鈍ったようだ。見る、キオときたら、器用に男の懷に潜りこんで、渾身の一撃を叩きこんでいるというのに。

歳は取りたくないものだなとぼんやりとなった頭で嘆いていたら、なにやら手が伸びてきた。倒れこみそうになる身体を、キオがぐいと引き上げる。さらにもうひと組、脇から腕が伸び、気がつくときかかえられるようにして、トビアスは階段をのぼっていた。

「ルンタか」

肩でトビアスを支えながら、ルンタは荒い鼻息だった。

「何をやってるんだ」

「さあ、屋根にのぼるんだ。あんた、高いところが好きだろう？」

「お前さんほどじゃねえよ」

「謙遜は似合わない、トビアス」

ふり返ると、うずくまった男の身体を押しつけて、国軍兵たちが一列になって攻め上がってくるのが、しんがりをつとめるキオのすぐ向こうに見えた。

追いつかれる。

トビアスが奥歯をかみしめたとき、キオは最後の数段を二段飛ばしで駆けあがった。そして腰の短剣を抜くやいなや、振り向きざまに、階下に向かって投げつけた。

キオの放った短刀は、足音も荒々しく突進してきた先頭の男の太腿に、深々と突き刺さった。

悲鳴に近い怒号が天井に反響した。叫び声は、男の身体がもんどりうつて、階段を転げ落ちてもまだ続いていた。後ろに並ぶ兵士たちをも巻き込んで、下まで一気に落下していった。

「行くぞ」

階段の暗がりやを咄然と覗きこんでいる二人を押しやって、キオはするりと窓の棧を乗り越え、屋根の上に躍り出た。

目をこらしても階段は無人だった。ひしめきあっていた国軍兵は、たちまち一掃されてしまった。いま階下から届くのは、複数のうめき声だけだ。

トビアスはまだぎくしゃくとした動きで屋根に降りた。足元がぐらつくのは、高さのせいなのか、それともいまさら訪れた興奮のせいなのか。自分でもよくわからなかった。腰を落とし、足場を確かめるように踏み出すと、ようやく立つことができた。

「下を見ようとするな。どうせ暗くてなにも見えやしない」

「なんだって？」

「見えないと思えば、余計なことも考えないですむ」

「そ、そうか」

「急げ。連中はしぶとい」

簡潔に言い、走りだしたらもう、キオは後ろを振り返らなかった。あつという間に姿を見失いそうになり、トビアスはおそろおそろ前方に一步、また一步、進みはじめる。

「大丈夫かい、トビアス」

「心配ねえ」

おなじく及び腰のルンタにトビアスは言う。「なにしろ俺たちは、高いところが好きだからな」

階下では、ふたたびざわめきが大きくなっていた。人声はどうやら店の外からも聞こえてくる。

暗闇に消えようとしているキオの姿を追いながら、やはり臆病風を見透かされていたなとトビアス思った。かわいい顔をしているくせに、案外たちが悪いかもしれない。

そういえばあの無口な若者は、初めて問い以外の言葉で、俺にしゃべりかけた――。

十

空気はあたたかく、かすかに潮の匂いがした。

右へ、左へ、影から影へ。

旧市街の奥深く、トビアスたちはいくつもの細い路地を曲がりくねり、走り、身をひそめては背後に迫る足音に聞き入った。互いの輪郭が見分けられないほど、周囲は真っ暗だった。ときおり、建物ひとつ隔てた向こう側で、ぼんやりと明かりが動いているのがわかる。そのたびに息を殺して、気配が去るのを待つ。

こうした用心深さといい、王の首亭での立ち回りといい、若者の手際に感嘆すると同時に、どこで身につけたのだろうとトビアスは考えたが、それはそれで新たな厄介の種のような気がして、余計な詮索は中断することにした。

かわりにトビアスの脳裏では、昼間の死体がちらりとよみがえった。

ひょっとしたらこのまま誰かの手にかかり、自分もあんなふうに朽ち果てるのだろうかと思像し、縛り首とどちらがましかなどと思う。このまま行方知れずになったところでせいぜい、徴税人の実入りが減るぐらいだろう。

もし絞首台送りなら？ 何しろ、犯罪者の財産は政府が没収だ。借金取りは俺から一文も回収できない、ざまあみる。

ろくでもないことを考えていたせいで、トビアスはいまになってようやく、今夜は新月だと気づいた。道理で暗いわけだった。

運河はもう目の前のはずだが、川面はおろか、停泊中の貿易船の主樁帆さえ見えてこない。

全力疾走にトビアスの肺も心臓も、破れそうだった。いよいよ音

をあげそうになったとき、先頭を走っていたキオが立ち止まった。

「すまない」

ほとんど乱れのない呼吸で、若者はおもむろに言う。

「私のせいだ」

「何の話だ？」

トビアスは最初、何を言われたのかわからなかった。

謝罪のようだが、身に覚えがなかった。心なしか、言葉づかいまであらたまって聞こえる。

「あなたたちを巻き込むつもりはなかった。彼らがこつとも早く動くとは――」

「何を言ってるんだ？ あのだいじのことか？ それともひょっとして、王党派がどうこういう話か？ 例のお役人さまがいくら地獄耳でも、あの距離じゃなにも聞こえちゃいねえさ」

「役人……？ ああ、レイヴンクロフトの秘書か。惜しいところだが、そういう話とは少しばかり違う」

「それなら何だ」

トビアスが訊ねると、キオは思案するように沈黙した。じつとトビアスを見つめ、ややあつて抑揚のない声が答える。

「聞かないほうがいい。連中にもし何かを問われても、いつさい知らないと答えるんだ。あなたは人がいいから、考えていることが顔に出る」

「そいつはどうも」

率直な物言いにトビアスは憮然となったが、キオは先を続けた。

「嘘は彼らに追及の糸口を与えるだけだ。もつとも真実だったとして、連中の追及のほどは予測不能だが」

「そりゃあ、噂に名高い残忍さだろうよ」

「それが本当だとしたら、心からすまないと思う」

ふたたび淡々と謝罪の言葉を繰り返すと、キオは前方の闇へと視線を戻した。

「だつたら……」

事情を話せとトビアスが言い終える前に、キオは手で制し、自分は数歩を進み出た。そしてまもなくその先の闇に、ひとつ、またひとつと明かりが現れたのだった。

十

「なんとまあ」

とぼけた声はルンタだった。

明かりは正面だけではなかった。ランタンの光が、背後からもトビアスたちを取り囲んでいた。

「一個小隊はいるな……」

どうやらこちらの思惑以上に、トビアスたちを捕らえるための人員が動員されていたようだ。それとも罪状が増えたせいだろうか？ 逃亡罪とか、傷害罪とか。

挟み討ちに遭うとは予想外だったが、こうなつては引き返すこともできない。トビアスは、前に立つキオの神経がはりつめるのを感じた。トビアスの心臓も、激しく飛び跳ねていた。

「いいか。もし逃げ切れなかったら、そのときは二人とも、私が言ったことを忘れるな。事実だけを答えてくれ」

距離を縮めてくる国軍兵に目は据えたまま、キオがトビアスたちに言った。

「キオ。お前さん、何を企んでいる」

「二度も食いそびれたヤマウズラのシチューに、今度こそありつく方法」

「ふん」

トビアスは思わずにやりとした。

無愛想な若者の返答にしては、上出来だ。食い意地のはった自分なら、それで納得するだろうという魂胆には腹が立つが、キオに対

するトビアスの疑念はたしかに消失していた。

正体や目的がなんであれ、若者は仲間を護るために、ためらいなく自身を盾にできる人間なのだ。

単純な自分の頭にはそれだけで十分だった。だいいち、借りを作るのは金だけでたくさんだ。

「お前さんの言う通りだ。最後の晩餐には早すぎらあ」

いったん開き直れば切り替えが早いのも、いい加減な暮しに甘んじてきた男の処世術だった。この先どんな運命が待ちうけているにしろ、それはこの場を過ぎてからのこと。いま気に病んでも得にならない。

「けどな、子どもをだしに使って放免してもらおうとするほど、俺は恥知らずじゃない」

「異議なし」と脇からルンタの声がした。「そろそろ大聖堂の鐘が鳴る。どうだい、そいつが合図つてのは？」

「本当か、ルンタ？」

「あれの前に帰らないと、うちのやつ有機嫌が悪くなるんだ」

「お前さん、それでいつもあわてて帰るのか」

「ひとの話を聞いていたのか？」

あきれた口調でキオがさえぎる。

「聞いたとも。《逃げ切れなかったら》、お前さんの言ったことを思い出せばいいんだろう？」

トビアスの返答に、キオが小さく溜め息をもらす気配があった。

「どうやら決まりだな」

「私は承服できない。この嚴重な包囲を全員が抜けられるとは思えない」

「大事なことは多数決で決めるのがこの国の伝統よ。国王はいなくなつたが、議会は残つてる」

「その議会に正義が残っているかは、疑問だけだなあ」

「おいおいルンタ、お前さんまで何を言いだしやがる」

「あんたと一緒に、考えていることを黙っちゃいられない性分なん

だ」

「だからお前さんは出世できないんだ」

「あんたにだけは言われたくないね」

トビアスだって、たった三人で包囲網を破ることができると思ってるほど、能天気なつもりはない。全員が無理なら、せめて一人だけでも逃げおおせる。ルンタが言っているのはそのための方策だった。

「……わかった」

二人のやりとりに聞き入っていたキオは、それ以上の反論はせずそう言った。

「よしよし、先輩の言うことは聞くもんだ」

「鐘を合図に別行動だ」

「何だって？」

トビアスとルンタが同時に声を上げる。

「いまの話を聞いて、余計にあなたたちを巻き込むわけにはいかなかった」

「馬鹿を言うな」

「幸運を祈る」

すでにキオは、前方の集団に全神経を注いでいた。

「おい……！」

トビアスとルンタがあわててキオの腕を掴もうとした、そのときだった。

とつぜん、大聖堂の大鐘が鳴り始めた。

高音と低音が織りなすさまざまな音の階層が、四方の建造物に、石畳に反響する。

一日の終わりを告げるその音色にはまるで調和はなく、あまりの騒々しさにその場の全員が立ちすくんだ。

それもそのはず、これはコラルルではなかった。人間が日常を営むための指標にすぎない。

音の波はカロードンの上空を回り、旧市街の路地をめぐり、いく

つもの残響を生んだ。

そして洪水のごとき大音響のなかで、キオが光の群れに向かって駆けだした。剣刃をかわし、伸ばされた手をふりきり、キオは国軍兵の真ん中に突っ込んでいった。

平原を渡り、はるか遠くの丘の頂上に届いた鐘が、街へとうち返してくる。兵士の動きはもはや判然としない音の余韻のようだった。キオの姿だけが鮮やかに走り抜ける。

活路を開くためにやみくもに突入したかと思えたが、周りが気づいたときにはすでに、キオは狙い定めた目標に肉迫していた。走りだしてからほんの数秒で対象に迫ると、駆け抜けざまにすばやい動作で、相手の腰から剣を抜き取った。

何という早業か。

間髪いれずに男の喉元に固定された刃先には、わずかなぶれもなかった。

兵士たちのどよめきに、辺りに物音がもどってきたことを知る。トビアスが声に出しかけた言葉を飲み込んだのは、キオが対峙しているのが、全身を黒衣で覆った男だと気づいたからだだった。

揺れ動くランタンの光に浮かび上がった男の姿は、そこだけが闇と同化しているみたいだった。

——大鴉だぞ。

その言葉をトビアスは口にしたりはなかった。だが、隣でルンタがうなずいていた。

「ああ、あの男だ。カルーだ。フランシス・レイヴンクロフト卿の大鴉だ……」

+

「見た目よりも君は手練のようだ」

沈黙を破ったのは、刃を突きつけられた方だった。

「王の首 亭で君が手傷を負わせた男は肉の筋が断ち切れていた。当面、歩くことさえできまい」

黒ずくめの男に動じた様子はなかった。一方のキオもまた、沈着な声で返す。

「民兵三人に国軍が束になってかかって勝ち目がないとは、国防が聞いて呆れる」

「挑発しようとしても無駄だ」

剣先はカルーの喉に触れるか触れないかという位置で、ぴたりと止まっていた。

囲い込んだはずの獲物に易々と包囲をぐりぬけられただけでなく、こうもあっさり反撃されるとは。これで身動きが取れなくなっただのは、兵士たちも同様。

——キオのやつ、自分に注意をひきつけるためにわざと見せつけやがったな。

若者の意図に気づいたトビアスは背筋が冷えるのを感じる。

「しかし、今夜の不手際は認めよう。いささか目立ちすぎたのは事実だ。それともすべて、君たちの算段か？」

「算段とは？」

白々しく返したキオに答えるかわりに、カルーはトビアスたちを一瞥した。

トビアスもまた、自分を陥れようとしている人物を睨み返した。

血も涙もない、か。切れ者らしい鋭い眼光が一瞬、トビアスを射抜いた。

カルーはキオに視線を戻すと、表情を変えずに言う。

「ところで、その剣をどけてはくれないか。話をするには目障りだ」キオは剣をまっすぐに突きつけたまま、微動だにしなかった。

若者が自分の言葉に従う気がないとみたカルーは、眉をひそめ、思案する目になる。

端正なその横顔を眺めながらトビアスはふと、向かい合う二人が

似ていると思った。顔の造作ではなく、雰囲気だ。どちらも若く、鋭利な刃物のように研ぎ澄まされている。無表情で固めた防御の殻の内側に、危ういくらいに強固な意思を抱えている。

トビアスはこの半月あまりを振り返って、何者をも寄せつけないキオの硬さの理由が、ようやくわかった気がした。

数秒を置くとカルーは静かに切り出した。

「率直な話をしよう。我々はある文書を探している」

十

キオはカルーが語る間、相手の顔をじつと見ていた。

「……その文書を所持していたと思われる男は、今朝ほど運河に浮かんだ。そう、君たちが引き揚げた、例の死体だ。承知の通り、あの男は『亡命者』。内乱の前は海軍省の主計局にいた。近頃はさまざまに名乗っていたようだが、我々にはスカリスブリックという名前前で知られている。香料を積んだ西回りの船で先月末にカロードンに入り、そのまま行方がわからなくなった。彼の所在を探していたところ、今朝になって、該当する人物の死体が発見されたと当局から通報があった。そして午後、君たちと遭遇したということになるが、案の定、死体から肝心の文書は回収できなかった」

「それが我々の逮捕の理由か」

「私は、君たちが何らかの手がかりを持っているものと思う」

「馬鹿を言うな！」

乱暴に話を遮ったのはトビアスだ。

「さつきから聞いていれば、ごちゃごちゃと……俺たちは務めを果たしただけだ。それなのに、どうして王党派の嫌疑をかけられなければならないんだ。文書だと？ 言っておくが、俺もルンタも読み書きを知らねえ。お偉方にはどれだけ大事だろうと、俺たちにとつ

ちやただの紙切れだ。そんなこともわからないで、何が反逆罪だ。お前たちのどこが正義の徒だ……！」

息を荒げてトビアスはまくしたてた。

「やめろ、トビアス」

キオが声だけで制止する。視線はカルーから外さない。一方、カルーもまた、キオを見つめたままトビアスに訊く。

「なるほど。しかし文字が書いてあるとは限らない」

「はあ？ ふざけたことを言うな、カルーさんとやら」

「繰り返すが、我々が訊きたいのは、誰がスカリスブリックから文書を奪い、そしていまどこにあるのか、だ」

「ああ、いいとも。好きなだけ訊けばいい。だけどおあいにく様だ。俺たちは何も知らないぞ」

「トビアス・コウクニーは事実を話している。本当に彼は何も知らないのだ」

暴拳を見かねたか横槍がわずらわしかったのか、キオが割り込んだ。その冷静な口調がさらにトビアスを焚きつける。

「キオ、お前さんは黙ってる。民に向かって道理を守れと言う連中が、道理を無視していいはずがない。理不尽もいいところだぞ——」

「王党派の男がカロードンに運んだ郵袋。それが貴殿の要求なら、取引をしたい」

——取引？

思わぬ言葉がトビアスの耳に飛び込んできた。王党派が持ち込んだ郵袋？ 取引とは、何の真似だ。

一体全体、それは。

「なんだって……？」

周囲が注視するなか、キオの左手が胴衣に差し込まれた。

「キオ……！」

ふたたび取りだされたキオの手には、折りたたまれた布が握られていた。年季の入った帆布だった。表面にタールを塗り、細い麻紐で中心を幾重にも括つてある。

馬鹿な。

思わずトビアスは呻いた。

なぜこんなものをキオが持っている？ まさか、例の死体から掠め取ったのか？ 真つ先に運河に飛び込んだのは、キオだった。引き揚げる前に、水のなかで？ 馬鹿な、そんな突拍子もないことがありえるのか？

だが、若者が手にしているのは、郵袋以外の何物でもなく見える。そういえば、あのときキオは、自分に向かって王党派なのかと訊いた。あれは、自分やルンタが秘密を打ち明けてもいい同志であるかどうかを、確かめたかったのか。ではキオもまた、王党派なのか。だから文書とやらを探していたのか。国家の中枢にいる人間が目の色を変えて欲しがる文書を。そのために民兵になり済ましていたのか。

キオこそが反逆者なのか。

「馬鹿な——」

十

それまで不確かだった事態の輪郭が、唐突に浮かび上がってくるような気がした。

トビアスは急に虚脱を覚えた。放心のせいか緊張がほどけ、崩れた膝を地面につく。自然に頭が落ち、伏せた顔の前に、国軍兵の長剣が何本も突き出された。トビアスもルンタも左右を国軍兵に固められていた。

「我々の自由と引き換えに、明日の正午にこの文書を渡すことを約束する。市庁舎前の広場だ。ただし受け渡しには、貴殿ひとりでもらおう」

「仲間を人質に差し出そうというわけか」

「貴殿に預ける。それ以上でも、それ以下でもない」

キオの言葉が頭を素通りしていく。人質とはまた、自分には似合いの結末だとトビアスは思った。粗忽者のトビアス。お人好しのトビアス。そんな自分に最後につけこもうとしたのが、国に弓引く反逆者だなんて。

いや待てよと、自嘲気味の頭でトビアスは考える。金貸しにだまされるより、反逆者に利用されるほうがいいじゃないか。ひよっとしたら、自分の名前さえ綴れない男が、ササラクの歴史に名を残せるかもしれないぞ。

進行中の事態を一瞬忘れて、この夢想は案外悪くないかと、トビアスはひとり頷いた。いつのまにか口許までゆるんでくるのは、いまこの瞬間にも、自分のなかにはキオを信じる気持ちが残っているのに気づいたからだだった。若造にもてあそばれているという戸惑いは押しやって、キオと出会った俺はやはり運がいいのだと、トビアスは自分に言い聞かせた。

運も実力のうちだった。あの内乱を生き延びたように。

「残念ながら、我々には二人の価値が分からない。つまり、彼らに人質の役割はつとまらない。郵袋はこの場で渡してもらおう」

「承服いたしかねる」

「信用ならないのはお互いさまだと思うが。……キオ・リウィ」

「王党派であろうとなかろうと、貴殿は自分に刃を向ける相手を許しておくような人間ではないと聞いている」

「それならば話は早い」

そして不意に、カルーの右手が持ち上がった。

「噂の通りだ。私はそのような取引に応じる気はない」

カルーが言い終らないうちに、ぶん、と空気が振動する気配がして、トビアスは我に返った。耳元を風が吹き抜けたような感覚があり、あわてて顔をあげると、キオの身体が躍っていた。

立て続けに空を切る音が飛来する。

すばやくカルーが後退する。キオもまた飛び退きざまに長剣をふ

るい、何かを叩き落とした。

「上だ！」

ルンタの指す方向を見上げると、街路を挟んだ屋根に黒い影があった。いつ現れたのか、複数の人影だった。キオに向かつて手にした道具を構えている。その先端からキオめがけて、一斉に何かを撃ちだされた。

「キオ……！」

ほとんど同時にキオの長剣が閃く。

似たような武器を、戦場でトビアスは何度が目撃したことがあった。狙撃用のクロスボウだと気づいたとき、とっぜんキオの身体がのけぞった。

反動でおおきく頭が振れ、上体を折り曲げるように前のめりになる。その背中に細長い棒状のものが突き出ているのが見えた。

「いまだ、郵袋を！」

誰かが叫び、兵士たちはいっせいにキオめがけて走った。負傷してもなお、キオは身をかがめて、石畳の上に手を伸ばそうとしていた。矢が当たった際、郵袋を取り落としてしまったのだ。

「郵袋を奪え……！」

キオの顔がゆがむ。長剣を支えにして立ち上がるうとするが、ぐらりと斜めによるめいた。キオはそのまま両手をつくと、石畳にうずくまってしまった。手を離れた長剣が大きな音をたてて倒れる。その間にも三度目の斉射が襲ってくる。はずれた矢が石畳に当たって跳ね返る。

路地の次は、上と下からの挟み討ちか。

くそつたれめ。カルーなる御仁は抜け目ないだけでなく、どこまでもやることがえげつない男だった。

「キオ！ 郵袋をこっちによこせ！」

トビアスは叫んだ。

上等だ。せいぜい、利用されてやろうじゃないか。俺は王党派でも主教派でもないが、読み書きのできない男に、文書を盗んだなど

というお粗末な言いがかりをつけて絞首台に送りこむのがこの国のやり方なら、行く末は知れている。

だったらそんな国はこちらから愛想を尽かしてやると、トビアスは思ったのだった。

「早く……！」

射出までに時間がかかるのがクロスボウの難点だ。間隔をみはからって死角に移動できるか。

一方、予想通りキオは、トビアスの怒号に最初ためらう様子を見せた。でもそれも一瞬だった。相手を信じたのか、あるいはまた、向かってくる兵士たちを前に他には手はないと考えたのか、石畳の上の郵袋をひつつかむと、トビアスめがけて投げつけた。

だが、キオが放り投げた郵袋は大きくはずれて、トビアスの頭上を飛び越えていった。必死でルンタが跳び上がったものの、彼の手はむなしく空気をつかんだだけだった。待ち構えていた兵士たちの手が、いつせいに郵袋に伸びる。

国軍兵たちの間に郵袋がかき消えるのを見送り、トビアスは青ざめかけた。

想像以上にキオの傷は深かったのだと悟ったが、遅かった。兵士がひとり、ひざまずくキオの前に立ち、剣を振りかぶろうとしていた。これ見よがしに刃をひらめかせた連中の作る輪が、トビアスとルンタを取り囲む。

「手に入れたぞ」という叫びが聞こえた気がした。男たちは口ぐちに「反逆者を捕らえろ」と怒鳴っていた。

立ちつくすトビアスの目前に、黒い塊が落下してきたのはそのときだ。

降ってきた塊は、人の形になった。不運にも真下にいた国軍兵を押しつぶして、下敷きにされた男ともども、いまは地面に転がってうめき声をもらしている。

何がどうなったのか、トビアスはわからなかった。足元に転がった男を茫然と眺めていると、ふたたび叫び声が上がリ、また一人、

さらに一人と屋根から人間が落ちてきた。

一転して場面は混乱に陥った。

複数の怒号が入り混じるなか、振り下ろされる寸前の刃をキオは睨み上げたが、すでに視界は闇に呑み込まれようとしていた。折り重なる声も雑音としか認識できない。さらに悪いことに、四肢の感覚が失われつつある。

なぜ矢を避けきれなかったのかとキオは悔やんだ。矢尻に毒を仕込んであったに違いない。自分の迂闊さを呪いつつ、あの二人はどうするだろうと、急速に遠のいていく意識で考える。そろつて要領が悪いから、捕らえられてしまいかもしれない。巻き込まれたことを恨んでいるだろうか。

斬撃を覚悟したものの、歯を食いしばる力さえ入らなかった。

せめて、運河までたどり着いていれば。追い詰められて思い出す顔だとは信じたくなかったが、あの男はいま、どこにいる……。

十

次の瞬間だった。

キオの顔のすぐそばで、金属が激しくぶつかりあう音がした。

ぼんやりと見開いた眼のその前に、幅の広い背中があった。丈長のコートがひるがえり、フードがはずれて、薄い色の髪がのぞく。

キオと兵士の間割り込むように突如、頭上から飛び込んできた男が短刀で長剣を受け流すのを、ただ茫然とトビアスは見ていた。射手たちを屋根から蹴落として敵との間に立ちはだかつたのは、トビアスもルンタも見覚えのある人物だった。

——ルークか。

短剣一本で構える長身は、あの薬の行商だ。

「ご無事か、閣下？」

そう訊ねる声は、相手を気遣うどころか、からかうような調子だった。背後にキオを庇いながら、薬屋とは思えない身のこなしで、ルーグは短剣を走らせる。だが声を聞いたトビアスは、間違いなく例の薬売りだと確信した。

苦しい表情のまま、キオが苛立ちをあらわに怒鳴り返す。

「遅い！」

「ご挨拶だな。五年ぶりの再会だぞ」

心外そうに應えると、ルーグは「その兄さんたちは下がってくれ」と言った。「兄さん」が自分たちのことだとトビアスが理解するまでに、数秒かった。

新手の登場にもかかわらず、国軍兵たちの勢いは止まらなかった。いくら図体が大きくても相手はたかがひとり、しかも身を守る武器は短剣のみ。

ルーグは国軍兵に向き直り、息をひとつ吸い込んだ。

「さて、お立ち会い。東方より伝え聞くは、硫黄、木炭、硝石を調合したる炎の術にございます……どうも今夜の客は、辛抱が足らん」

その間にも踏み込んでくる兵士を軽くしのぐと、長い口上は端折ることにしたらしい。

「では旦那方、とくとご覧あれ」

ルーグがあいている左手を高く振りかざした。それを見たキオが、トビアスとルンタに向かって「伏せろ」と声をしぼる。

考える余裕もなく、二人は地面に身体を投げだした。ルーグが石畳に何かを叩きつける。

直後、大きな破裂音が鳴り響いて、目もくらむような閃光が界限に走った。

トビアスはあわてて目をつぶったが、顔を下に向けていたにもかかわらず、視界には光があふれた。祭りのときの花火のようだった。最後に見たのはいつだったか。内乱のあと、花火は政府に禁

止されたから、ずいぶん前なのだろう。

そうだ。

あれはカロードンに流れ着いてまもないころだ。運河の上では華麗な光が夜空を照らしていた。その輝きを映して、川面は幾重にも揺れていた。こんなに美しいものが人の世界にも存在するのかと、トビアスは夜空を見上げて言葉を失った。

そして決めたのだ。毎年、この景色が見れるのなら、自分はカロードンに留まろうと。

全身を包みこむ光のなかで、トビアスの感覚はしばし時空を超えた。まぶたの裏では、七色の虹がはじけ、踊り続けていた。

ああ。

やっぱり俺は、カロードンにいるんだな。

トビアスの網膜に焼きついたその光は、いつまでも消えようとしなかった。

十

大聖堂の鐘が夜明けを告げるのを聞きながら、南門を出たマレク・カルーは、その足で議事堂へと向かった。

カロードンの旧市街はまだ静寂に包まれていた。

一番の早起きは魚売りで、彼らがまず埠頭に現れる。続いて、北門を抜けてやってくる牛や羊の隊列が市街を縦断し、早くも通りには渋滞が生まれる。我が身の運命を知っているのか、家畜たちの歩みは重くなるばかり。そこへようやく到着するのが、野菜売りや果物売り。互いの荷車を進める順序をめぐって、往来のそここでいさかいが起きる。

そうして毎朝同じ光景がくり返されるというわけだが、市場も開かぬ早朝の目抜き通りには、路上で夜を明かしたらしい酔っぱらいと、気ままな足取りで食べ物を探す犬の姿があるだけだった。

運河沿いの道をカルーは西にたどる。

まだ太陽が高く昇らないうちの運河は、空よりも深い蒼色だった。河の上を旋回する海鳥の姿を横目に進んでいくと、ほどなくして街の様相が変わり始める。屋根の低い木造家屋は減り、かわりに石積みのおおきな建物があたりを占めるようになる。

この一帯の地主のほとんどは貴族で、高額の家賃が支払われている。とはいえ、住人は彼らではない。保険屋、貿易商、不動産屋——玄関口には多種多様な表札が並ぶが、商店はまばらで、法律事務所が表示が目をひく。

運河を挟んで旧市街に隣接する西側の地区が、カロードンの官庁街だからである。

「カルー殿、カルー殿」

議事堂正面の石段をのぼりきるや、醸造家の組合に雇われたという男が数人、増税に反対する嘆願書をカルーの手に押しつけてきた。一昨日も見かけた彼らがいまもホールでねばり続けているところを見ると、昨夜召集された国務評議会は、夜が明けてもまだ解散になつていないのだろう。

先にこちらに寄つたのは正解だつたとカルーは思った。会期中、フランス卿はめつたに私邸に戻らない。内務省の執務室で書類に埋もれているか、議事堂で舌戦を繰り広げているか、どちらかだ。

「ぜひともフランス卿に、この書状をお渡しいただきたい」

有力な伝手こそが肝要だから、彼らのような代理人たちは、官庁街に足繁く通つてはせつせと顔売りこんでいる。議事堂や官庁の玄関ホールは国民の声を届ける公の場所なのであり、警備兵も彼らをとがめることはない。むしろ代理人たちは警備兵にいくらかの金を渡し、その対価として通行を見逃してもらうだけでなく、誰がいつ登庁するといった話を聞き出しているのだつた。

断る理由もなかったので、カルーは男たちから書状を受け取つた。マレク・カルーの名前は、内相フランス・レイヴンクロフト卿の秘書として知られていたが、もっとも本来の秘書役を務める人材はほかにいた。いまごろは、週明けに審議される草案の下書きを握りしめて、片っ端から馴染みの法律事務所をまわり、事務弁護士たちを叩き起こしているはずだ。

耳よりの話はないかと食い下がろうとする代理人たちを適当な言葉で退けると、カルーはホールを突っ切つて東翼へ進んだ。

窓からまぶしい朝日が射しこんで、円柱の濃い陰影を回廊の床に

落としていた。

カルーの顔を見た警備兵が敬礼をよこし、奥へと続く重厚な扉を開く。その先の長い廊下にはすでに、ほかの閣僚の秘書が数人、控えていた。互いの腹の探り合いをするところではないから、ここでは皆、沈黙を守る。カルーは目だけで挨拶を送り、彼らもまた顎をかすかに振っただけだった。

フランス卿を待つ間、廊下の窓辺に立って外を流れる運河を眺めた。

夜が明けるや、カルーは運河にほど近い旧市街の一角を訪れた。例の民兵三人を取り逃がした路地の石畳には、予想通り黒い煤のような粉が一面に付着していた。指の腹ですりつぶすと、砕けた粉はさらに細かい粒子になった。指先に残った臭いから推測するに、あの行商の小道具は火薬の類だろう。

あと一歩というところまで追い詰めながら、昨夜の獲物は、行商が炸裂させた突然の閃光にまぎれて、首尾よく逃げおおせてしまったのである。

強烈な光に網膜を焼かれた国軍兵たちは、右往左往するばかりでまるで役に立たなかった。光源を直視するようなへまこそしなかったが、不覚にもカルーもまた、一時的に視力を失った。港湾に逃げこまれては追跡も困難と、綿密に網をはっていたにもかかわらずの失態だった。

一部始終を脳裏に再現しながら、カルーは苦いものを感じた。油断があつたとは思いたくないが、万全でなかったのは否定できない。追跡の不備、包囲の不備。一つひとつは些細でも、複数が重なって隙を作った。キオ・リウイなる若者が、その隙を見逃さない目を持っていたというのはもちろん、三人が結束して抵抗におよんだのも予想を超えていた。そこに行商の攪乱が突破口を開いた。

しかし――。

カルーは窓の外を眺め続けた。

彼の目は、運河を切り進んでくる艦船を追っていた。着岸に備え、

乗組員たちは甲板に総出だった。すると突然、するどい号笛が響き、それまであわただしく行き来していた乗組員たちが各々の動きを止めた。見ると艦船の真向かいから、第六級の小型船が下ってくる。潮に引かれているのか、小型船は艦船の進路上をよたついたままだ。「解帆」の声が飛び交うなか、艦船の乗組員たちは必死で引き綱に組みついた。彼らの反応は、自分のなすべき作業を熟知している者のそれだった。衝突まであとわずかというところで帆桁がまわり、艦首が右へと振れる。かろうじて二隻は行き合い、はげしく波立つ水面で小型船が上下に踊った。

いまも自分でも知らぬうちに、カルーは乗組員たちの見事に統率された動きに見入っていた。

一瞬とはいえ、あの行商と目があつたときから、自らの心がさまよい続けているのを認めないわけにはいかなかった。薄暗いランタンの明かりでは確実なことはわからないと思いつつ、あのとき介入してきた行商風情は、かつての知り合いにあまりにも似ていたのだった。それだけなら、ここまでの驚きはなかっただろう。

しかし――。

あの男がどこかの海に沈んだと知らされてから、ずいぶん長い時間が過ぎていた。

何年もの間、名前すら思い出すことはなかった相手だった。それが、頭巾に覆われていた行商の顔があらわになった瞬間、「生きていたのか」と思った。ありえないという理性的な判断は、そのときにかぎってなぜか働かず、「まさか」という驚愕に身動きがとれなくなつて、それ以上の追撃を思いとどまつたのはカルー自身だった。冷静になつてみれば、どうかしていたとしか言いようがなかった。荒々しく、奇妙にやさしげな目が、記憶のなかに埋もれていた顔のひとつと重なつたのは潮風のせいだったとしても、唐突に襲つてきた動揺を思い起こして、自分こそが最大の不備だったとカルーは結論づけた。

それからようやく「あの行商は誰だ」と考えた。

胡散臭い商売を営む者はカロードンではめずらしくないし、行商が都市を渡り歩くのは当然である。通行証などいくらでも偽造がきくから、男の身元を知る人間は多くはないだろう。逆に言うと、一つの町に留まっただけでは不都合な事情を抱えた人間にとって、行商というのはうってつけの商売にほかならない。

となると――。

あの行商も、王党派の手のうちの者と考えるのが妥当かもしれない。

カルーの推理が正しいかどうか、答えは本人に訊くしかないが、取り逃がした民兵どもと行動をともしているのはまず間違いない。ならばいずれ正体も知れると思いつつ、あらたな憶測がカルーの思考を妨げようとする。

カルーは目を閉じた。

自分は、男が生還したという疑念を捨て切れてはいない。

いや、戦死の知らせを聞いたときだって、本当は信じなかったのではなかったか。

突如として立ち現れた過去の幻が、昨夜からずっと目の前にちらちらといた。同時に、自分がこれまで一人の人間の存在を無視してこられたのはなぜだろうと訝りもした。もつとも、その理由はおそらく、我が身さえ顧みることをやめたこの心身が、身近な他者から目を逸らしつづけてきたという一点に尽きるのだろうが、そうだとすると、もはや存在しないはずの相手を想い煩い、こうして自身の心の裡を探りあぐねている事態は、いったいどんな異変の前兆なのか。

昨日の夜は一睡もしなかったとはいえ、なにかがおかしかった。そこまですっかり、たしかにこれは異変だなとカルーは思った。

フランシス卿の下で働くようになってからというもの、雑念に心が波立つひまはなかった。フランシス卿が内閣入りを果たしてから、はなおさらだ。海峡を挟んでにらみ合うラッゲールは何時もササラクの脅威だったし、国内に目を転じれば、王政復古をもくろむ王党

派が虎視眈々とその機会を狙っている。対する主教派は、内乱から七年も経ってそろそろ奇跡の威光も薄れてきたのか、かつてはササラク全土を動かした御言葉も、もう民の心には届かない。だったらおとなしく飾り物におさまればいいものを、祭服に身を包んだ長老たちは、議会で否決権を振り回し、健在ぶりを誇示するのに躍起になっている。

そうした舞台の裏で、昼夜がまわらず怪文書が飛び、秘密の会合が催され、内通者たちが暗躍するのだった。自分の仕事もまた、爵位や称賛といった輝かしい名誉とは無縁だったが、いまの生活に不足はない。踊り子だった女の気まぐれでこの世に生を受けてから三十年あまり、充足を経験したことがないから、渴望もわからなかった。幸い、カルーがそれ以上の不毛な思索に陥らずにすんだのは、会議室の扉が乱暴に開け放たれたせいだった。

押し出されてきたどの顔にも疲労がにじみ、おまけに仏頂面だった。一目で実りのない一夜だったことがうかがわれ、待ち構えていた秘書たちもまた、憂慮する顔つきになる。人垣のなかに見慣れた灰色の頭を見つけると、カルーは窓辺を離れた。

そのとき不意に、あの男もよく窓際に立って船を眺めていたと気づいた。

思わず振り返った窓の外で、船は輝く川面を滑るように進む。青地に黒竜が踊る海軍旗が、艦尾で風にひるがえっていた。

十

壮年を過ぎて久しいが、フランシス・レイヴンクロフト卿は、いまだ衰えとはほど遠かった。

体格は小柄ながらつねに機敏に動き、難問を語るときほど、知的な青い瞳が生き生きと輝いた。襟首で一つに束ねた豊かな髪は美し

い灰色で、背中に届く長さがある。どれだけ激務が続こうとも、決して身だしなみが乱れることはない。フランス卿は内閣きつての洒落者としても知られていた。

だが今朝は、そのフランス卿の前髪が一筋、額に落ちかかっていた。

「外務省め。案の定、圧力をかけてきた」

カルーの姿を見るや、開口一番フランス卿はそう言った。

「連中はラッゲールと開戦する気満々だ。ラヴィニア号の人質交換は難航するだろう。海軍はシドマス捨て駒にする気かもしれん。世論が不満を抱くのは確実と踏んで、戦争になるから金の用意をしろと言ってきた。どこにそんな金がある？　さんざん自分たちで使ったんじゃないか。ほとほと呆れ果てた」

聞えよがしにそう話しながら、フランス卿は廊下を早足で突き進んだ。またしても外務大臣に喧嘩を売ってきたらしい。

二つの省庁の不仲はいまにはじまったものではないが、頂点に立つ個人の性格がどこまで影響するのか、興味深いところではあった。とくに内務省直轄の国軍と、どちらかといえば外務省寄りの海軍のあいだには、奇妙な対抗意識が働いていて、戦時であれ平時であれ、互いの悪口を酒の肴にするのがならわしだ。飲み屋でそんな場面に居合わせようものなら、たちまち暴力沙汰になる。

「同盟国にいくら支援金が流れているか、確かめてから出直してこいと言つてやった。おかげで評議会は夕方に再開だ。うんざりするな、まったく。税務調査委員会報告は届いたか？　消費税を上げたところで密輸が増えるだけだ。非合法的な商売が横行するようになれば、この国の経済全体が立ち行かなくなる。これ以上、課税品目を増やすのは命取りだ。市民の反発を招く、招かないといった話ではない。そうなれば残るのは土地しかない。ところが議員の大半は地主だし、だいいち教会領からどうやって税金を取る？　いつそ教会領を解体してしまうしかないな——マレク、朝食は？」

「いえ、まだ」

「では 金鶏 亭に付き合ってくれたまえ」
「午前中は市参事会と会合では？」
「卵とベーコンを食う余裕はある。残った時間でコーヒーの一杯でもやりながら、君の話を聞こう」

十

「早朝から申し訳ございません」
空になった皿を器用に重ねあげ、店の娘がテーブルから十分な距離に離れるのを待って、カルーは口を開いた。
「構わない。大事な用は午前中に済ませることにしている」
「残念ながら、郵袋は発見できておりません」
フランスス卿は薄いコーヒーを一口飲むと、「美味しい」とだけ言った。

金鶏 亭は旅籠も兼ねた料理屋だが、評判の名物料理があるわけでもなく、看板娘の器量も十人並で、お世辞にも繁盛しているとは言いがたい。仕事場から近いという以外に通う理由はないが、おかげで微妙な話をするには便利な店だった。

とはいえ実際、フランスス卿の重大な欠点は味覚が鈍いことであつた。

身なりに対するこだわりからすれば舌だって利きそうなものなのに、これがまったく執着がない。それどころか何を口にしても「美味い」と言う。飽食の反動だろうと苦笑する者もいるが、カルーの見るかぎり、そうした見解は間違っている。ひとつだけはつきりしているのは、フランスス卿はその姿を目にするのも許せないというくらいに、カボチャが大嫌いだということだ。

「それで、例の民兵のほうはどうした」

「——いまだ逃亡中です」

フランス卿の鋭いまなざしが見返してくる。

「手こずるとは君らしくないな」

「そのうちの一人が郵袋らしきものを持っていたのですが、奪って見たところが、中身は小切手帳が一綴り。ただ……」

そのときも過去の亡霊が一瞬カルーの頭をよぎったが、あえて無表情を通すことを選んだのは、言い訳が通用しない相手に余計な話は無用と考えたからに他ならない。なにより、個人の範疇にある事情は、その腹に収めておくべきだった。

いつも以上に慎重になるのを自覚しつつ、カルーは続けた。

「ただ、その郵袋の所持者は 閣下 と呼ばれていた」

「ほう……？」

「まだ若い男です」

だが、なかなか腕が立つ。しかも肝まで据わっている。「髪は切っていました」

「貴族なら成人しているということか。もつとも、そんな古くさい慣習にこだわっているのは、王党派ぐらいだろうが」

「王党派とみて間違いないものと存じます。その者の言葉からは、北部出身者によくある響きが聞き取れました。北部はもとも王党派貴族の土地です。いまも彼らに対する忠誠心は根強い。もしかするとそうした血筋が、係累やもしれません」

たぶん、キオ・リウィという名前も偽名に違いない。「いずれにせよ、王党派がスカリスブリックの郵袋を追っているのは確実でしょう」

カルーの言葉にフランス卿が唸った。

「しかしなぜ、王党派は文書存在に気づいた？ スカリスブリックを殺害したのは、どの勢力だ？ 王党派か？」

「あるいは、ラーゲール」

フランス卿が上目遣いにちらりとカルーを見る。考えを述べるよう、相手にうながすときの目つきだった。

「ラーゲールは、スカリスブリックが王党派の情報を我々に送って

いたことに気づいたのかもしれませんが。大陸に亡命した王党派を監視するために送りこまれたササラクの密偵であると、なんらかの形で知っていた可能性はあります」

「ラィゲールか――」

フランシス卿の声が沈んだ。「時期が悪い。悪すぎる」

「彼らにしてみれば、好機でしょう」

「その通り。ラィゲールには王子がいる。亡命中の王子と王党派を庇護するかわりに、ラィゲールは王党派貴族から、我が国と戦争をするための資金を得ることができる。王党派たちは喜んで戦争に協力するだろう。ラィゲールがササラクに勝ち、ササラク政府が倒れれば、ふたたび王子を玉座に戻す道が開けるといわけた。片やラィゲールにしてみれば、金づるの《亡命者》たちは、もはやなくてはならない存在になっている。王子はラィゲールの格好の人質だ。彼らが手を結ぶのを拒む理由はない。きつかけさえあれば、連中は真っ向からササラクに戦争をしかけてくる。我々の準備が整わないうちに」

一息に言くと、フランシス卿は深い吐息をついた。

「したがって目下最大の懸念は、スカリスブリックが届けようとしていた文書が、そのきつかけになりうるかどうかだ」

テーブルの上に置かれたフランシス卿の手が、きつく握りしめられた。鋭い頭脳はいま急速に回転を始めたところだろう。

そろそろ本題に入るときだ。

「その件ですが」

上司の表情をうかがいながら、カルーは切りだした。

身についた習性でカルーは店内にすばやく目を走らせる。朝食の時間も終わり、金鶏亭には自分たちのほかに数組の客しか残っていないかった。

「捜査にあたった兵の一人が、旧市街で興味深い話を聞きこんできました。ダシユウッドという印刷工の工房に、最近奇妙な来客があ

った——と」

「印刷工？」

「ダシユウッドは、植字工と印刷工、あわせて三十人程度の工房の主です。今月二日の夜に、大陸から渡航してきたと思われる男が工房に訪ねてきて、古い地図を売ろうと考えているのだが、値打ちがわからないので、どこか工房が製作したものが教えて欲しいと話したそうです。客が来た日にちをダシユウッドが覚えていたのは、ラヴィニア号拿捕の速報が飛び込んできたせいで、週末に発行する『カロードン・クロニクル』の記事が急きよ差し替えになり、深夜まで多忙だったからです。帳簿にはたしかに、二日の晩の割増手当を職人たちに支払った記録が残っていました。彼の言う日付は正確でしょう」

カルーはいったん言葉を切った。

「最初ダシユウッドは、見ての通りいまは立てこんでいるので、明日以降にしてほしいと言って依頼を断ろうとした。ところが客のほうもしつこい。挙句、金なら出せると豪語した。大陸金貨で五十枚と言われて、やむを得ず工房の作業は弟子に任せ、ともかく男の話聞くことになった」

「私の給料より高いな、それは」

フランシス卿はやや身を乗り出すと、テーブルに肘をついたまま、顎の前で両手を組み合わせた。

「それで？」

「そのとき男がダシユウッドに見せたのは、正確には地図というよりどこかの海岸線を描いたものの一部で——話から想像するに、海図だと思いますが——どうやら完全なものでもなかった。ダシユウッドは三十年ちかく旧市街で工房を経営していますが、地図の類は専門外。とはいえインクの具合から推測すると、ここ十年以内に製作されたものらしい。昼間ならさらに細かい点までわかったかもしれない。というのも、どんな紙が使われているかによって、年代をしぼることができるからです。ご存じの通り内乱期の数年間は、あ

らゆる資材が高騰しました。粗悪な素材を混ぜたり、代用品を使わざるを得なかったし、物資の供給もままならず、不足を補うため産地もさまざまでした。印刷物も例外ではなく、安価な外国製の紙を使った工房もある。ただし、それは民間に流通する場合です。我が国で作られる海図の半分は軍用です。軍用なら機密管理の問題から、海軍省直轄の印刷所で製作されるはずですから、まず旧市街の工房で作りはしない――ダシユウッドはそう説明したそうです」

「いやはや」とつぶやいたフランシス卿の顔には、好奇と困惑を足し合わせたような表情が浮かんでいた。

「ダシユウッドの話は的を得ている。数十年経った古地図でなければ蒐集家は欲しがらないし、図面が不完全では、情報の価値もない。そもそも地図などというものは日々、更新されていく。正確に、より詳細に。新聞と一緒にだ。なぜそんなことを訊きにわざわざやってきたのか、印刷工がおかしな客だと思ったのもうなずける……で、その客は、納得して帰ったのか？」

カルーは首を横に振る。

「兎にも角にも、ダシユウッドにとっては『カロードン・クロニクル』の印刷を間に合わせるほうが重要だったので、もっと詳しく知りたいのであれば、海軍省を訪ねるか、造船所近くの工房をあたる方がいと話して、ようやく引き取ってもらった。そうしたら客は去り際に、『何とかという工房を知っているか』と訊ねた。聞いたこともない名前だったので、ダシユウッドはもうその『何とか』を覚えていないそうですが、カロードンの印刷業組合に登録がないのは確かだと言っています。男は最後に『また来る』とダシユウッドに告げた……」

「ふむ――」

フランシス卿は腕を組んだ。そのまま背もたれに体重をあずけると、目は閉じたまま、天井を見上げるようにして言う。

「だがその客は二度と現れなかった、というわけだ」

「おっしゃる通りです」

「海図とはな……」

そう呟いたフランシス卿の眉間には、深い皺が刻まれていた。しばらく黙りこんだ後、姿勢を元に戻すと、カルーの目を覗きこんだ。「しかしもし仮に、その客がスカリスブリックだったとしても、彼は海軍省に勤めていたのだ。なぜそんなことが分からなかったのだ？」

「ご指摘の通りです。私も同じ疑問につまずきました。が、逆にスカリスブリックは、軍が製作した海図ではないと知っていたからこそ、カロードンの印刷工にあたってみたと考えることもできます。ああ、それから——言い忘れましたが、ダシユウッドがその図面に触れようとしたとき、男は血相を変えて、貴重なものだから慎重に扱えと要求したのだとか」

「……なるほど」

カルーの返答に、フランシス卿はふたたび思案する様子で沈黙した。

「スカリスブリックは海図とやらの真価を測りかねてはいたものの、少なくとも、欲しがる人間がいるということは知っていたのか。いや、違う——どの陣営なら高く買うか、それを知りたかったのか……？ まさか、彼はササラクを裏切っていたのではあるまいな？ となると話は別だぞ、マレク。いったい、海図には何が書いてある？」

フランシス卿の頭脳は、一度に複数の計算の実行が可能だ。カルーが告げた内容を精査し、いくつもの可能性をはじき出しては打ち消している。上司の様子を見てとったカルーは、さらにもう一步、話を先へと進めることにした。

「遺体の状況からみて、スカリスブリックが殺害されたのは間違いありません。検屍にあたった医者から今朝、結果報告が届きました。スカリスブリックの死因は、喉を裂かれたことで大量の血液を失ったからだ」

「死体は腐敗していたのだろうか？」

「スカリスブリックの首の骨に、刃物によると思われる損傷がみられたと報告にありました。致命的な傷です。もし刺客が、文書を奪う目的でスカリスブリックを襲ったのなら、確実にその場で手に入れているでしょう。昨日私が捕らえそこなった民兵は、文書を見たことさえなかった。にもかかわらず彼らは、我々もまた文書を探している」と知って、窮地を脱するための芝居をうったのですが」

そして郵袋しか目になかった国軍兵たちは、まんまと出し抜かれた。

彼らの逃亡を許したのは、作戦としては明らかに失敗である。だが、おかげで次に打つ手ができたのもまた、たしかだった。

カルーはその事実を淡々と受け止めた。

「スカリスブリックの殺害者が判明しないうちは、敵には我々が王党派を犯人とみなしていると思わせておく方が得策です。状況から判断するに、我々の敵はひとつとは限りません。ここは油断させて相手に次の行動を誘うべきです。さしあたって、王党派が文書の存在を知っていると推察できる以上、例の民兵を追うことは、我々の利害に矛盾しません。幸運にも逃亡した民兵は複数です。標的の数が増えれば、それだけ手がかりも増える」

「……君の言わんとするところはわかった。だが、ひとつ訊く」
フランシス卿の青い目が光った。

「君の主張どおり、逃亡中の民兵が王党派だったとして、連中はスカリスブリックの文書の内容を知っていると思うかね？」

カルーはキオ・リウイと名乗る若者の顔を思い出した。

柔らかな輪郭は二十代の青年のそれだが、正面にあつたのは一度見たら忘れられない強いまなざしだった。他人の喉に剣先を突きつけながら、その目が示していたのは威嚇でも、敵意でもなかった。冷静さと大胆さが実に危うい均衡を保ち、ともすれば傲慢にさえ見えるまっすぐな目。

あの若者は、嘘をつき慣れてはいない。

「否、です」

これまで何人もの口を割らせてきた経験が、カルーにそう言わせた。

おそらく彼らは、文書が文字以外の手段で記されたものと、あのときまで知らなかったのだ。緻密な計算や分析と同様、洞察力もまた、こうした仕事に欠くべからざる資質だ。情報は欲しいだけ揃うとは限らない。足りない部分は直感で補うことになる。

「そうか」

言って、フランシス卿は頷いた。

「敵を泳がせてみるという君の提案に異論はない。カロードンに潜伏している王党派のネットワークを洗いだせるのであれば、一石二鳥だ。しかしマレク、ひとつ言っておかねばならない。いまの我々には時間がない。リーグールは開戦の機会を狙っている。ここで外務省に勝手をさせるわけにはいかん。後々のためにも、それだけは避けたい」

「承知しております」

話は済んだ。

行商の男については最後まで触れないままだった。隠しごとをしているような後ろめたさがないわけでもなかったが、結局、個人の領域の問題だと思い直した。それが避けられない話なら、遠からず語るときはくる。

そう考える一方で、海図 という言葉がひっかった。

王党派。スカリスブリック。海軍省。気づくと、周辺には必ず潮風のおいがする。

概して物事は見た目ほど単純ではない。そういえばあの男も海に生き、海に沈んだのだと思い至って、ふたたびカルーは過去の亡霊がささやく声を聞いたような気がした。

事態には一連の出来事が複雑に絡みあっている。自分もまたそのどこかに、分がちがたく結びついているのではないか。人の世というのは数えきれない糸が織りなす大きな布のようなものだ。しかし、糸の始まりがどこに織りこまれているのか、見つけ出すのがむずか

しい。

「民兵の行方を追いたまえ。閣下の正体もだ」

フランス卿の声にうながされて、冷たくなったコーヒーを流しこむと、カルーは席を立った。冷えると余計にひどい味だった。

十

話はすこし時をさかのぼる。

「解毒剤なんてあるものか」

いまにも崩れそうな二階家の屋根裏部屋で、自称二セ医者は、トビアスとルンタに向かって言い捨てた。

「この手の毒は、傷口から体内に入り四肢の自由を奪う。極めて強力で、微量でも死に至るが、口から摂取する分にはなんともない。材料は草の根から絞った汁だ。南方じゃ鏝^{やじり}に塗って狩猟に使う。マメの一種が解毒に効くという話もあるが、確かめた者はいない……呼吸が浅いな」

テーブルで代用した「診察台」に横たえられ、キオは荒い息だった。

顔色が青ざめているのは、蠟燭の灯の下でも見てとれた。額に脂汗が浮かび、わずかに開いた唇は白くひび割れている。時折、口を動かしてはしても、不明瞭な言葉は聞き取れなかった。

「見ての通りだ。そのうち毒が全身に回って、息がなくなる。それでご昇天というわけだ」

「でもあんたは医者なんだろう。薬とか、治療とか——」

「手の打ちようがないものは仕方ない。こいつの体力と運次第つてところだ。それから何度も言うようだが、俺は二セ医者だ」

食い下がるトビアスに、ルーグはキオを見おろして、あっさりそう答えた。

初対面に等しい相手とはいえ、行商の物言いには腹が立った。男の勧める「靈験あらたかな薬」とやらの、惑わされかけたという話はこのさい無視して、トビアスは皮肉をこめて言う。

「あんたの患者は寛大なんだな。よく商売が続けられるもんだ」

「おかげさんで、『死人に口なし』でね」

恥知らずのぺてん師が。言い返す前にルীগは続ける。

「あんたたちを捕まえるのがあの陰気野郎の目的なら、おそらく毒は弱めてある。用無しだとわかるまでは、簡単に殺しちまうような真似はしないさ。聞き出すことを聞き出してからその辺に吊るしたほうが、よっぽど役に立つからな。閣下の運の強さに期待しよう。」

——フィリス」

振り返ったルীগの表情は、うわついた口調とはうって変わって険しかった。つられて背後を見たトビアスは、思わずぎよっとした。白い寝間着姿が戸口に立っていた。

——少女だった。

歳は十代の半ばだろうか。なんだって、こんなところに？ 動揺しつつもトビアスは、男の本能ですかさず相手の胸や腰に女らしい曲線を探した。熟していないどころか、気の毒なくらいにやせっぽちだった。ほどいたままの赤毛ももつれ放題。まだ自分を飾ることを知らないらしい。

「急いで湯を沸かせ。清潔な布が欲しい。それから麻黄を煎じてくれ。方法は分かるな？ できるだけ早く。ああ、それにラムも要る。瓶は雑囊のなかだ」

少女はくりりと背を向けると、暗がりの向こうに消えた。その動作がすばやすぎて、彼女の顔はよく見えなかった。蹴りあげた寝間着の裾から一瞬だけのぞいた脚の白さが、妙に目に焼きついた。

勝手を知っている風だが——まさかルীগの娘か？

でもルীগの髪は麦わら色だし、歳だって三十かそこらだろう。それに、家族には独特の親密さがあるものだ。他人が割りこむことを許さないその結びつきは、愛情だったり、ときには憎悪だったりするが、そうした感情を育くむには、彼らの間には何かが欠けている気がした。

かといって、歳の離れた男女が粗末なあばら家で一緒に暮らしているのかと思うと、単なる好奇心以上の興味もわいた。そのとき、

ルーグが不意に視線を向けたので、トビアスはあわてて別の疑問を口にした。

「マオウってのは何だ……？」

「熱や咳に効く薬だ。解毒できないなら、呼吸を確保して時間をかせぐ」

答えながらルーグは、丈長のコートを脱ぎ捨てた。胴衣の袖をまくり上げ、身軽な格好になると、慣れた手つきで短剣の先端をキオの襟首に差し入れる。そして上着ごと、一気に布を引き裂いた。

あらわになった傷口の周囲は、目にするのも恐ろしいくらい、紫色に腫れあがっていた。

「悪いがあんた、明かりを近づけてくれるか」

醜い傷に顔をくつつけるようにして、ルーグはキオの上にかがみこんだ。

「手の空いてるそっちの兄さんは、こいつを押さえてくれ。暴れる気力なんかないと思うが、矢傷というのは見た目よりも深い」

言われたとおりにルンタは、燭台を持って傍らに立った。手元を蠟燭で照らしてやると、ルーグの顔に濃い陰影が刻まれる。一方トビアスは、なるべく傷口を見ないようにしながら、キオの肩に手を置いた。華奢な外見からは意外な、しっかりした筋肉の感触があった。

そらした目は必然的にルーグに向いた。

まばらな無精ひげの合間に、刃物で作ったみたいな跡が左顎に走っていた。古傷に見えるが、喧嘩傷か、名誉の負傷か。いや、この薬屋にかぎって後者はあるまい。おおかた力モにした客の恨みでも買ったに違いない。

そのならず者のまなざしは、一点に集中していた。粗野な風貌にはおよそそぐわない硬質な光が、キオを見つめる目に宿った。そしてルーグは矢を握り、迷わず引き抜きにかかった。トビアスも、キオの肩先を掴んだ手に力をこめた。

ところが――。

「畜生。鏝がはずれた……」

「おい、どうするんだ？」

「俺が知りたいよ」

鏝を残して根元からはずれてしまった柄を、ルーグはいまいましたに睨みつけた。

「こいつは狩猟の道具と一緒にだ。万が一獲物に逃げられても、毒が回って途中でくたばるから、のんびり追いかけて回収すればいいって仕掛けた。えげつないな、あの野郎」

そのとき、溜め息混じりのルーグの言葉に応えるように、彼らの手下で苦しげな声がした。

「……下手糞め」

「なんだ。起きてやがったのか」

すつとぼけた声でルーグが訊ねる。あえぎながらもキオは、うつすらと目を開けていた。

「キオ……！」

トビアスとルンタは、同時に若者の顔をのぞきこんだ。キオは上体を起こそうと試みて失敗し、ルーグが差し伸ばした腕に助けられて、一層顔をしかめた。

「文句を言えるくらい元気なら、自分で引っこ抜いてみる。背後からまともに食らうヤツがいるか、このドジが」

「このまま言う機会がなくなれば、私が損をする」

「その前に、はるばるカロードンまで来てやった駄賃を寄せよ」

「お前の到着が遅れるから、予定が狂った」

「乗合馬車が混んでたんだ。おんぼろなうえに、道が悪いのなんの。途中で車輪がはずれやがった。乗り継いだ便は検問にひっかかるし――」

「馬なら三昼夜で着いた」

「クルコナから？ 冗談じゃない」

「あいかわらず馬が怖いのか」

「嫌いなだけだ。フィリス！ 芥子^{ケシ}の汁も持つてこい」

湯をはった洗面器と綿布、茶色の瓶と得体の知れない煎じ薬を届けると、戻ってきたばかりの少女は、先刻と同じように勢いよく部屋を飛び出していった。トビアスやルンタには目もくれなかった。なんとまあ、身軽な娘だ。

手渡された煎じ薬を口に流し入れる間、トビアスはキオの頭を支えてやった。苦いのか、甘いのか。若者は何も言わず、無表情に変化は見られなかった。

そのかわりトビアスは、きわめて重要な事実を発見した。

——キオの左耳には、穴をあけた痕がある。

まさか。トビアスは声に出さずにつぶやいた。いままで髪に隠れていて気づかなかったが、キオの左耳には、怪我とは違う痕跡がある。

いや、印と言うべきだろう。

「なんてこった……」

その印の意味を、カロードンで知らない者はいない。

——男の耳飾りは、貴族の慣習だ。

爵位と領地と、家門の財産すべてを受け継ぐ嫡子たることを示す、生粋のササラク貴族である証しだ。

「さあ、こいつを飲んで眠っちまうんだな。残った破片をえぐりだしてやる」

「墮落を誘う薬の助けなど必要ない」

芥子の汁が入った小瓶を口許につきつけられたキオは、首を横に振った。押し返そうと持ち上げた手が震えている。しかしその目に、不安や恐怖はない。

「目の届かないところで、好き勝手に身体をいじられるのはご免だ」
「強情が。勝手にしろ」

二人のやり取りも、トビアスの頭を素通りだった。トビアスはキオの横顔をじっと見つめていた。
そうだ。

脳裏で閃くものがあつた。そういえばルーグは、キオに向かつて言つたのだ。

「閣下」と――。

「大丈夫かい、キオ？」

傍らのルンタの声で、トビアスははつとなつた。

「どうやらあんた、信用がないみたいだぜ――二セ医者先生」
「疑つてみるのは大事なことだぞ」

ルーグは瓶の栓を抜き、中身をキオの傷口に注いだ。蒸留酒特有の刺激的な匂いが、たちまち部屋中に広がる。瓶の底に残つた分は、そのままルーグが飲み干した。

「あいにくこんな世の中だ。用心深くなきゃ生き残れない」

短刀を構えて、ルーグは慎重に狙いを定めた。刃が肌に触れたとき、トビアスの手の下でわずかにキオの身体が硬くなつた。

「眠るつもりがないなら黙つてろ。気が散る」

次の瞬間、ルーグは鋭い短刀の切っ先を、躊躇せずに押し込んだ。

+

ここはどこだ。

夜が明けてくるにつれ、トビアスは徐々に、考える余裕を取り戻してきた。窓の外はまだ暗かったが、海鳥が鳴きかわす声がする。

独特の匂いもした。少し生臭いような、湿つた空気の匂い。市場の魚だろうか？ それとも岸壁にはびこっている藻？ いや、これが潮の匂いというやつなのだろうと、トビアスは思った。カロードンに吹く風は東向きだから、ここは運河の東南だ。ほかにいろいろな匂いが混じっている。風下には、街の塵や臭いが吹き込んでくる。人間も同じだ。街の西側には身分の高い者が居を構え、東や南には、貧しい者や異国の者が流れていく。

半日も経っていないのに、昨夜の出来事は遠い記憶のようだった。というより、自身の体験とはとても思えなかった。国軍兵から逃れるために、ルーグの指示で飛び込んだのは古くからある教会だ。祭壇の裏手から隠し階段を下り、地下に作られた墓所を抜けた。人骨を積み上げた壁が途切れたときに知ったのは、どうやら旧市街の地下は、秘密の通路で結ばれているらしいということだ。どこをどう抜けたのかわからなかったが、通路は運河へとつながっていた。かつての街の支配層は、外敵に城壁を崩された場合に備え、脱出用の経路をちゃんと用意していたのだろう。そうしてあらかじめ準備してあった小船で、彼らは運河を渡ったのである。

地下通路の途中で倒れたキオは、ルーグが担いで運んだ。このあばら家にたどり着いたのは未明で、何度も意識が途切れかけながらも、肩に食い込んだ鏃を取り除く間、苦痛に耐え抜いた。もっとも最後は失神し、自分とルンタをあわてさせたのだが。

それから数時間が経過した。

あいかわらずキオの息は乱れている。それでもトビアスの目には、若者の顔はやや血色をとりもどしてきたように見えた。トビアス自身はというと、疲労困憊なのに、まったく眠気がやってこなかった。ルンタも同じだ。血走った目をしっかりと開いて、殺風景な部屋のあちこちを眺めている。テーブルと、小型の箆笥が一つ置いてあるほかは、家具の類はほとんどない。寝台も一つだけで、大柄な男が横になったらいっぱいだろう。作り付けの棚には、雑然とガラス瓶が並ぶ。

目の前の混乱が過ぎさったあと、今度は頭の中がごちゃごちゃだった。知りたいことは山のようにあるはずなのに、何を、どう訊いたらいいのかわからない。キオのこと。地下の抜け道のこと。

これからのこと。

本当に自分は知りたいと思っているのか、いないのか。それさえもわからない。考え出すと頭痛がしてきそうだった。何度か開きかけた口は結局、一言も発しないまま、閉じられた。

重苦しい沈黙が続くうち、さまざまな音が届くのにトビアスは気づいた。

そういえば夜の間ずっと、どこかで嬌声が聞こえていた。獣じみた吠え声もした。近所の住人がふしだらな行為にはげんでいるのかと慌てたが、恐る恐る耳をすますと、快楽や苦痛とは無関係であるらしい。祈りの言葉が混じったかと思えば、突然たがが外れたような笑い声に変わったり、規則正しく打ち鳴らされる拍手になったりした。先刻からは、調子つばずれの歌声を延々と聞かされている。

「気になるか？」

落ち着かない二人に訊ねたルーグは、若者の傷にあてた布を替えてやったところだった。

「表の騒音は聞き流してくれ。じきに慣れる。あれは救貧院だ」

寝台に移したキオに湯たんぽをあてがうと、ようやく一仕事すんだという顔で、ルーグは窓の外を見た。

「まあ、救貧院って言っても名ばかりだ。紳士淑女の市民の皆さんの不安をあおらないよう、貧民や病人を集めて、人目に触れないところにぶちこんでるだけだ。犯罪者なら牢につなげばいい。だが、貧しいってのは罪じゃないからな。まったくひどい場所なんだが……ああ、兄さんたちは民兵だっけ。それなら知っているだろう。おかげでこの近辺に寄りたがる人間はいないから、感謝している」

ルーグの言う通りだった。

救貧院を作ったのは共和政府だ。職につけず路上を放浪するばかりの怠惰な魂を救済し、健全な市民に矯正するという大義名分が支持されたのは、貧困が、犯罪や暴動を生む温床だとの懸念が、内乱を経験した支配層の恐怖そのものだったからだが、本当のところは、治安の維持と軍事力の供給の一石二鳥を狙った政府の施策にすぎない。

道端でのたれ死ぬよりましとはいえ、救貧院の生活は劣悪だった。高い塀に囲まれて、中をうかがうことはできないが、正気を失う者が後を絶たないのは、一晚中聞こえていた複数の声が物語っている。

唯一の出入口は重い鎖と厳重な鍵で封印され、門扉の前には昼夜、いかめしい顔つきの門番が立っている。彼は元死刑執行人で、内乱のあと仕事が減って生活に困り、転職したとの噂だった。なにより政府は、怠惰な魂　たちを捕えて救貧院に放りこむ役割を、トビアスら民兵に押しつけたのだ。

その救貧院が近いなら、間違いなくここは旧市街の東南だった。「どこへ行くんだ？」

それまで黙りこんでいたルンタが、おもむろに部屋を横切った。トビアスの問いに、ルンタは　王の首　亭で飲み明かしたときみたいな、ばつが悪そうな口調で答える。

「うちに帰るに決まってる」

「帰るって……？」

「もう夜が明ける。二度と家に入れてもらえなくなっちまうよ、トビアス」

「お前さん、本気で言ってるのか？」

あんな目に遭った後で。言いかけた言葉を、トビアスは途中で飲みこんだ。自分と違って、ルンタには帰りを待ってくれる人間がいる。その事実を失念していたつもりはない。そうはいつでも――。

「しっかりしろ、ルンタ。俺たちは追われているんだぞ」

ルンタは戸口で立ち止まり、はげしい勢いでふり返った。

「そんなことは、わかってる！」

大声にトビアスは絶句した。

普段は呑気なルンタの顔色が変わっていた。握りしめた拳を梁に叩きつけて、ルンタは頭を垂れた。息まで止まってしまったみたい。しばらくの間、動かなかった。やがてその口からひとつ、「クラリッサ……」という呻きが漏れた。

トビアスもまた、耐えがたい気分だった。

ルンタがどんな思いで一晩過ごしたか。推し量ろうとしても、トビアスには友人の胸の裡が想像できないだけでなく、かけてやる言葉一つ、思いつけないでいた。薄情だという自覚はある。でも、心

にもない気休めの台詞を口にするくらいなら、黙っていた方がいい。実際、いま外を出歩くなど問題外だった。黒づくめの秘書官が、逃亡者の身内を探さないはずはない。自分たちが立ち寄りそうなところを徹底的に洗い出し、網をはって獲物がかかるのを待っているだろう。もし、ルンタが捕らえられでもしたら？ 今度こそ、カルーは容赦しない。この場所だってバレたら最後、国軍兵が押し寄せてくる。逃げれば逃げるほど、逃げ場はなくなる。かといって、いまさら引き返すわけにもいかない。

いったい全体、何の間違いだ。

トビアスはちらりと行商を見た。「我関せず」と言いたげな顔で、ルーグは窓の外を眺めていた。見て見ぬ振りを決め込む気か。

「危険なんだ、ルンタ……」

結局、弱気がそのまま声に出た。それが氣に入らなかったのだろう。ルンタは声を荒げた。

「だから？ 危険だからどうするってんだ？ いつまでもここに隠れている？ それとも船に乗って国外に逃げるか？ 王党派みたいに……！」

「無理だよ、ルンタ。そんな金がどこにある」

「金！ そうだ。あんたはいつだって金だ。金の話ばかりだ。けど俺には、女がいるんだ。それだけじゃない。春には子どもも生まれる。家族ができるんだぞ！」

「……そうだったのか」

「結婚しようって言ったばかりだ。彼女もよろこんでくれた。なのに——！」

そのとき、不意にルンタの言葉が途切れた。

「ルンタ……？」

ルンタは口を閉ざしたまま、ゆっくりと後ずさった。ルンタの身体が戸口から離れ、トビアスは踊り場の暗がりを目をやった。

薄闇のなかで、あの少女が見上げていた。

「……やあ」

長い沈黙の末、戸口から覗く顔にトビアスは声をかけた。

案の定、返事はなかった。赤毛の少女はルীগを無言で見つめていた。

「フィリス」

脇からルীগが促す。「お客さんだ。おじちゃん たちに挨拶をしろ」

お前なんかの おじちゃん じゃないぞと言いたかったが、フィリスが自分を見た気がしたので、トビアスは無理矢理に笑顔を作ってみせた。

「そっういや、自己紹介がまだだったな。俺はトビアス。こいつはルンタだ。俺たちはカロードン市の民兵だよ。嬢ちゃんは？」

やはり少女の返事はなく、またしてもルীগが口を挟む。

「彼女はフィリスだ。フィリス・ネイミア」

「よろしくな、フィリスちゃん」

見知らぬ男が真夜中に突然やってきて、警戒しているのか。しかし、娘の顔に怯えや敵意の表情は見受けられなかった。むしろ、眼中にないという感じだ。まるでトビアスたちが、この部屋に存在していないかのように。

あまりの手ごたえのなさに、戸惑ったのはトビアスのほうだった。肉づきが悪い点をのぞけば可憐と言えなくもない。

ただ、いささか風変わりな子だ。

不思議な娘と、不穏な男の組み合わせ。立ち入った話をするのはためらわれるが、これもまた、なにかの符合かもしれないとトビアスは思った。目の前に横たわった、若者の耳にある印と同じ――。

トビアスは気を取り直して、やり場のなくなった作り笑いはその

ままに、ルーグに向き直った。

「ニセ医者先生。あんたの番だぜ」

それなら、この男がどうするか。

半分はルンタに聞かせてやるつもりだった。ともかく少し頭を冷やして、周囲の状況を見きわめておく必要がある。いいかげんな自分の脳味噌でも、それぐらいの考えは働く。

そうでなくても、この男がただの薬売りでないことは明白だ。軽薄を装った顔の下で、もっと厳しい何かがちらついている。ここ数時間あまりを振り返ると、その印象はなお一層、強くなった。とりわけキオを相手にするときには、抑えがきかなくなるらしい。

トビアスは注意深く、相手の出方をうかがった。好戦的な視線に、ルーグの口端がゆつくりとあがる。二人の男の間に、急速に緊張がみなぎった。少なくともトビアスにはそう感じられた、そのときだ。いきなり、こちら側にフィリスが走り寄った。

突然の抱擁にトビアスは面食らった。フィリスが自分の胸の周りに腕をまわして、しがみついていた。トビアスは啞然としてその場に立ち尽くした。よほど間拔けな顔をさらしてしまったに違いなかった。最初は目を丸くしたルーグが、声をあげて笑いだした。

「何がおかしい」

「兄さんはフィリスに気に入られたらしい」

「え……？」

昔から、女を扱うのは苦手だった。だから相手が子どもと分かったとき、どこかで安堵していたのだ。フィリスの頭は、トビアスの胸の位置にも届かない高さだった。

トビアスが抱き返す前に少女はぱっと身を離すと、ルーグの陰に回り込んで、そっと顔だけをのぞかせた。

「フィリスは歓迎するって言ってる」

そして三度目の正直で、ようやく気づいたのだった。そういえば、一度もフィリスの声を聞いていない。

ひょっとして、言葉をしゃべれないのだろうか。トビアスはいま

になって、初めてまともにフィリスの顔を見た。

そして「人形だ」と思った。

少女というのは、生身の女とはまったく別の特異な生き物だが、だとしてもフィリスは異質だった。彼女の顔からは、表情が欠落していた。微笑んでいるようにも見え、また、悲しんでいるようにも見える。しかし見開かれた大きな目は、空洞だった。その深い穴が、自分に向けられている。どこまでも吸い込まれてしまいそうな空洞にトビアスはうろたえ、思わずルークに助けを求めた。

「なあ、この子は——」

「俺の助手だ」

「助手……？」

トビアスの反応に、ルークは微妙な笑みを浮かべた。

「一三になるらしいが、言葉はしゃべらない。だが人の話すことはわかるし、よく働くぞ。気に入った仕事は夢中になって続ける。そういうときは、こちらがやめると言うときと怒りだすくらいだ。いたって優秀な助手だ」

「へえ……」

「ちよつとばかり、気難しいだけさ」

少女は、今度は窓の傍で伸びあがり、細い身体を左右に揺らし始めた。

フィリス・ネイミアは、自分だけの世界に生きている。

さすがのトビアスも、なんとなく事情を察したのだったが、こういう場合どんな顔をすればいいのか、見当もつかなかった。同情を示すべきなのか。それとも知らぬ振りか。動揺を悟られまいととりつくろうとしても、フィリスの瞳は、覗きこんだ者のすべてを暴き、すべてを飲み込んでしまう深淵だった。欲望も、混乱も、苦痛も。

「目覚めよ、カロードン……！」

救貧院の塀の向こうで、男が喚いていた。怒りの日は近づけり。情欲の渦におぼれる者は、悔い改めよ。放蕩の都に硫黄が降り注ぎ、裁きの炎が卑しい魂を焼きつくす。願わくば熱き灰より、我らが祖

国はよみがえらん……。

続いて絶叫が聞こえ、それきり喚き声は途絶えた。屋根裏部屋に
充滿する異様な空気に耐え切れなくなったルンタが、「心臓に悪い」
とつぶやいた。

「預言者 さ」

言いながら、ルーグは窓から射しこみ始めた朝日に目を細めた。

「内乱で頭がイカレちまった主教さまだって話だ。神に仕える身で
ありながら、流神の罪を犯した罰だと言うヤツもいる」

「フィリスは——怖がらないのか」

「その子は救貧院育ちでね」

「あんたが引き取ったってわけか」

「まあ……そんなところだ」

ルーグは、背後の窓枠を掴んで身体を揺すり続けているフィリス
を振り返った。

「ご機嫌だな、フィリス。アジサシが来てるのか？」

フィリスと一緒にしばらく東の空を眺め、ルーグはトビアスとル
ンタに向き直った。それからテーブルの端に腰を引っかけると、胸
の前で腕を組んだ。

「さて、ぼちぼち話を戻そうか」

「ああ……」

「で？」

訊ねる男の声は、意外なほどおだやかだった。

「何を聞きたい？　ここまで付き合わせた埋め合わせはしないとな。
答えられることなら、答える」

「答えられないことは？」

「訊くな」

明瞭な答えに、トビアスは思わずにやりとした。

「気に入ったよ、ニセ医者先生。友だちになるうぜ」

「そいつは光栄だ。俺は友人に恵まれてなくてね」

「どうせ、みんな殺しちまったんだろ」

トビアスの軽口に、ルーグはもつともらしく真面目な顔をしてみせた。

「ご名答だ。兄さんも気をつける」

トビアスは寝台を見、それからルンタを見た。ルンタはまだ、焦燥から抜け切れていない表情だったが、無言でトビアスに頷き返した。ひとつ息を吸い込むと、トビアスは切りだした。

「お前さんは、キオを知ってるみたいだな」

「ああ」

「キオが俺たちの隊に配属されてきたのは先月だ。同じ年頃の連中と比べたら、クソがつくくらい真面目だった。ただの一度の遅刻もなし、酒だって飲まねえ。二日酔いで仕事に来ることなんか絶対にない。正直、まいったね。おまけにずいぶんと度胸も据わってるってこともわかった。あんた、俺たちよりも付き合いが長いみたいだが、こいつはどういうヤツなんだ……？」

ルーグは思案するように一度、目を伏せた。数秒の沈黙のあと、静かな声が応じた。

「たしかに、知り合ってから長いが、付き合いはせいぜいひと月ってところだな」

「どういう意味だ？」

「こいつは……まあ、兄さんたちもそろそろわかつてると思うが、先月まで大陸にいた」

「ラーゲールか」

「ああ」

「つまり、王党派ってことか」

「想像に任せる」

「あんたも？」

ルーグが首を横に振る。

「俺は違う。だからといって主教派ってわけでもない。俺はただの流れ者だ。王さまが変わるうが、政府が変わるうが、知ったこっちゃない」

自分は違うというのであれば、キオはやはり王党派だということだった。恐れていた動揺は、やってこなかった。一日前だったら慌てたかもしれないが、いまは驚きはなかった。

「それがなぜ、王党派——いや、キオと一緒にいる？」

「単純な理由さ。金だ」

「金……？」

「この若様は見かけによらず、金持ちでね。雇われたのさ。五年前と同じだ」

そのとき、ルーグの目が鋭い光を放った。

「五年前に、俺がこいつを大陸に亡命させた」

亡命。半ば予測していたとはいえ、この耳で実際に聞くと、さすがに衝撃があった。そういう話をするからには、この男は自分たちをただでは帰さないつもりなのだ。トビアスは理解した。抜け目のない視線が、トビアスを凝視していた。大きな身体から、先刻まで感じなかった殺気が立ち上ってくる。

「……キオは——いや、彼はいつたい、何者なんだ……？」

「直接、訊くといい」

言って、ルーグは首だけを動かすと、目の端でちらりと寝台を見やった。

「お目覚めなんだろ、閣下？」

キオが寝台の上で身をよじり、肘を支えに上半身を持ち上げようとしていた。乱れた髪の間から、力強い目がトビアスとルンタを見た。そして時間はかかったが、しっかりと頭を起こし、かすれた声を喉から絞り出した。

「——第一三代グレートナ伯アレクシス・レオシュ・クレイグだ」

十

「機密文書……だと？」

若き伯爵が話し終えたとき、二セ医者はそう呟いて黙りこんだ。

「スカリスブリックが主教派に通じているという疑いは、以前からあった。我々は彼を監視していた。そんな折、ササラクの国益にかかわる重要書類を、スカリスブリックが持ち出したという噂が流れた。最初は我々も半信半疑だった。こういった世界にありがちな作り話だという意見と、文書の所在を突き止め事態を解明すべきだという意見に分かれた。その矢先だ、彼が失踪したのは。いまになつて考えれば、噂は彼自身が流したのだと思う。海峡を渡り、故国に逃亡する時間を稼いだつもりだったのだろう。しかし……」

ルーグが先の言葉を継ぐ。

「スカリスブリックは死んだ。このカロードンで」

「そう、そして文書も行方知れずだ。私は先月から追っていた。敵地に入るのに、民兵という擬装は都合がよかった。思わぬところでしくじってしまったが——」

寝台の掛け布の下から、キオがちらりとトビアスたちを見た。キオのまなざしには心なしか、後悔の色が浮かんでいる気がしたが、すぐにトビアスはその推測を打ち消した。たった一晩で、謎めいた若者の考えが読めるようになったとは思わなかったし、まして相手がキオ・リウイなどという民兵の小僧ではなく、由緒正しい名門貴族の子息だと聞かされてはなおさらだった。

やんごとない生れの若者は、フィリスが退出するのを待って、やんごとない話を披露した。キオがこれほど多くの言葉を語ったのは、出会ってからたぶん初めてだ。到底、お粗末な自分の頭では理解の

およばぬ内容だったが。

「マレク・カールの狙いも同じか。つまり内務省も、文書を探して
る……」

「それを知って、我々もようやく噂は本当だと信じ始めた」

「我々 ってのは？」

「ル・ロワの亡命宮廷」

「ラ・ゲールの首都に築いた王党派の結社だな」

「そうだ。我々はスカリスブリックを見張ってはいたが、彼は宮廷
では目立たぬ存在だった。亡命者といっても、元役人だ。社交界に
顔を出しこそすれ、彼が情報網の中枢に接触できたとは考えられな
かった」

「目立たないというのは、諜報活動にとってもっとも重要な資質だ
ぞ。 有名なスパイ ってのは、能なしと同じだ」

「不本意ながらお前と同意見だ。ここ数週間で、私はその事実を思
い知らされた。カロードンに入ってから彼の足跡は、まるで分か
らなかった……運河に浮かぶまで」

「それでお前は、ササラクの間諜が持ち出した文書とやらを、取り
戻そうというわけか」

キオは頷いた。

そのキオの顔をトビアスは眺めやった。端正な顔立ちは母親譲り
なのだろう。緑の斜面を駆け抜けていった婚礼の馬車。垣間見た黒
髪の花嫁。周囲が離反していくなかで最後まで国王に忠誠を尽くし、
運命をともしたグレトナ伯。彼らの間に残されたただ一人の息子
が、この自分の目前にいる。第一三代グレトナ伯アレクシス・レオ
シュ・クレイグが。

「万が一、文書が悪意のある第三者に渡った場合、我々にとって深
刻な不利益となる可能性がある。そうなる前に見つけ出して処分す
る。当然だが、公的には、我々はそうした文書存在を認めていな
い。したがって今回の私の任務も、公にできない」

「それで俺を呼び出したか」

「私は五年もの間、この島国を離れていた。事情に詳しい者がいると心強い」

言葉の意味をどう受け取ったものやら、ルーグは鼻を鳴らしてにやりとする。

「高くつくぞ」

「いくら所望だ」

「前金で一五〇〇。大陸金貨で」

「その件だが――」

先代の面影を探すとすれば、揺るぎないまなざしか。頑ななところも、きつと父親似だ。そんなことを考えていたら、キオの視線がふと宙をさまよった。

「じつは昨夜、財布を落とした」

「……いま何て言った？」

ルーグは何度もまばたきした。トビアスもルンタも、キオの顔を見た。そらとぼけているのか、真面目なのか。判断つきがたい顔つきをまじまじと眺めて、ルーグはしばらくぼかんとしていた。

「俺にはいま、『財布を落とした』と聞こえたぞ」

「そう言った」

「……閣下」

不気味な作り笑いがルーグの口許に浮かぶ。

「俺は前金が信条だつて話したよな？ 五年前に？ 忘れたか？」

「国軍兵に囲まれたとき、彼らを出し抜くために財布を郵袋だと誤認させた。だから小切手は無駄になった」

「……閣下」

「あいにく今週の給料は 王の首 亭で使ってしまったし――」

「……閣下」

「この分では当面、民兵隊からは給料をもらえないと思う」

「ああ、金輪際もらえないだろうよ。つまりお前は文なしか――この馬鹿たれ……！」

悲痛な叫びは声が裏返っていた。淡い金色の髪をかきむしり、ル

「グは相手を罵った。」

「ドジを踏むにもほどがあるぞ！」

「なあおい、もう少し穏便に話をしたほうがいいんじゃないか？」

相手は怪我人だよ、二セ医者先生。それにキオは——いや、ええと、伯爵さまは」

たちまちトビアスは口を挟むべきではなかったと思った。すさまじい形相で、ルীগが自分を睨んでいた。

「貴族だとも？　そうとも、このガキは貴族だ。じいさん、曾じいさんの代にさかのぼりや、王家の血だって入ってる名門だ。だが勘違いするな。俺は仕事を請け負い、こいつは対価を払う。身分がどうあれ、これは対等な契約だ。へりくだる必要なんかない。金つてのは便利だぞ。使い方さえ間違えなければな」

それからキオを横目で見やり、「人をひざまずかせるのは、身分や血統じゃない。もつと別のものだ」と言い添えた。

「しかし……その、ええと、閣下」

「キオだ」

一方キオも、はつきりとした口調だった。

「トビアス。議会の承認と国王の裁可なしに、何人たりとも爵位を得ることはかなわない。ササラクの王座が空位であるなら、正式には、私は爵位を継いでいないことになる。それに——俺は、貴族としてあなたたちと話をしたいと思ったことは一度もない。だからキオ・リウイでいい」

「しおらしくなったもんだ。見違えた」

ルীগがいかにも驚いて見せたが、そっけなくキオは言い返す。

「お前は変わらないな」

「誉め言葉だと受け取っておいてやる」

「答えを聞こう。引き受けるか」

「その前に、ひとつ大事なことを忘れてやしないか？」

あまり大切ではなさそうな口調で、ルীগが訊ねる。

「スカリスブリックの文書ってのは、何だ」

「言葉通り、内密の書類だという話だ。だが、確かめた者は誰もいない」

「そうは言うが、わざわざお前が大陸から乗りこんでくるくらいだ。おおかた、当たりはついているんじゃないのか？」

「おそらく、醜聞の類に属する内容だろう」

「それは噂ってやつのが大半が醜聞だからだ——あのな、閣下」

ベンチがわりにしていた机から降りると、ルーグはキオの横たわる寝台に歩み寄った。口端をゆがめていても、その目はもう笑ってはいない。

「スカリスブリックが小役人なのは事実だが、やつこさんは海軍省の主計局にいた。数字ってのは正直で、いろんなことを教えてくれる。いつ、どこで、何が起きたか。どんなときも金は、必要なところに動く。奴はそれが分かる立場にいたということだ。西方随一といわれるササラク海軍を統括する本陣の、な。それからもう一つ。

海軍省っていうところは魔窟でな。一言に役人と言ってもいろいろあるんだ。いいか、スカリスブリックは配給酒の割り当てや、拿捕賞金の勘定ばかりしていたわけじゃないぞ。……俺を馬鹿にするな」

最後は真顔で言い捨てて、ルーグはキオを覗きこんだ。

「どうして俺なんだ？ まさか、俺が懐かしくなっただってんじゃないだろう？ 見え透いた下心を見逃してやるほど、俺は優しくはないぞ。さあ、告白してもらおう。その文書とやらが何か。それを聞かないうちは、手は貸せない」

ルーグは寝台の縁にどっかりと腰を据え、キオの返答を待った。

キオが答えるまで、そうしているつもりだった。沈黙が続く、やがて根負けしたのか、キオはゆっくりと顔を回した。

「海図だ」

「海図……？ ははあ、秘密のお宝の地図か？」

「ルーグ。私が探しているのは、この世には存在しない 海図だ」

今度はルーグが黙る番だった。

この世には存在しない海図。

トビアスには皆目見当がつかない話だったが、ルーグはキオに鋭い視線を向けた。見返すキオもまた、相手を凝視していた、そのまゝ数秒、二人はにらみ合い、一気に空気が張りつめた。しばらくして、ルーグが喉の奥で押し殺した呻きを洩らした。

「……聞かなきゃよかった」

「知りたいと言ったのはお前だ」

「ああ、そうさ。だから余計に頭に来るんだよ」

「私も実物を見たことはない。噂はあくまでも　噂　だ。真相は違うかもしれない。それを確かめるのが私の役目だ。そのためにも、必ず見つけ出す」

「くそつたれ。因縁にかこつけて、こき使おうって魂胆だな」

「ルーグ――」

動揺を隠しきれず、ルーグは寝台から立ち上がると、大股で部屋を横切った。低い天井に頭をぶつけないよう、器用に梁をかわしながら。

「前から思ってた。つくづくお前は底意地の悪いガキだ」

男の顔面が蒼ざめたわけは知る由もない。「足元を見やがって」と言い残し、ルーグは振り返るうともせずに屋根裏部屋を出て行った。階段の軋む音が離れていく。

「おい……?」

豹変ぶりに、ルンタが首をかしげた。

「あの旦那、突然どうしたんだ……?」

ルーグがいなくなると、キオは自力で身体を起こした。そして窓の外に目をやり、かすかに眉を動かした。トビアスもつられて外を見る。粗末な屋根が連なる先に、運河が覗いて見えた。すでに日は

高く、河面が白く輝いていた。

キオは、窓枠に切り取られた風景を長いこと見つめていたが、やがて静かに口を開いた。

「彼はかつて船に乗っていた」

「ああ———そういや、亡命の手引をしていたとか言っていたな。ニセ医者つてのは、そのための隠れ蓑なんだろう？」

「もっと前の話だ———内乱の前だ。内乱のさなかも、彼は海にいた。内乱に巻き込まれたのは陸だけではない。戦闘が激しくなっていたところ、彼の乗っていた船が沈められて、大勢の死者が出た」

キオはそこで言葉を切り、二人に視線を戻した。

「……彼ひとりが助かった」

ああ、というルンタの声。

「運が———よかったのか……？」

「幸運だったのかどうかはわからない。彼は仲間を———喪った。それまで海で過ごした人生も、誇りも———人を信じる心も、そのときに一緒になくなったのかもしれない」

半ば独りごとのようにキオはそう語り、聞き取れないぐらいの小さな吐息をもらした。

「ニセ医者———いや、ルーグは……ひよつとして海軍に———？」

トビアスの問いかけにキオは答えなかった。

どういった経緯でルーグだけが生き延びたのか、それ以上の話もなかった。トビアスはただ、ルーグという男の過去を知る数少ない人間の一人がキオなのだとして理解した。それきりルーグが海に戻らなかったとすれば、理由が何であれ、脱船と同じだ。軍規は彼に死罪を申し渡すだろう。ひとたび脱船者となれば一生、身元を偽って生きていかなければならない。故郷に戻ることもなく、本当の名前で呼ばれることもなく。

考えてみると、この二人の境遇はどこか似ていた。キオもまた、内乱ですべてを失った。家族と領地を奪われ、家名を捨てて、祖国を離れなければならなかった。反目し合っているように見えて、二

人の間には、通じ合うものもあるのかもしれない。任務の片腕にキオがルーグを選んだのは、顔なじみだからという理由のほかにもありそうだった。

もしキオが、本来の身分を明かしたなら。

キオが――いや、アレクシス・レオシュ・クレイグの名前が、王党派の旗印として、主教派を脅かす存在になるのは確実だった。その事実の大きさに、トビアスはあらためて気づいた。亡命貴族の多くがそうであるように、享樂に耽り、何不自由ない一生をラッゲールで終える生き方だつてあるだろう。だがキオの性格からすれば、そうした選択は最初からなかったに違いない。まして危険を冒して帰国したからには、託された荷を引き受ける覚悟があるということだ。

いつかその日は来る。もしかしたら案外、早く。本人が思うよりも早く。

「いま彼に残つてるのは、どうしようもなく不愉快な言動しかない。そんな男に頼らなければならないのは、まったくもって呪わしい状況なのだが……」

キオが言い終わらないうちに、再び踊り場で気配がした。体格の割に、足音は軽い男だ。

「呪術は俺の専門外だからな」

ルーグは両手に鍋を下げて、屋根裏部屋に戻ってきた。出ていったときの動揺はどこへやら、意気揚々としていた。ワインとオレンジと、香辛料のいい香りがする。錫のカップに注ぐと、ルーグはそれぞれに差し出した。

「飲め。解熱と疲労解消に効く。よく煮立ててあるから安心しろ」
ワインは温かく、蜂蜜の味がした。急激に空腹感に襲われ、トビアスもルンタも一息に飲み干した。その間に、ルーグがもう一つの鍋の中身を取り分けた。豆と穀類を煮込んだだけの簡素な粥だったが、胃にしみる美味さだった。

「閣下。さっきの話、担保が必要だな」

匙を運ぶ傍らで、抜け目のない視線がキオを注視していた。席をはずしていたのはものの数分のはずだが、貪欲なニセ医者顔を取戻したようだ。

「担保……？」

「報酬の支払いは待つてやる。そのための担保さ」

「それなら、私自身だと答えておこう。私が無事、ラッゲールに戻れば、金は払うことができる」

「誰が払う？」

「イシュト殿下」

即答だった。その名前を聞いたとたん、トビアスとルンタが息を飲む。

「皇太子直々のご命令とはね。さすがはグレートナ伯爵でいらっしゃる」

「正確には、ササラク王家の依頼と言うべきだが。付け加えれば、私は今回の件に関し、全面的に裁量を一任されている」

「つまりお前は宮廷の特使ってことか。やれやれ、恐れ入った」

意外な答えでもなかったのだろう。ちっとも恐れ入った様子はなく、ルーグは首をすくめてみせた。

「美味しい話にや裏があるとはよく言ったもんだ。閣下。嘘も方便って言葉を覚えたほうがいいぞ。先々、苦しむ羽目になるのはお前だ」そしてルーグは無頓着に言った。

「七〇〇〇」

無頓着すぎて、トビアスは聞き逃したくらいだった。というより、あまりにも法外な数字だったせいで、耳がおかしくなったかと思っ

た。

「何だって……？」

「七〇〇〇ギブリンだ。ほかならぬお前の頼みだ。利子をつけて七〇〇〇で手を打とう」

「正気じゃないぞ！」

キオが答えるまえにトビアスが叫んでいた。

「そんな大金、誰が払うもんか。だいたい、何に使う気だ……」

「誤解してもらっちゃ困る。俺の取り分は四分の一だ。十分の一ずつ、兄さんたちにやる。もちろん、ただでとは言わない。兄さんたちにも手伝ってもらおう。二十分の一はフィリスに。残りの金で船を買う」

「船……？」

「世界の果てまで行ける船。足がめっちゃ速くて、頑丈で、なにより美しい——なに、この国から逃げ出すときの算段さ。さて。そんなわけで今回だけは特別に、後払いで引き受けてやる。どうだ、全権特使殿？」

「待ってくれ」

口を挟んだのはルンタだった。

「俺は、金はいらない。そのかわり家族を助けてくれ。俺の女と——子どもを。助けてくれるのなら、なんだってする。それが条件だ。頼む……」

ルীগは少しだけ思案する様子を見せたが、すぐに頷いた。

「いいだろう。俺に心当たりがある。安全なところに匿ってくれるよう頼んでやる。ルンタの取り分は、そのために使う。したがって配分率に変更はなし。ほかに異存がある者は？」

キオが片手を掲げる。

「トビアスとルンタは、私につきあって巻き込まれたただけだ。二人が望むなら、いつでも抜けていいと約束しろ。それから二人を危険にさらすような真似は、断じて許さない。二人の身に何かあれば、そのときは私がお前に報復をする」

「ふん。よからう」

「では、私もお前の条件を呑もう」

キオが自分たちの安全を第一に考えてくれたのはうれしかったが、正直トビアスは言葉がなかった。金額も、考えることも、ルীগは桁外れだった。拿捕賞金よろしく、さっさと大金の配分を決め、三年は遊んで暮らせる金までくれてやって、いったい何をさせようと

いつのか。

「あまり深く考えるな。乗りかかったなんとやらって言うだろう？」
まだ口が半開きのトビアスを一瞥し、ニセ医者にはやりと笑った。
とはいえ、一理あるのも事実だった。

いつ、どこで襲撃されるか分からない状況では、互いが目の届くところにいるほうがいい。だいたいトビアスもルンタも、カルーの目からすれば、もう片棒を担いでいるも同然。下手をすると二人から話が漏れ出さない保証はなく、だったら逆に、共犯にしてみっとほうがつ取り早い。

ルーグはキオに向き直った。

「断つとくが、俺は国のために仕事を請け負うんじゃない。忠誠だの正義だの、大層なお題目に興味はない。俺が動くのは、自分のためだ。それから金のため。だから結局、俺のため」

「強欲だな」

「今ごろ気づいたのか？」

「いや」

何の感情もこもらない声でキオが答える。

「思い出した。今ごろになって」

ニセ医者が粗暴なのは外見だけだと、そのときトビアスは思った。野蛮な顔を装ってはいるが、頭はきわめて理性的で、かつ精緻にできている。

ひそかに戦慄を覚えたトビアスの前で、ルーグは満足気に目を細めた。

「商談成立だ」

+

朝食のあと、さすがに眠気が襲ってきた。床に敷いた毛布にくる

まいったが最後、トビアスは眠りに落ち、目が覚めたときにはすでに午後の太陽が照りつけていた。

顔色はさえなかったが、ルンタもいくらか眠ったようだ。ルンタは起きぬけのトビアスに向かって「昨夜は悪かった」と言い、トビアスもまた「気にするな」と答えた。いまは「心当たりがある」という二セ医者 of 言葉を信用するしかないのだと思えば、幾分気は楽になる。しかし同時に、そう思う自分がますます薄情に思えてくる。すまなそうなルンタの顔を見るのは、もっとつらかった。

一方、寝台にキオの姿はなかった。狭い屋根裏部屋でルンタと向き合っているわけにもいかず、下へ降りてみると、キオはちょうど着替えをすませたところだった。質素な古着は、どうやらルীগが調達してきたらしい。トビアスやルンタの分もあった。腹の周りが少々窮屈だったが、洗濯されており、二人とも黙って民兵の制服と取り換えた。

昼飯に鶏と豆の薄いスープを食い、午後にはもう、キオは歩きまわることができるようになった。朝でかけたきりのルীগはまだ戻ってきておらず、フィリスが包帯を取り換えたが、その間フィリスはもちろん、キオも一言もしゃべらなかった。

「何とか言つてやれよ、キオ」

居心地が悪くなったトビアスが訴えても、ひとこと「手間をかけた」。フィリスはあの空洞の目でキオを見つめ、キオの表情にも変化はなかった。結局、余計に空気が重くなっただけで、ルンタも諦め顔で肩をすくめる。

この奇妙な共同生活は、はたしていつまで続くのか。始まったばかりというのに、とにかく頭が痛いことだらけだった。とはいえ屋外に自分たちの居場所はない。国軍兵の赤マントは言うに及ばず、追手がいつも制服を着ているとも限らない。雑踏に潜む目に、どうやって気づけというのだろう。

途方にくれつつトビアスは窓の外を見た。小さな窓枠から見えるものだけが、いまのトビアスにとって唯一の世界だった。

「あ……」

運河を船が渡っていく。どこに赴く船だろう。引き潮に乗り、ぐんぐん下流へと向かっている。三本マストの大型船だ。外洋をこえ、はるか東方をめざすのだろうか。

今までは船を見ても、そんなことを考えたことはなかった。たった一晩で、自分自身までもが変わってしまったのか。そう思うと、物悲しい気分だった。見慣れた景色なのに、昨日までの日常とはかけ離れた世界がそこにあった。

もっと遠くまで見ようと窓枠から身を乗り出したら、日差しに目がくらんだ。光が強すぎたせいか涙がにじみ、風景がぼやけた。そうか、この場所からは船が見えるのだ――。

その日の午後、キオはひたすら『カロードン・クロニクル』を眺めて過ごしていた。王の首 亭でセルトーから手に入れた最新号だった。

「なにか面白い話でも載ってるのか？」

「いや」

開いているのは広告欄であるらしい。トビアスがキオの手元を覗きこむと、小さな枠がぎつしり紙面を埋めていた。

「俺には何て書いてあるのか、さっぱり分からねえがなあ」

「古地図売ります。乞う連絡。当方、稀少品」

「ああ……蒐集家同士の売買か」

「スカリスブリックは、『カロードン・クロニクル』の広告欄を連絡手段に使っていた」

「え……？」

「相手が誰なのかわからない。あらかじめ符号は決められていたようだ。たとえば 北北西 は 至急、 錨地 は 接触。」

浮標 は 警告。でも、おかしい。今週号にも広告は載っている……これが印刷されたとき、スカリスブリックはもうこの世にはいなかった。――ありえない。二週間前にスカリスブリックは、この

広告欄を通じて相手呼び出している。彼が消えたのはその直後だ」
キオはそう話しながら考え込む顔つきになり、それからトビアス
が見つめていることに気づいたのか、「こんな話を、あなたとする
はずではなかったのだが」と苦笑した。

「まあ、ニセ医者先生が言う通り、乗りかかった船ってやつだろう
よ」

「ルーグか——」

「何だかんだいっても、おかげで助かったんだ。文句は言わないさ」

「トビアス。あの男には用心した方がいい」

「どういう意味だ？」

「あの男があなたたちを引き入れた目的は、仕事を手伝えさせるため
じゃない。彼は、あなたたちを——」

そこで口をつぐんだのは、階下で床を踏む音がしたからだだった。

キオは即座に立ち上がって、戸口へと移動した。下がっているよ
う二人に手で合図を送り、自分は背を壁につけて武器をかまえる。

「ルーグが戻ってきたんじゃないのか……？」

「あの男の足音と違う」

「もしかや追手か——」

「わからない。しかし気配は一人」

足音が階段をのぼってくる。下にはフィリスがいたはずだ。彼女
は無事か。

トビアスとルンタは机の陰にちぢこまって、息を殺した。

足音が止まる。

キオの目が険しくなった、そのときだ。

「おやおや、どなたもいらっしやらんのかい」

老女の枯れた声がした。

さすがのキオも完全に拍子抜けだった。

現れたのは、腰の曲がった白髪の女性だった。彼女はキオを押しつけて、ずかずかと部屋にあがりこんだ。

「お兄さん、物騒なものを所持だねえ？ 年寄り相手に、そんなものはいらないよ。あたしならもうすぐお迎えがくるからね。ほほ、そう言って、もう何年にもなるねえ。だけど、いまだに来てくれないんだよ、お迎えが。きっと死神さまも忙しいんだね。こう戦争が続いちゃあね——その椅子、かけてもいいかい？」

「……どうぞ」

「いやだいやだ、膝が痛くてたまらない。でも夏場はまだいいんだよ。冬はひどいもんだ。骨が軋むみたいさね。おお、ありがとう」
トビアスが手を貸してやると、老女はよろめきながら椅子に腰を下ろし、大儀そうに深い息を吐いた。

汚れた白髪はぼさぼさで、顔の大半が隠れてしまっていた。土埃と泥にまみれた布は、もはや服と呼べるような代物ではなく、鼻を刺す嫌な臭いに、トビアスは思わず顔をそむけそうになった。まるで救貧院から抜け出てきたみたいな風体だ。

「部屋が暑い。なにか汗を拭くものをお持ちでないかね」

「あなたは一体……」

「この部屋の家主さあ」

「……大家——？」

「ちよつと留守にしている間に、住人が増えたみたいだよ。いいかい、この屋根裏部屋の部屋代は週に八デナリ半だ。ルールは簡単。女と厄介事は持ちこまない。それと、家賃は金曜日までに前払い」
キオは着替えにあったシャツを、手ぬぐい代わりに老女に差し出した。

「あいにく金の持ち合わせがない」

「誰だってそう言うんだ。持ち合わせがない、明日払う。明日になれば、そのまた明日って具合にね。でも、そんなことをしても無駄

だよ。ちゃんと覚えてるからね。こう見えても、ものを覚えるのは得意なんだ。まあ、今日のところは大目に見てあげよう。お兄さんは親切だし、なにより男前だからね。あたしがあと十年、若かったらねえ、ほっほっ

老女は受け取ったシャツを広げて匂いを嗅ぎ、「こんな小汚い婆にはもったいない」と笑い声をたてた。

無表情なりに当惑気味のキオは、黙って老女の動作を眺めていた。老女はうつむいたままごしごしと顔を拭き、続いて腕まで擦り始めた。生成の木綿地が見る見る黒くなる。あまりの光景に、乱暴な足音に気づくのが一瞬遅れた。

「お兄さんがキオだね」

階段を駆け上がってくる音にはっとしたキオに向かって、老女は突然、そう言った。

「思っていたよりも若いねえ。伯爵さまなんだって？」

キオの顔が強ばる。一方、足音はもう、すぐそこだ。

「どうしてその話を……」

老女が答える前に、扉を破って飛び込んできたのはルーグだった。

「遅かったか——！」

室内を見渡すや開口一番、荒い息でルーグは呻いた。そしてささず老女を指さすと、まだ肩を上下させながら訊ねる。

「おい、こいつはいつからここにいて？ 余計なことを言わなかっただろっな……？」

「噂は聞いてるって話をしていたところだよ」

白髪に両手の指をつっこんでこそ動かしながら、老女は笑った。

「高潔で志の固い若様ですってねえ、ほっほっほっ」

「何がほほだ——ちよっと待て。気位が高い強情なガキだとは言ったが……」

「ほっ」

キオに睨まれ、ルーグは舌打ちをすると男たちに向き直った。

「忠告しておくが、この女の言うことを真に受けると痛い目にあうぞ」

「それはお前の経験か？」

「ああ……いや、違う。そうじゃない。断じて違う。いいか、この女はな——」

「コリー・ネイミア。フィリスの母親よ」

そのとき、唐突に女の声が割り込んだ。

「母親——？　たいへん失礼だが、それは……」

「それとも、レティシア・フィンレイと名乗った方が分かりやすいかしら？」

ルーグ以外の全員が茫然となった。

そこに老婆の姿はなく、赤毛の若い女が、背筋を伸ばしてすつくと立ち上がった。ぼろぼろの衣装をまとい、白髪のかつらを手に下げて。

まるで舞台の中央に立つ主演女優のように。

美しい。

自分の知っている言葉が、大した数もないことは承知している。だが——トビアスは、ほかに言葉を思いつかなかった。

老婆の扮装を脱いで、藍で染めた衣服に身を包んだレティシア・フィンレイことコリー・ネイミアは、男たちを交互に見比べた。

顔と手足の汚れは落としてある。赤毛を無造作に結いあげているから、白い首筋はむき出しだった。それは肩に向かって優雅な曲線を描き、形のよい胸をたどって、豊かな腰へと続いている。すつきりとした鼻に細い顎。大きく見開かれた聡明な瞳は、深淵な緑色だ。「この女が戻ってくる前に、帰るつもりだったんだ。まるで犬っ子みたいに鼻が利く女さ。金のおいをかぎつけちゃあ、呼びもしないのにやってくる。案の定、先回りしていやがった——」

「話を持ちかけたのはあんたよ、ルーグ」

「話さなきゃ、治安判事の前で何もかもばらしてやるって脅したのは誰だ」

「あたしはあんたの相棒ですもの」

「相棒つてのはな、互いに信頼しあえる同志をさしている言葉だ。お手軽に利用できる都合のいい相手とは違う」

「酷い人。利用してきたのは、あんたのくせに」

「人聞きの悪いことを言うな——」

ルーグが反論の台詞を探している間に、コリーはルンタに視線を移した。

トビアスは女の顔から目を離すことができずにいた。ふっくらとした唇が動くと、「婚約者は無事よ」と聞こえた。高からず、低からず。心地のよい響きだった。

「あたしがちゃんと連れて行っただわ」

「連れて行っただって、どこへ」

ルンタの問いに、コリーは控えめな笑みを返す。

「場所は言わないほうがいいと思う。少なくとも、当面のところはある高貴な人物のお屋敷だということだけは、お話ししておきましょう。無粋な連中は決して立ち入ることのできない場所。安心していただいて結構よ。そうそう、ルীগ。マダム・リジーがくれぐれもよろしくつて。この前届けてもらったしわ取りクリームと美顔水は、朝に塗るのかしら、それとも夜、塗るほうがよくって……とおたずねだったわ。たまには顔をお出しなさいな。せっかくの上客をなくすわよ。ルীগ様ったらこのところちつとも寄ってくださらないのよう、つれないのよねえ……」

コリーは芝居っ気たっぷりに品を作り、上流階級の口ぶりを真似てみせた。うんざり顔でルীগが嘆息する。

「好きに塗りたくれて言うておけ。どうせ、中身はただの井戸水だから。伝言はそれだけか？」

「注文書 を預かってきたわ」

「見せてくれ」

コリーは折りたたんだ紙を、胸元から取り出した。伸ばされた手が届くと見えた瞬間、コリーはルীগの鼻先で、すばやく紙をひるがえした。

「おい、そいつを寄せよ」

「ねえ、伯爵さん」

抗議する男は無視して、注文書 を扇子がわりにばたばた胸元をあおぎながら、コリーがキオに歩み寄る。

「この不埒な男は、あなたに一体いくら要求したのかしら？」

「五〇〇〇だ」

横からルীগが口を挟む。

「五〇〇〇……？ 嘘おっしやい」

「本当だ。俺の取り分は四分の一。あとはいつものように山分けだ。嘘だと思ったら、閣下に訊いてみる」

本当は七〇〇〇ギブリンだ——トビアスは思ったが、ルীগがこ

ちらを睨んだので、口には出さなかった。虚偽の数字と気づいているのか、いないのか。コリーはキオの前に立って相手をじっと見つめた。キオもまた、ちらりとルীগに視線を流す。ルীগは、不敵な目つきで口端を上げた。

一瞬の間に、複数の視線が交錯した。声はなく、それぞれの思惑だけがぶつかりあった。

はたしてトビアスの予想を裏切って、キオはコリーに視線を戻すと無言でうなずいた。

「ふうん」

意外そうに呟いた女は、豊かな胸を押し上げるようにして腕を組んだ。まだ疑わしげな目つきでルীগに言う。

「それなら、あたしの分は五分の一ね」

「高すぎる。せいぜい八分の一だ」

「譲れないわ。五分の一よ」

「――七分の一」

「五分の一」

「コリー。七分の一だ」

そこで女は少しの間、口を閉ざした。

「……六分の一」

「――いいだろう。六分の一だ」

「決まりね」

ルীগは 注文書 をひたくり、コリーはキオに向かってにっこりと笑いかけた。トビアスなら思わず目尻を下げているところだが、女優の完璧な微笑にも、キオは鉄壁の構えである。

「あたしがお気に召さないようね、伯爵さん？」

「信用できる人物なのか、はかりかねている」

「それはあたしが女だから？ それとも女優だから？」

「両方だ」

躊躇のない口調に、コリーの目が丸くなる。

「素性の知れない人間を信用するわけにはいかない」

「ごもつとも。ですが、伯爵さん。レディに根掘り葉掘りお訊ねになるのは、紳士の礼儀に反しましてよ」

「あなたは役者だ。別人になりきって見る者を騙すのが商売だ。そういう女性は一——」

「淑女とお認めにはならないというのね。世の中にそういう殿方が少なくないことは、たいへんよく存じておりますわ。お言葉を返すようだけど、どんな女も、好きな男の前では理想の女を演じようとするものよ」

「理想の女……？」

「どういった種類の女がお好みかしら？ あたしはどんな女だって演じられるわ。お望み通りにいたしましょ」

「偽りには関心はない。私が求めるのは真実だけだ」

「評判通り、お堅いこと」

「あいにく性分だ」

「そのぐらいいしておけ、ご兩人」

ルーグは紙面から顔を上げ、不毛な応酬をさえぎった。

「閣下。俺と彼女は古い付き合いだ。見ての通り、コリーはいろいろな顔を持つてる。彼女の才能はこういう仕事には欠かせない。……」

「性格はやや難ありとしても」

「その女優がなぜこんな場所にいる。失踪したとかいう噂だったが、駆け落ちの相手とやらはお前か、ニセ医者」

「冗談はよせ」

糾弾の矛先が自分に向くと見るや、たじろぎつつルーグは弁明を始める。

「第一に、失踪話はこの女の自作自演だ。それから彼女は——情報の使い手だ。ここも、言ってみりや隠れ家の一つで……」

「一時的な避難場所にしては、ずいぶんと住み慣れているようだが？」

「もとは俺の下宿だった。それをいつの間にか……」

二人のやりとりを聞きながら、トビアスは先刻から、なにやら胃

のあたりがうごめいているような気がしていた。

二セ医者と女優が浅からぬ仲であるという事実は、中年男のささやかな嫉妬を掻き立てるには十分だった。初対面同然の相手に、おかしい話には違いない。しかし、聞き流そうとすればするほど、男女の会話は大きく聞こえてくる。

羨望と絶望の間を揺れ動く心で、「彼女は女優だぞ」とトビアスは自分に言い聞かせた。どんなふうにも振る舞えば男が振り向くか、彼女はよく知っている。彼女にとって、自分は観客の一人にすぎない。俺が見ているのも、コリー・ネイミアじゃない。レティシア・フィンレイだ。

にもかかわらず――。

トビアスの耳は、「娘のためよ」というコリーの声をとらえた。「街中でフィリスを連れていけば、否応なしに目を引くわ。でも、ここなら誰も気にとめない。この場所に集まってくるのはみんな、何かを失った人間だから。一人ではまっとうに生きていけない住人ばかりだけれど、だからこそ口もつぐむし、支えあいもする」

心なしがそれまでとは異なる調子で、コリーは続けた。

「ひとつだけ教えて差し上げましょう。私は女優になる前から情報屋だった。だけど、女優になったおかげで社交界にも迎えられたし、いろいろなこと役に立った」

巷でささやかれる風聞が事実なら、「いろいろなこと」には、国王との情事も含まれているのだろう。

今度ははつきりとした嫉妬を覚えつつ、まさかフィリスの父親は国王陛下じゃないだろうなとトビアスは思った。とはいえ、それをここで訊くわけにもいかない。万が一そうだったとしても、女がそれを告白するはずはない。内心溜め息をつきながら、トビアスはコリーを見つめるしかなかった。

「花形女優が、こそこそと他人の秘密を盗むのか」

「よして。私が盗むのは、国家の秘密」

キオの問いに答えながら、コリーは目を輝かせる。

「あたしは、最高のものしか欲しくないの。財産も、贅辞も。もちろん、男も」

「では、なぜ情報屋に？」

「伯爵さん。この国でいま一番高く取引されるものが何か、ご存じ？」

そうして女優は、勝ち誇ったように男たちを見渡した。

「情報よ。そうでしょ、ルーグ？」

「ご名答」

ただひとり平静なルーグは、マダム・リジーなるご婦人からの注文書 を、ひらひらと揺らしてみせる。

「マダムの話じゃ、どうやら我らが海軍は、シノン沖を海上封鎖する気らしい。 国務評議会の極秘決定だとき」

途端、コリーと向き合っていたキオの目つきが変わった。

「確かなのか」

「マダムの耳は地獄耳だ」

紙片を手に取るや眉をひそめたキオに、「暗号だよ」とルーグが言う。

「こいつを読むには、ちょっとした工夫がいる。 処方箋 が必要なのさ」

「それはどこにある」

「俺の頭の中」

ルーグは意地の悪い笑みを浮かべ、自分の頭を指で叩いてみせる。紙片をつきかえすと、キオは窓の外をにらんだ。

「必要なときには遠慮なくち割らせてもらおうとしよう。しかし、その話が本当なら——時期尚早だ。海軍にそれがわからないはずはない。彼らはラッゲールとの開戦には慎重だったはずだ……」

「おおかた、外務省に焚きつけられでもしたんだろう。レイヴンクロフトがどうでるか、見ものだな」

言いながらルーグは、 注文書 を丸めて皿に乗せた。その上で手を動かすと、露店の見世物のように、紙切れは明るい光を放って

燃え上がった。炎が輝いたのは数秒で、やがて光は小さくなり、あとに残った灰は吹き込む風で床に散った。

「さあ、俺たちはどうする？」

問いかけに振り返ったキオの視線は、まっすぐルーグに向けられていた。

「今夜、でかける」

+

こんな経験は初めてだった。

一目惚れと言ってもいい。ルンタが話しかけても、「ああ」とか「うん」とか、うわの空で返すだけ。流れる雲を窓から眺めては、何度となく溜め息をついている。

いまやトビアスの頭のなかには、コリー・ネイミアのことではいっばいだった。

たしかに女優は、これまで出会ったどんな女よりも美しかった。だがトビアスの胸中をいつそう波立たせたのは、「フィリス」の名前を口にするときの女の顔なのだ。

我が子をいつくしむ気持ちと、胸の奥深くに抑えこんだ憎悪。相反する二つの感情が入り混じり、せめぎあっていた。どちらも愛から生まれ、それゆえに苦しい。その苦悩を隠そうとして、女は演じている。強く、美しい女を。

だとしたら、コリーが美しくないわけがないではないか。

そんなコリーはやはり、ひとりの女にすぎないのだった。女優だろうが、情報屋だろうが、コリー・ネイミアはただの女だ。そこに気づいたのが運の尽きだった。

コリーの顔、コリーの仕草、コリーの言葉。

瞼で、脳裏でトビアスは繰り返す。そうした合間になぜか、その

昔、逃げられた女房と初めて愛を交わしたときのことを思い出したりもした。

言い寄ったのは女房のほうだった。いつものようにトビアスが羊の放牧に出かける途中、森に誘われた。木漏れ日のまぶしい夏の日の出来事だった。肝心の瞬間はあまりにもあっけなく過ぎ去ってしまい、トビアスが夢想し続けてきたものと現実とでは、まったく勝手が違った。終えたあと、男は放心し、女は背中に作った草汁の染みの言い訳をどうするか、気にしていた。

それでも互いに愛し合っていると信じていたことができたのは、二人が若かったからだ。男と女の愛がどれだけ欲しくて、残酷で、身勝手か。自分たちは何もわかつちやいなかった。

あれから二十年もの年月が過ぎた。いまのトビアスなら、恋なんて、一時の気まぐれが引き起こす妄想でしかないと言うだろう。日常がおぼつかなくなるほどの情熱が、さえない中年男に残されているようはずがない。鏡に映る我が身を見れば、たちまちほとぼりも冷めるものを。

幸か不幸か、粗末な屋根裏部屋に鏡はなかった。

つまり、トビアス・コウクニーは恋に落ちた。

絶望的なほど、無謀な恋に。

「なあに？」

よほど間の抜けた顔をしていたのだろう。伯爵とニセ医者がかけたあと、屋根裏部屋までお茶を届けてくれたコリーは、怪訝そうに声をかけた。

「いいや、ええと、うん……そうだ」

何をどう、伝えればいいのか。あの、その、とまごついた末にトビアスの口から出たのは、我ながら予想外の台詞だった。

「——あんた、怖くないのか」

「なぜ？」

「国家の秘密がどうの……だなんてよ。女なのに。俺らは昨夜、国

軍兵に追われて――」

「女な、の、に」

困ったような表情で、コリーはトビアスを見た。

「女が政治に興味を持つことが、そんなに意外？」

「いや……そういうわけじゃねえけど」

「たいていの男は、政治は男のものだと思ってる。だけど女のほうこそ、男以上に政治に関心を持っているのよ」

「そ、そうなのかい」

「子どもを産み育てるよう創られた生き物ですもの。絵空事の未来を見せられても、納得なんてしないわ」

「ううん――」

気の利いた返事など、真っ白なこの頭のなかのどこをさがしたって見つかりっこない。トビアスの舌はもつれ、心臓の鼓動は一層速くなった。不注意にも、熱いお茶を一息に飲み干してしまい、目をむいたところをルンタに見つかった。

「大丈夫かい、トビアス」

「ああ、ちょうど喉が乾いてたんだ」

「あたしたちは、望まなくても未来はやってくことを知っているだけ。だから女は、現実と向かい合う度胸がある。あなたたち男とは違ってね。もう一杯、お茶をいかが？」

度胸か……。

総じて、男は臆病な生き物だ。誘惑に弱く、優柔不断。使命だとか、運命だとか、そんな理屈をこじつけなければ前に踏み出せない。昨夜の自分を思い出せば、事実は明白だ。だいいち、好きな女のことをもっと知りたいと願っているくせに、面と向かつては口さえまともにきけない。

いまだって意気地のない男の目は、茶器に添えられた華奢な指先を眺めるのが精いっぱいだ。

「フィリスのことは、気にしないでちょうだい」

「えっ？」

「隠しても無駄。あの子を見て、気味悪く思わない人はいないわ。あなたたちも戸惑ったはずよ」

新しく注いだお茶を差し出しながら、唐突にコリーは娘について語り始めた。彼女のほうから話をするとは思っていなかったトビアスは、正直、とても驚いた。ルンタも無言で、あとに続く言葉を待つ。

「フィリスは、見ての通りの子。あの子は誰にも心を開かない。いえ……ルークを除いては」

ニセ医者か。またしても嫉妬がトビアスの胸奥をえぐったものの、その衝動に乗じて、トビアスは思い切って訊ねてみる。

「ルークは、フィリスの何なんだ？」

「あの不屈き者は、娘に教えているだけ。読み書きとか、薬のこととか。でも、あの子は慕ってるわ。あたしよりも、ルークをね」

「あんたは、母親なのにな？」

「母親だからこそ」

自嘲気味に、コリーは少しだけ微笑んだ。

「品行方正な伯爵閣下には、縁のない話でしょうけれど。あなたならご存知でしょ？ あたしがいつたい、どんな女か」

「……噂でなら」

「どんな噂？」

「ええと、その……」

「あなたもあたしを非難する？」

トビアスは慌てて首を振る。

「俺は頭が悪いし、あんなのこともよく知らねえ。だけど噂は、噂だ。それぐらいのことはわかる。それに俺たち——まだ会ったばかりだ」

真面目くさって言うトビアスの顔を見ると、コリーは声をたてて笑いだした。

「あなたって、とんでもないお人好しね、トビアスさん」

「うん、取り柄はそれしかない」

本音が半分、やけくそが半分。しかしコリーは晴れやかに笑いつづけ、トビアスもあいまいな苦笑いで応えるよりなかった。ひとしきり笑った後、不意にコリーが真顔になる。

「親は子どもよりも早く死ぬ。それが、神が与えた摂理だわ。いつかあの子は一人になる。そのとき私は、何を残せるっていうの？
ねえ、トビアスさん。地位も、教養もない女が、たったひとりでフイリスのような娘を育てていくというのがどういうことか、分かる？」

真っ向から問いかけてくる女に、なけなしの度胸でトビアスは告げる。

「でも、あんたには才能がある」

それに、美しさも。

そう付け加える前に「よく言われるわ」とそっけない返事で返されてしまい、トビアスの勢いはそこまでになった。

「——だよな。すまねえ、俺は本当に頭がよくなって——本なんて読んだこともない。読めねえんだ」

「あたしも字は読めない」

「台詞は……？」

「耳で聞いて覚えるの」

「へえ——そいつは、すごい。ああ、大したもんだ」

「お芝居を見たことがある？」

「いや……ない。難しい話は苦手なんだ。それに、芝居つてのは、長い時間おとなしく座ってなきゃならないんだろ……？」

女の顔色をうかがいながら、トビアスは少しでも会話を長くもたせようと必死だった。

「でも、いつか見てみたいと思ってた。うん、あんたの芝居ならいいな。きつと楽しい」

「残念ね。あたしの十八番は悲劇なの」

「……」

意気消沈するトビアスに、さきほどの苦悩はどこへやら、「コリー

はとびきり挑発的で、とびきり魅力的な微笑を見せた。

「ご用心なさいな。女は甘く見られるのが嫌いなものよ」

やはり噂どおり、酷い女かもしれない。

そう考えながらもトビアスは、結局コリーの笑顔に見惚れていた。部屋から立ち去る後姿がまた、凜としていて美しかった。

大きく開いた背中から目をそらし、トビアスは懔然として呟く。

「男だって、同じだぞ」

振り返ると、微妙な表情を浮かべたルンタと目があつた。

「おい、何が言いたい」

ルンタはひょいと肩をすくめた。

「何を言っても無駄だと思つてさ」

+

「さつきは助かつたぜ」

運河の兩岸を行きかう人の群れで、橋はごつたがえしていた。

橋といつても道幅は広く、端には屋台が建ち並ぶ。果物や魚を手
に、物売りたちがしきりに声をかけてくる。吹き抜ける風にフード
を押さえる仕草で、ルーグは顔を覆った。橋を渡った先は旧市街だ。
「コリーのやつ、お前が貴族だつて聞くや、目の色を変えやがつた
んだ。七〇〇ギブリンだなんて知つたら、もつと寄せせと言いだ
すに決まつてる」

「他言無用だと念を押したはずだ」

「そう責めるな。あいつの腕は確かだ。それに今回ばかりは人手が
必要だ。人間一人、亡命させるのとは話が違う」

「その甘さが、いつかお前の命取りになるぞ」

「おいおい、ご機嫌斜めだな。俺に言わせりゃ、いまの言葉、その
ままお前に返してやるよ……あ。ひょつとして閣下——妬いてるの

か？」

冷やかな目で見据えられて、ルーグはたちまち能天気な笑いを消した。

「……何でもない。往来の真ん中で剣を抜くな。で、旧市街で何をする気だ？」

まわりついてくる物売りを避けながら、キオは、歩く速度を落とさず話し続ける。

「『カロードン・クロニクル』の印刷所に行く」

「ダシユウツドの工房か」

キオは城門の前で立ち止まると、ルーグを見上げた。

「気になることがある」

キオの説明するところは、こうだ。

スカリスブリックが殺害されたあと、『カロードン・クロニクル』の広告欄には依然、彼が生前連絡手段にしていた暗号文が掲載され続けた。これは、生命の危険を察したスカリスブリック自身が仕組んだからくりなのか。それとも、スカリスブリックが死んだという事実を知られたくない誰かの手による偽装なのか。もし後者だとすれば、それは、スカリスブリックを殺した人間が糸を操っているに違いない。つまり敵は、いまだこの都市のどこかに潜んでいる。「ダシユウツドがどこまで事情を知っているのか、確かめたい。ここでササラクが海上封鎖におよべば、ラーゲールは宣戦布告をする。我々の敵の目的が両国の開戦にあるのなら、急がなければ」

「お前たち王党派は、ラーゲールと手を組んで、現政権を倒したいんじゃないかったのか？ 開戦には賛成のはずだろう——おっと」

そのとき民兵の制服姿が視界に入り、二人は即座に一番近い路地へと飛び込んだ。

石壁に身体を隠してうかがうと、前方の建物をと리카こむように人垣ができています。中をのぞこうとする彼らを、複数の民兵たちがせつせと押し戻していた。

「昨日までのお仲間が大勢いるぞ。いったいどうした……？」

「あの建物——」

「待て、閣下。奴らの前に出るのはまずい……」

「この距離なら大丈夫だろう。それに連中の顔色をよく見る。我々が誰か、とてもわかるような状態じゃない」

そしてキオは列の間に割り込むや、好奇心旺盛な野次馬の声音で「こいつは何の騒ぎだい？」と訊ねた。ルーグがにやりとしたのは、キオの口調が、下町育ちの話し方そのものだったせいだが、笑いはすぐさま消え失せた。

「親方がやられちまったんだってさあ」

答えた男は、人垣の向こうを一目見ようと背伸びをするのに熱心で、通りすがりの若造に注意を払う様子はなかった。

「親方——？ ダシユウツドの親父さんかい？」

「物盗りだつてよお。部屋ん中めちやくちやにされて、血まみれでぶつ倒れてたつて話さあ。ダシユウツド親方は守銭奴じゃねえ。新しい機械を買ったばかりで、懷はすっからかんだったけど、雇った職人にはちゃんと給料を払ってた。泥棒に入っただけいいが、盗るもんも何もねえってんで、きつと腹いせに殺されちまったんだろなあ……」

「そりゃひどいなあ。親父さんは、今日死んじまったのか？」

「見つけたのはセルトーさあ。親方は朝が苦手だったろう？ だけど、昼飯になつても二階から降りてこねえ。腹でも壊してるのか、前の晩に飲み過ぎたのか。ちよいとばかりおかしいてんで、セルトーの旦那が見に行った。そしたら、辺り一面、血の池地獄だったてよう。そのどまんなかで、親方がひっくり返ってたんだってよう。かわいそうに旦那、すっかり腰抜かしちまったって……」

ルーグはキオの肩を掴むと、耳元で声を低くした。

「どうやら、先を越されちまったみたいだぜ」

キオはいったん列の後ろに戻り、険しい顔つきで工房に目を注いだ。母屋は二階建てで、隣接する作業場は平屋だった。住み込みの

職人は、母屋の屋根裏部屋で寝起きをしているのか。

「ダシュウッドが殺害されたのは偶然じゃない。これではつきりした」

「おい。気の毒に、ぐらい言ったらどうだ？」

「口に出したところで、ダシュウッドは生き返らない」

「ああ、さようでございますか」

「口先だけの同情より、いまこの場でやれることを実行するほうがいい」

キオの視線の先を一瞥し、ルーグは顔をしかめる。

「好きだぜ、お前のそういうところ。だがな、冗談でも工房の中を見たいなんて言ってくれるなよ」

「ダシュウッドはやはりスカリスブリックと会っている。殺した人間の目的は、十中八九、口封じだ……いや、それだけではすまないのかもしれない。ダシュウッドが、我々が想像するよりも多くのことを知っていたのだとすれば——」

「なかなか興味深い説だ。けどな、見てみる。工房の中は民兵たちでいっぱいだ」

「内務省の連中はまだ到着していない。中を見るならいましかない」

「なあ、お前ってやつはどうしてこう、面倒ばかりを引き当てるんだ？」

「ルーグ」

じつと見上げてくるキオの目を避けるように、ルーグは空を仰ぎ、それからあらためて印刷所の屋根をじっくり眺めやった。

「……二階から押し入るって？」

「正面からは入れない。見張りがいる」

「高いところは苦手じゃなかったのか？」

「牆頭だつて登ってみせる」

「そりゃ、楽しみだ」

さらに一分ほどルーグは考えつづけ、やがて深い息を吐き出した。
「——やっぱり気乗りがしない」

「こうしているうちにも時間は失われていく。ここで国軍兵と鉢合
わせたいのか？ 民兵のなかに、私の顔を知っている者がいるか
もしれない。ルーグ、早急に民兵たちを工房から退去させろ」

言いながらキオの足は、工房とは逆の方角に歩き出していた。

人垣を離れる背中に向かって、諦め顔のルーグが呟く。

「……ご随意に」

十

召集がかかったのは、午後も遅い時間だった。

室内に踏み込んだ途端、凄惨な光景に全員が言葉を失った。切り裂かれた喉から流れ出たおびただしい量の血液のなかで、男は絶命していた。両手の指を奇妙な形に折り曲げ、大きく見開いた目で虚空をにらみつけて。

民兵の男はいまもまた、母屋の二階に横たわる死体を思い出し、嘔吐をこらえなければならなかった。

勇猛果敢と誉れ高い国軍兵たちも、顔をしかめるに違いない。

彼らが到着するまで、野次馬は遠ざけておくべきだった。さもないと、『カロードン・クロニクル』のごとき大衆紙が、すぐさま大袈裟に騒ぎ立てるだろう。殺人鬼 だとか、処刑人 だとか、

悪魔 だとか。実際、このところカロードンは物騒な事件が多い。まるで内乱の直前に戻ったようだ。

そこでふと、男は気づいた。殺されたダシュウッドは、『カロードン・クロニクル』の印刷を請け負っていた工房の主だった、と。特ダネを載せられず、ダシュウッドはあの世でさぞかし悔しがっていることだろうな――。

「いやはや……！」

場違いな声に我に返ると、人垣をかき分け、長身の男が列の前に抜け出てくるところだった。「押すな」「何をしゃがる」と、喧嘩腰の台詞が飛びかい、民兵の男は面倒くさげに「騒ぐな！」と怒鳴った。

「ただちにこの場から立ち去れ、野次馬ども。さもないと、騒乱罪でぶちこむぞ！」

「敬愛なるカロードン市民の皆さま、聞いての通りでございます。

旦那方の邪魔をなさいますな。さあさあ、ご機嫌うるわしゅう——」

「そういつこった。だからお前も、とつと失せる」

民兵は、相手の全身を一瞥しただけでそう言い捨てた。

なにしろ男の格好ときたら、まっとうな市民にはとても見えなかった。顔も身体もすつぽり包みこんだ外衣はひどく汚れているし、歩きたびにじやらじやら、耳障りな音がする。

「どうかお待ちを、兵隊の旦那さま。小生に、お手伝いできることがあればと思ひまして——」

「手伝い？　そうやって話を聞きだそうだったって無駄だ。さては、どこその新聞に雇われたか？　ははあ、『クロニクル』が発行できないのをいいことに、儲けようって魂胆だろう」

「とんでもない。小生は通りすがりの薬の行商。幸い、医業にも多少、通じております。聞けば、世にも恐ろしい事態が、親方の身に起きたとか……？」

やれやれ、二セ医者か。

長命や瘦身や美貌が手に入るなどと、言葉巧みに不安や欲望をあおっては、出所のあやしい秘薬　とやらを売りつけて、金儲けを企む不届き者。免状もないくせに、まじないじみた行為で敬虔な民をたぶらかし、神を冒瀆する叛逆者が何の用だ。

民兵の男は、図々しく扉の内側を覗こうとする二セ医者を、乱暴に押し返した。彼は、何でもかんでも病気のせいにしたがる医者が嫌いだった。それ以上に、自分より背が高い男は、大嫌いだった。

「あいにく医者の出番はない。もう死んでる。喉笛をざっくり、切り裂かれちまってな」

「切り裂かれた！」

男は頓狂な悲鳴を上げ、怯えたように声を震わせた。ほかの民兵たちが、いつせいに二セ医者を見る。

「喉を！　切り裂かれて！　つまり旦那は、人殺しだとおっしゃる」

「ああ、間違いない。まったくむごいことをする。こんな所業をし

て平気でいられるなんて、犯人はとんだ人でなしだ。さあ、もういいだろう。商売ならほかでやんな。美顔水や毒消しは、死人にや用無しだ」

「人の死は神聖なもの、小生の卑しい商いで汚すつもりなど、これっぽっちもございません。ですがひとつだけ——この残忍な行い、人の仕業とは限りますまい」

「じゃあ、誰がやったってんだ？」

「悪魔でございますよ」

「悪魔……？」

「つい先日も、運河で、喉を掻つ切られた死体があがったというではありませんか。連中は夜な夜な、このカロードンを徘徊しているに違いありません」

民兵の男は笑い飛ばそうと思った。だが、野次馬の間にざわめきが広がると、調子に乗った二セ医者も、もっともらしく咳払いをして続けた。

「主教さまが嘆かれるのもうなずけます。昨今は不信心な人間が増えた。悪魔どもは喜んでおりましような。彼らは容易に心の隙間に入りこむ。妬みや嫉み、人間のもっとも弱い部分に、悪魔はつけ入り、我々を思わぬ行いへと駆り立てる。誰が手を下したにせよ、そのとき、かの者のなかには悪魔が棲んでいたのです。……ああ！やはり！」

そう叫んだ二セ医者は、制止も聞かず、おもむろに手袋をした左手を伸ばした。戸口の柱を撫で、指先のおいを確かめると、「ごらんなさい！」と手袋にこびりついた薄黄色の粉を示す。

「まぎれもない、これは硫黄の燃え滓だ。古来より、悪魔が現れたあとには、硫黄が燃え残るとされております。恐ろしや、この家には悪魔が宿っているのですぞ——」

「まさか」の声は、「悪魔だ」という野次馬の悲鳴に打ち消された。

「ここにございますのは、はるか大陸の聖なる泉から汲みあげた水。

小生が居合わせましたのも、何かの巡り合わせでしょう。この家を
浄めよという、神の啓示に相違ございません。旦那方、ただちにこ
の呪わしい建物の外に出てくだされませ。一刻も早く悪魔祓いをし
なければなりません。さあ、今すぐに、急いで――」
野次馬たちは波立ち、後ずさを始めた。彼らは口ぐちに神の名
を唱え、二セ医者の手元をのぞきこんだ民兵たちは、落ち着かない
表情で互いに顔を見合わせた。

十

「……ずいぶんと派手にやってくれたもんだ」

部屋の入口で、無精髭を撫でながらルーグは唸った。その背後で、
床板がかすかに軋み、天窓から落下してきた影が着地した。

「下手な芝居ほど、見苦しいものはないな」

「やかましい。誰のために小芝居をうってやったと思ってる」

返事をするかわりに、キオは部屋に足を踏み入れると、隅々にま
で目を走らせた。床は血で覆われ、充満する臭氣に一瞬、息が詰ま
った。

「予想以上に凄惨だ。お前の出まかせが通じた訳がわかった」

その部屋の中央で、工房の主は仰臥していた。

ルーグは、まず死体の周りをゆつくりと一周した。足元を汚さな
いよう注意を払いながら、遺体の傍らに片膝をつく。亡骸に触れる
前に、手袋ははずした。

「どうだ？」

「右から左へ、背後から一撃か。いい腕だな。ダシユウツドの親父
さんは、声も出せなかっただろう」

キオは、傷口を指でをつつきまわしているルーグの横に立ち、遺
体の上に屈みこんだ。

「感心している場合ではない」

「血溜まりに足を突っ込むなよ、閣下。足跡が残っていないところを見ると、部屋は物色しなかったようだ。少なくとも、物盗りが目的じゃないことはたしかだ」

「スカリスブリックも右喉を切られていた」

「そりゃ奇遇だな」

「襲撃した男は左利きか？」

「可能性のひとつではある。利き腕が左と断定はできないが、もしそうじゃないなら、敵は相当、器用なんだろうな。ただし男とは限らないぞ」

「というと？」

「殺害に使われた道具は薄刃だ。軽いが、わずかな力でもよく切れる。刀身はせいぜい、手首から先に収まる程度と思う。隠し持つにも都合だ。それと、もうひとつ。注目すべきは傷の角度」

「角度？」

ルーグが指し示したダシュウツドの喉を、キオは凝視した。ぱっくり口を開けている断面の奥には、気管らしいものも見える。

「水平じゃないだろう？」

「ああ……」

「分からないか？ 後ろから喉笛を搔つ切るときは、相手の動きを封じておいて、始末をつける。——こんな風に」

次の瞬間、驚くべき速さでルーグは立ち上がった。右手でいきなりキオの頭髮をひつつかみ、相手の身体ごと壁に向かせる。同時に左手で腰の短剣を引き抜き、すかさず無防備なキオの喉につきつけた。

「……何の真似だ」

上擦った声に、ルーグが笑みをうかべた気配があった。実際の、その気になれば、二秒とかからずに狙った相手の生命を奪えることを、ルーグは証明してみせたのであるが、不意打ちを食らった驚きで、キオは硬直した。

「敵の、さ」

キオの首筋に刃先をあて、ルーグは続ける。

「ダシュウツドの傷口は、下に向かって大きく傾斜が加わっている。つまり親方より襲撃者の背は低い。……スカリスブリックの背丈は？」

「記憶にある限りでは、低くはなかったと思う——」

「おそらく、スカリスブリックの首の傷も傾いていただろうな。ダシュウツドは体格こそ人並みだが、職人だから力もある。身体の大きさでも、力でも、襲撃者は親方に劣っていた。標的を確実に倒そうとすれば、背後から近づくしかない。それに……」

「——私を放せ」

「まだ話の途中なんだがな」

「放せ、と言ったぞ」

「自分の生命を脅かす相手の姿が見えないってのは、ちょっとしたものだろう？ 伝わるのは、声と力だけ。こうやって口を割らせるのさ。そうだな、たとえば——」

ルーグはキオの耳にささやいた。

「あの海図について、お前はどこまで知っている？」

「……ダシュウツドと違って、私は丸腰じゃない」

「閣下が武器を抜くのと、俺が左手を動かすのと、どっちが速いか。試してみるか」

「七〇〇ギブリンが惜しくないのなら、好きにしろ」

「——ふん」

数秒後、ルーグはキオの身体を乱暴に突き放した。

キオは前のめりになって、目の前の壁に手をついた。その壁も、ダシュウツドの血で汚れていた。見上げると、ダシュウツドの喉から噴き出した血飛沫は、天井近くまで届いた跡があった。

「女でも殺せる、か……」

「ま——俺が女なら、返り血を浴びるのは耐えがたいがね」

間延びした声でそう応えたとき、男の顔は、いい加減なニセ医者

のそれに戻っていた。直前にその全身から発せられた殺気も、捕食者のまなざしも、ひとを小馬鹿にしたようないつもの表情に置き換わっていた。

男の変貌を横目で捉えつつ、キオは壁の前でしばらく無言だった。二セ医者の言う通り、口封じが目的であれば、人目につく危険を冒して、わざわざ工房を訪ねてやることはなかった。残忍な手口で世間を騒がせるくらいなら、夜道で襲えばいいだけの話だ。酔っぱらいがひとり、運河でおぼれたところで、誰も気にとめないだろう。必要な情報を得ることに成功したにしろ、しなかつたにしろ、犯人はおそらく、はじめからダシユウッドを生かしておくつもりはなかったに違いない。

ダシユウッドの手を取ったルーグは、「抵抗する間も与えなかつたらしい」と呟いた。

肉厚の手に目立った傷はなかった。インクの染み付いた爪や、掌に見える無数の細かい傷は、襲撃者の攻撃から身を守ろうとして受けたものではなく、徒弟時代から積み重ねてきた歳月が刻んだものだろう。ルーグは、職人の手を胸の上で組ませて、「気の毒に」と指でなぞった。開いたままの瞼も閉じてやった。

「思ったよりも瞳の混濁は進んでいない。大胆な相手だ。白昼堂々、襲ったか——」

「よほど腕に自信があるとみえる」

「人目があるほうが、燃えるって性質かもな^{たち}」

そう言いながらルーグはゆっくりと立ちあがり、キオをみやつた。「閣下。一つ、提案がある」

十

敵が動くのを待つよりも、こちらから誘い出す。

それがルーグの提案である。

ダシュウツドの線が切れたせいで、予定が狂ったというのが本音だが、スカリスブリックが死に、スカリスブリックが接触したと思われるダシュウツドが死に、レイヴンクロフトの腹心であるカルーがスカリスブリックを追っていたとなれば、行きつくところはレイヴンクロフトだというのも、さしあたっての結論だった。背景にあるのがラッゲールとの外交問題なら、レイヴンクロフトの近辺をうるついでにすれば、敵が姿を見せる可能性は高い。

「せいぜい、美味そうな餌になろうぜ」

ダシュウツドの工房を離れたあと、しばらく別々に歩き回った。大聖堂で落ち合い、そのまま時間をつぶした。何回か鐘の音を数えたころ、暗くなってきた旧市街を出てレイヴンクロフトの居宅に向かった。

官職についている連中はたいてい、郊外に屋敷を保有し、これ見よがしに自前の馬車で市内に通ってくるが、実務家のうえ独身のレイヴンクロフトは、官庁街にほど近い住宅街に部屋を借りていた。洒落者ではあっても、華美な生活はお好みではないらしい。それに間借なら、女中の数も少なくて済む。口の堅い使用人ほど得難い財産はないと、かの御仁は知っているのだろう。

ルーグが近所の玄関口をまわってみたところ、わかったのは、レイヴンクロフトはこの数日、ほとんど部屋に戻っていないという話だけだった。

しかし、気になる点もあった。何軒目かで出てきた女が、ルーグを見るや「また物乞いな」と怒りだしたのだ。

「古着はみんな、昼間来た男にやっちまったから、もう何もないんだよ。先週も来てたつけねえ。なんだい、まさかあの物乞い、うちは気前がいいとか、触れて回ってるんじゃないだろうね。よしとくれ、とんでもない。甘い顔を見ると、すぐこれだ。さあ、出ていかないと、人を呼ぶよ」

「ご慈悲を、奥さん。せめてその、前に来た野郎ってのがどんな男

だったか教えてくれよ。そしたら、そいつからいただくよ。同業には、同業の掟つてものがある。独り占めなんて、許しちゃいけない」「顔なんて覚えちゃいけないよ。汚いっただけさ。あんたみたいだね」「そいじゃ、言葉はどうだい。どこの田舎者が、めかしこもうつてんだ」

「言葉……？ ああ、そういえば、あれは外国人だね。おかしな訛りがあつたからね。おおかた、商業船にでも乗って、カロードンに流れ着いたんだろう。ほら、いつまでもこんなところに居座つてないでくれ。このパンをあげるからさ。ちよつとばかり焦げちまつたけど、今朝、あたしが焼いたんだよ」

——外国人。

「ラーゲールと思うか？」

戻ってきたルーグは、雑穀入りのパンを頬張りながら、キオにその話をした。

「食うか。美味いぞ」

「結構」

「食っておけ。昼から何も食ってないはずだ」

ルーグは半分に割ったパンをキオに放り投げた。

「嗅ぎまわってるのが仮にラーゲールだったとして、スカリスブリックを追っていた連中と同一とは限らない。彼らが知りたいのは、内務大臣レイヴンクロフトの動向だという可能性もある。あるいは、マレク・カルー」

「マレクか……」

「あの副官は、一筋縄ではいかないという印象を受けた」

「まあ、敵に回すと厄介な相手だ。涼しそうなのはうわっ面だけだな、腹のなかはとんだ曲者よ」

「どういふ男だ？」

「母親は下町の踊り子だ。いや、歌い手だったかな？ いずれにせよ、父親の顔を知らずに育ったくちだが、本当のところは、親父さんは由緒ある一族の出身だ。その辺の事情は、閣下も想像がつくだ

ろう？ 教会が認めた結婚ではないとはいえ、マレクはたった一人の息子だった。財産は残してやれないかわりに、教育を残してやるっていうんで、マレクは法学院まで出た。ところが、だ。内乱のせいで世の中の仕組みは変わったが、金の話をするときには、いつだって縁故が肝心だ。ご大層な学歴でも、所詮は下町育ちの庶子だからな。いろいろあつて、もともとひねくれた性格は、余計に陰険になった。官庁街の弁護士事務所で生計を立てていた野郎に目をつけたのが、フランス・レイヴンクロフト卿」

「マレク・カルーについて、よく知っているようだな」

「ああ」

ニセ医者は、そこでひとつ、深い息を吐いた。漆黒の闇の先に、城壁の石垣が浮かんでいた。運河から吹くはずの夜風も、細い街路には届かなかった。石畳に二人の足音が響く。

「あの男とは友達だった。不幸なことに」

友達、か。

それは、思いがけない告白だった。大臣の秘書官とニセ医者が友人だということも意外ではあったが、キオが戸惑った事情は別にあった。

友達 は、自分には遠い言葉だった。

伯爵家の嫡男として生まれた自分の周りには、使用人はいても、幼馴染みや級友はいなかった。グレートナを抜け出してから、敵か、味方かのどちらかになった。ラッゲールで築いた人脈は同志とよべなくもないが、それだつて一皮むけば、この身の生存という抜き差しならない利害を賭けた命綱であり、底の見えない混沌だ。

だが、トビアスとルンタの二人は、キオを 仲間 だと言った。

ひと月足らずの付き合いで、素性の知れない人間を 仲間 と認める神経にはいささか驚いたが、キオもまた、彼らを切り捨てることができなかった。ふと、これは貴族たる者の義務や、責任といった類の話だろうかと思ってもみたが、自分のなかに爵位に対する執着はないと知っているのは、ほかならぬキオ自身だ。

考え出すと、釈然としない問題だった。実際、そうした自分の甘さを二セ医者に見抜かれたのは、失点というほかない。

金のために裏切るが人間がいるなら、金で買える信用もあるというのが、ルーグを選んだ理由だった。案の定、海図と聞いてルーグは顔色を変えたものの、すぐにそこでトビアスやルンタを引き入れたのは、キオに対するあからさまな返報だ。自分を陥れるような素振りを見せれば、そのときは二人の生命の保証はないという脅しであり、要するに、彼らは二セ医者の人質にされたも同じだった。

もっとも、ルーグの反応は予想の範疇ではあった。七〇〇ギ布林もたしかに法外だったが、要求されれば一万だろうと出す用意はあった。愛国心だ、忠誠だと齒の浮くような台詞を聞かされるより、理屈抜きの強欲のほうがましだ。他人を巻き込んでしまったのは明らかにキオの失態とはいえ、すかさずそれを利用する男の冷徹な判断は、信用していい。もし自分が二セ医者立場なら、同じことをやっただろう。

そんな現状を足し引きしてみたうえで、キオは、二セ医者がこの依頼を請け負う気はあるという結論を出した。ルーグは、ひとたびその気になったら、けっして後にはひかない男だ。釈然としないといえ、目の前の男もだ。信用と信頼は別物だと、キオに教えたのは二セ医者だったが、己はこの男を信用しているのか、それとも――

雑念に支配されそうになる意識がふいに引き戻されたのは、隣で「閣下」と声がしたからだった。

「後ろに三人、ついてきてる」

ルーグは「振り返るなよ」と言うと、露店街に抜ける道を選んだ。雑踏に出るや歩調を落とし、屋台を覗く顔で、キオは周囲に目を走らせた。路地の両側に並ぶ露店の列は、行き交う人混みで半ば隠れていた。「あぶった腸詰だよ」「林檎酒はどうだい」と、左右から客引きの声が飛んでくる。揺れる人波の向こう側から、こちらをうかがっている視線を横目でとらえた。店を変えながら一定の間隔

を保ち、相手もまた、夜店を物色中のふりだった。

「レイヴンクロフトを張つてた連中か？」

「おおかた、そんなところだろう。前からもおいでなすつたぞ」

「あわせて七人か」

「いや——どうやら、九人だ」

「多いな」

「同感だ。ここはお引き取り願うとするか」

「どうやって？」

「どうやって？ さて、どうしよう？ 考えなきゃ、名案なんてものは出てこない」

ルীগはすばやく手をのばし、露店の荷台から、ひょいと林檎を一つ掴んだ。そのまま林檎をキオに押しつけたとき、売り子が「あつ」と声をあげた。

「何だ、これは」

「智恵の実」

無然とするキオにそう応えると、ルীগは追いかけてきた売り子に向き直る。

「おい、盗人。代金を払え」

怒鳴った売り子が、林檎を手にしたキオに掴みかかる寸前で、ルীগが間に割り込んだ。外衣のフードをはずすと、威圧するような目つきで相手を一瞥し、見下ろされた売り子がたじろいだところを、さらに一歩、詰め寄った。

「こちらの若様は、名のある家のご令息であられる。畏れ多くも盗人呼ばわりとは、なんと無分別な行いか！」

「はあ——ですが」

仰々しい上流階級の言葉で、ルীগは続ける。

「ここで仔細を明かすのははばかられるご身分ゆえ、これ以上は控えさせてもらうが、若様はその徳の高さから、下々の者の生活について見識を深めたいと仰せだ。そこで、こうして粗末な格好に身をやつし、秘かに市内にお出かけになられたというわけだ。貴君の無

礼、いますぐ、この場に治安判事を呼びつけても一向に構わぬが、事情が事情ゆえ、話を大袈裟にするのは若様もお望みではなかるう」

「はあ——ですが、そのう……」

「および、治安の護り主たる彼らは、国家に弓する叛逆者どもを取り締まるという役目を、神聖な政府より与えられている。貴君の無知のために大きな使命を妨げては、国益を損なうことにもなりかねん。国のため、すなわち民のために、ここは貴君の振る舞いを不問に付すとして」

「はあ——ですが、そのう、お代は……」

「貴いご身分にあらせられるお方は、自ら財布を持って買い物をする必要などないのだ——我が主は、下賤の者たちの習慣をご存じなかった。ついては、供の者が少し離れて我々に従ってくる。先刻からこちらを見ている、あの連中だ。彼らが金を払う。面構えは悪いが、忠義にあつい家臣である。金は彼らにもらうのだぞ——わかったか」

「はあ——さようでございますか」

果物屋の売り子は、値踏みをするような目でキオとルীগを交互に見比べ、「ううん」と唸った。それからルীগが示した男たちの姿を振り返り、もう一度「ううん」と唸った。そして、自分の店を眺めやって、しばらくぶつぶつ呟いたあと、キオに向かっていって歯を見せた。

「承知いたしましたでございます、旦那さま。今後とも、下町の果物屋をご贖員に」

「ちなみに、言われたままの金額を支払うようにと、彼らには申し渡してある」

深々とお辞儀をして露店へ戻っていく売り子を見送って、ルীগはキオをうながした。

「走るぞ」

狭い路地を、複数の足音が追ってくる。

走りながら、キオは短剣を抜いた。ルーグもまた、外衣を脱ぎ捨てていた。

二人の前方から人影が飛び出すや、キオはすかさず上体を伏せた。同時に、数本の金属が飛来する。剣を抜き放ったルーグが、いくつか叩き落とした。

キオは速度を緩めず、正面の敵に突き入れた。

鋭い音が路地に響きわたる。両者は激しくぶつかり合い、闇のなかで火花が飛び散った。何回目かに送りこんだ一撃に、骨をえぐる感触があつた。直後、相手の男は悲鳴を上げて武器を取り落とした。その間に、敵は背後からも迫っていた。

両側から突き出される刃を受け流し、反動を利用して敵の腹を蹴り上げる。蹴られた男は呻いたが、失神させることはできなかった。頭上からも刃が襲ってきた。鼻先で食い止めたものの、刃が少し碎けた。

短剣では、力で押されるのは不利だった。まずいと思っているうちに、横から別の気配を感じた。

刃が閃く。

気づいたときには、男がキオに突進してくるところだった。だが次の瞬間、男は突然、声もあげずに前のめりに倒れこんだ。見ると、その背中には、ルーグが放った短剣が突き刺さっていた。

それきり男は動かなかつたから、心臓を貫いたのだらう。

一瞬、乱れが生じた相手の剣をなぎ払って、キオは間合いを確保した。石畳の上に転がった敵の長剣を、ルーグに向かって蹴り上げてやりながら、すばやく周囲を視野におさめる。

残りは六人。

目の前で仲間が死んでも、他の男たちにひるむ気配はない。もっ

とも、どの顔も布で覆われていて、暗がりでは表情が判然としなかった。

「昨夜の奴らとは、腕が違うな」

キオとルーグは背中合わせに立っていた。

「借用書を書いた覚えはないんだがな。この武器は、ラッゲールの鋼から打ち出したのか？」

案の定、ルーグの挑発に返事はなかった。

かわりに、敵は一気に輪を狭めてきた。武器が空気を切る音に、互いの息遣いが混じる。このまま闘いが長引けば、人数で劣る側に勝ち目はない。敵もそれを承知していて、交互に剣を繰り出してくる。

無駄のない、計算された動きだった。彼らは国軍兵とは違う。技量も、精神も、徹底的に訓練された集団だ。戦場で戦うためではなく、もっと別の目的のために、鍛えられた男たちだ。

激しい動きで、全身から汗が噴き出していたが、キオの背筋を冷たい波が駆け抜けた。

動揺を察したように、敵の攻撃が勢いを増す。気づくと、キオはルーグから引き離され、壁際に追いやられつつあった。

「ルーグ！」

包囲を破らなければ、二人ともやられる。

ルーグは、奪った剣の切っ先で敵の一人を焦らし続けていた。おそらく、予想とは少し違う相手であると、そろそろ気づいているだろう。キオの声を聞くと、ルーグは飛び込んできた男の一人を蹴り飛ばした。

切りこんでくる敵を避けながら、ルーグは身をひるがえして叫んだ。

「目え閉じて、息を止めている！」

ルーグが石畳に投げつけた塊から、強烈な刺激臭とともに、炎と煙が立ち上った。

「走れ！」

煙幕をくぐりぬけると、
「硫黄だ」と思った。敵は目を抑えたり、はげしく咳こんでいたが、なお二人を追ってくる。

狭い路地を曲がるうちに、やがて方向が分からなくなった。目をやると、ルীগもまた、険しい表情だった。袋小路に追い込まれたら最後だと思いつつ、立ち止まるわけにはいかなかった。

そのとき、正面方向から近づいてくる気配を感じた。

あわただしく回転しながら、車輪の音がせまってくる。荒々しい馬のいななきや、蹄鉄の音がそこに加わり、ルীগは舌打ちをして背後の追手を振り返った。

——馬車だ。

前をふさがれたら、完全な挟み討ちだった。立ち往生する二人に敵が追いついた。彼らも音を聞きつけたようだ。逃げ場を失った獲物に向かって、慎重に距離を詰めてくる。

音がいよいよ近づく。

石畳に反響する車輪の轟音とともに現れた車体は、速度をまったく落とさないまま、猛然と突っ込んできた。

車輪が火を吹きだし、驚いた馬が前脚を振り上げて立ちあがる。

車体は大きく横滑りしながら路地をふさぎ、壁に身を寄せた二人を押しつぶす寸前で急停止した。

車体も馬も、真っ黒だった。紋章や、持ち主を識別する印がないかと探したが、どこにも見当たらなかった。

何者だと訝ったとき、乱暴に扉が開き、中から怒鳴り声がした。

「早く乗って頂戴！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0052j/>

西風の見たもの What the West Wind Saw

2010年10月8日14時14分発行